

一橋大学基督教青年会

会報第 73 号



(2021 年 12 月 11 日 YMCA 一橋ホールでのクリスマス会)

2021 年12月発行

一橋大学基督教青年会会報 第73号(2021年12月発行)

目次				頁
巻頭言	コロナ禍転じて福となす	齋藤金義	昭46経卒・昭48法卒	1
提言	これからのYMCA	橋田陽平	商3年	2
寮生活	久々に飲み会しましょう	満井一成	平27卒	4
	土岐先生とバイクと私と、少し哲学～1	菅野浩生	平5経卒	5
	土岐先生とバイクと私と、少し哲学～2	豊 義人	平5法卒	7
	土岐先生とバイクと私と、少し哲学～3	淵辺 穰	平6社卒	9
	富田寮母さんの思い出	小栗真吾	昭57経卒	12
随想	学習支援の3カ月	吉田 翔	法1年	15
	自分史(高校～現在)	松尾圭祐	法1年	18
	正しさの難しさ	猪股梨玖	法2年	21
	親のありがたみ	高岡竜成	法2年	23
	大学3年生	桑江竜威	昭3年	25
	コミュニケーションについて「考えて」きたこと	鳥居大朗	商4年	27
	近況報告 ジョギングで広がる新たな世界	崔 勇	平2法卒	29
実用	ヨガと日常	下野 治	経3年	30
	国立における居酒屋の研究	小林莉季	経4年	33
私の本棚	シナモンロールにハチミツをかけて	角 颯真	商2年	36
芸術評論	台湾ポップスの中の原住民族アーティスト	樋口祐熙	社1年	39
	They Shall Not Grow Old	今川明人	商4年	43
論説	教育の個別「最適」化	岩切龍聖	社2年	46
	ヨーゼフ・ボイスと宇沢弘文の視点から紐解くサステイナブルな社会	岩崎友哉	経2年	48
	原語と政治体制の関係～『1984年』を手掛かりに	松原悠紀	社4年	51
	なぜ日本の大学で体育会が活発なのか	弓場耀平	社4年	55
聖書の世界	心の貧しい人は幸いです	山本 通	昭45経卒	58
追悼文	故鈴木一策兄を偲んで	宮岡五百里	昭43社卒	61
	渡辺滉先輩を偲んで	堀地史郎	昭30商卒	66
	父の思い出	成田 章	成田政俊様ご長男	68
活動報告	YMCA一橋読書会の活動について	佐藤周一	昭54法卒	69
	2020年度一橋祭講演会報告	鳥居大朗	商4年	76
	同 付記	儀賀裕理	昭46商卒	77
	中国人民大学交流会実施報告	寮生有志		79
	夏季修養会実施報告	寮生有志		82
	2021年度一橋祭『LGBTとキリスト教』実施報告	佐藤周一	昭54法卒	85
	寮生・OB合同 クリスマス会実施報告	齋藤金義	昭46経卒・昭48法卒	86
	理事会だより	齋藤金義	昭46経卒・昭48法卒	87
編集後記		編集人		89

巻 頭 言

コロナ禍転じて福となす

理事長 齋 藤 金 義 (昭 46 経・48 法)

コロナ、コロナで昨年从去年から今年とうんざりする程コロナの話が身近な話題というか最優先事項になって久しい。今年 11 月に入ってから日本の感染者数は激減し、先行きに一縷の光が見えたと思ったら、アフリカでの変異株がまたぞろ猛威をふるい、欧米はじめ世界的に衝撃を与える事態になっている。コロナで経済的に困っている人が大勢おられることは言うまでもない。飲食店、旅館、ホテル、旅客輸送事業、特に国際線を中心に航空会社の打撃は相当なものがあり、関連して航空機メーカーも苦境に陥っている。身近なところでは、これらの飲食や旅行業の落ち込みにより、アルバイトや臨時雇いの人も職がなく、困っている。しかし、他方、このコロナで潤っている人もいる。まず、医療関連需要として体温計、アルコール消毒液、ワクチン製造医薬品メーカーがあり、在宅ワークが盛んになり、TV会議用PC、スピーカー、マイクなども相当売れている。また、コロナのため港湾荷作業が大幅に遅れた結果、港に滞留船が増えたことで、海上運賃の高騰が著しい。コロナ前、日中間のコンテナ運賃は200ドルであったものが現在2千ドルと10倍に跳ね上がっている。今の海上運賃のレベルだと、1回の海上輸送で船1台が購入できるほどとも言われており、海運会社の株価はうなぎ上りに高騰し、正に戦争景気以上の儲けぶりである。また、在宅ワークが日常化したことで、都心から離れた郊外の戸建て住宅、それも広めなもので、戸建て別荘の売れ行きが良くなり、低迷していた別荘価格も持ち直している。言えることは、困っている人は困っているという声が大きくなっているが、潤っている人は黙して何も言わないのが常である。コロナを奇禍としている関係者はそれなりにいることは、また、世の常、仕方がないことかもしれない。

こういう中で、コロナによって私たちの生活や働き方が大きく変わったことは間違いない。その一つに在宅ワークがある。寮生の一人がインドネシアの外資系不動産会社でトレーニーとして働きたいという話があり、色々相談して分かったことがある。トレーニーの目的の一つに、現地へ行って、現地の人と英語でコミュニケーションを行い、英語力を身に着けたいという希望がある。これに対し、現地不動産会社の方は、インドネシアのジャカルタでも仕事は全て在宅に切り替わっており、ジャカルタに来て、日本にいるのと変わりがないとのことで、わざわざジャカルタに行っても仕方がない、と言われたことである。ジャカルタは地下鉄や電車などの公共鉄道がないためその交通渋滞は激しく、通勤は近いところでも1時間から2時間もかかるのが普通であるから、在宅ワークになってこの通勤時間が無くなったことは、労働生産性を高めることになったので、コロナが終わっても在宅ワークは止められない、とのことである。仕事のやり方は、メール、イントラネット、掲示板などを活用しながら必要に応じてTV会議を行うことで、労働生産性が上がることは間違いない。従来の働き方である長時間労働の物差しから成果主義に益々切り替わることは時代の流れであろう。

コロナで一番残念なことの一つに海外渡航が事実上できなくなったことがある。寮生有志と毎年実施してきた海外の大学との交流会や企業訪問を、今年も昨年同様中止せざるを得なかった。しかし、今年は渡航が出来ないけれども、ZOOMを利用したTV会議方式で、中国人民大学の学生と寮生有志の交流会を企画し、実施することが出来た。当初はオンライン会議でどこまで交流が図られるか、疑問に思うこともあったが、やはり実施してみて分かったことは、これは相当有力なコミュニケーションであると思えたことだ。何より実際に渡航し面談となれば、飛行機、ホテルなどの費用が嵩み、また時間も相当取られる。2時間の面談のため半日とか1日かける時間は相当なもので、帰りの時間も入れると海外にわざわざ出かけるための時間と費用は馬鹿にならない。勿論、付随的には現地での美味しい食事とか買い物とかの楽しみもあるが、こと面談という目的から考えると、実際の渡航による面談は、相当効率が悪く、コストが高い。もう一つ、オンライン会議のメリットは、実際に面談しないので、事前の準備を入念に行うことが求められることである。実際の面談は行けばどうにかなるし、行くこと自体に一種の目的達成感があるが、オンラインの場合は会議の内容そのものが問われるから、その内容を濃密にする努力が事前に求められる。コロナにより色々制約を受け、それが不便に思えることが多いが、見方や考え方を変えてみて、実際それを補う行動を通じて他方では大きなメリットがあることに気が付いたことは、正に「コロナ禍転じて福となす」という思いである。

これからの YMCA

商学部 3 年 橋田陽平

お久しぶりです。商学部 3 年の橋田です。あっという間に 3 度目の会報となってしまいました。私は無事に 3 年に進学することが出来、ゼミナールも希望したところに入れました。ゼミナールはデジタルマーケティングというくりになっていますが、今まではデジタル・トランスフォーメーションに向けて何が必要かなどを学習してきました。ゼミでは一つの本を通じて勉強してきましたが、その内容はとても興味深く感じました。題名は「THE TECHNOLOGY FALLACY」で元は英書ですが、翻訳版も販売されています。この本は、先ほども少し触れましたが、デジタル・トランスフォーメーションでどのように生き残るべきか、という趣旨のものです。この本の冒頭はデジタル時代がやってきていて、今までのやり方ではやっていくことはできないという内容から入ります。この後企業としてどのようにあるべきかなどをデジタル成熟度という独自の指標を用いながら説明していきます。このデジタル成熟度について、皆さんはどのような基準で考えられていると思うでしょうか。ひょっとすると、会社にいるデジタルに精通した数字に強い理系の人間の数や、導入している AI をはじめとするテクノロジー機器の性能が多かったり、高かったりする企業が高い成熟度と判断されると思う人もいるかもしれません。もちろんそれらもデジタルで成熟するためにある程度必要な要素かもしれませんが、クリティカルなものではありません。最も重視されることは、組織としてどれほどデジタル化しているか、です。よくわかりにくいかもしれませんが、言い換えると組織的に正しくデジタル技術に接しているか、組織構造がデジタル・トランスフォーメーションの変化に適したものであるか、などを指しています。つまり、デジタル・トランスフォーメーションとうまくやっていくために最も重要なポイントは組織そのものにあるということです。デジタル機器の導入などうわべだけの対応は意味がなく、組織そのものの形を変化させなければ、生き延びることはできないということです。

さて、ここまで私がゼミで学んできた本の内容などについて触れました。そしてデジタル社会で生存するために最も重要なポイントは組織としての変化であると紹介しました。本自体は企業がどのように生き残るかという趣旨でしたが、私はこの内容に関しては営利企業に限らず、私たち一橋Yにも適用できる部分が少なからずあるように感じました。私はこの本には 3 つの学べるポイントがあるように感じます。一つ目は学び続けること、二つ目はフラットな組織体制にすること、三つめはアジリティです。この 3 つはかなりおおざっぱに言っており、本の中にはこれら以外にもさまざまな要素が出てきています。ほかの要素たちも重要であり、それぞれの要素は関連しており一つでも欠かすことはできませんが、ここでの 3 つはあえて独立したもののように捉えています。

まず、一つ目の学び続けること、に関して説明したいと思います。ここでの「学び」という言葉は特別な意味を持っているわけではなく、そのままの意味で勉強とかに近いかもしれません。つまり、いくら現状うまくいっているからと言ってそのままの状態を維持するのではなく、常にどこか改善点が無いかや、新しいもので使えるようなことがあれば持ってくるなどという、激動する社会で進化し続けるための学び、勉強といったものに近しいです。また、組織はこのような学びの場をうまく従業員に与え続けることで、キャリアアップや向上心のある有能な社員にとって魅力的な組織になっていく、とあります。一橋Yは企業ではないにしろ、毎年人員の募集を行っており、組織として活動する分、魅力的であることは非常に重要であると思います。そのためにも、組織として学び続けるべきですし、

学びの機会を与えることも大切でしょう。では一橋Yでは具体的にどのような学びが必要なのでしょうか。現在行っている海外との交流、研修会や聖書研究、修養会などは現在設けられている学びの場だと言えます。確かにこれらは有意義で素晴らしい学びだと思いますが、私は寮の運営の仕事などについての学びも深めるべきなのではないかと思います。運営でも様々な仕事がありますが、例えば広報や会計といった仕事は企業などでの実務に応用できるような仕事内容だと思います。そのような仕事を「ただ任せられたから1年間こなす」のは少々もったいないことのように思われます。広報であれば、せっかく寮のホームページがあるのだからプログラミングやウェブデザインといった学びを深めてみるのも良いと思います。会計であれば、記入の方法だけではなくもう少し簿記を深めてみるとかPCAソフトの使い方を深く勉強するといったことが出来ると思います。こういった学びを勧めるために一橋Yとしては勉強会の設置や講義の実施という機会を与えることが必要です。本格的な組織運営ができるようになれば組織としての魅力も高まるでしょう。

二つ目のフラットな組織体制にすることに関しては、現場の声が届きやすくするという事です。変化に最も敏感なのは組織のエッジ部分の人たちであるため、変化についていくにはその人たちからの声をくみ上げるために縦を意識しないフラットな組織づくりが求められます。これに関しては、一橋Yは比較的優れているのではないかと思います。寮生会議は学年を問わない全会一致制で、一年生からも意見が出やすい雰囲気が心掛けられているのではないかと思います。しかし、理事会と寮との間の意思疎通は問題があるように思います。寮生は頻繁にメールを使うわけではなく、あまり見ていない寮生もいます。寮生はメールではなくSNSを多く使用しており、メールには慣れていません。また、メールでのやり取りはSNSと比べ少し煩わしいので気軽に使えるものではありません。そのため、いくら理事会の方々が寮生に歩み寄ろうとしてくださっても、メールだけでは活発なやり取りはできないのです。これを解決するために、今からラインのグループを作ろうなどとは思いませんが、よりビジネス向きのSlackなどを導入しても良いのではないかと思います。少なくともメールの場合よりも意思疎通がうまくいくと思います。

三つ目のアジリティは、何事にも素早く対応するという事です。PDCAサイクルを速くしていくことが求められます。これは一橋Y自体がそれほど大きな組織ではないため比較的速いと言えるでしょう。アジリティに必要なことは権限の委譲によるフットワークの軽さですが、その点は現状良いと思います。ただ、完全に独立して運営するわけにはいかないので、先ほどの密なコミュニケーションが重要だと感じます。

以上が、私がゼミの本を読んで一橋Yにはなにが必要かを考えた結果です。勉強したてだったり、現状を完全に把握できたりしていないためにお粗末な考えだとは思いますが、これからの時代で変わりゆく社会で生き延びる他の組織から学ぶことも多いと思います。私が寮にいた間は変化しないかもしれませんが、これからも一橋Yが良い方向に変わり続けることを信じ、尽力していきたいと思っています。

久々に飲み会しましょう。

満井 一成(平 27 年経卒)

2015 年 4 月 1 日都内某所、これから始まる未知の大冒険に期待と不安で胸が一杯であった。早くビジネスマンとして一人前になり、多くの国に駐在したい、そして最終的には会社の重要な役職で経営に関われる人材になりたい。大学 4 年間でろくな自己研鑽はしなかったが、野心だけは一人前で入社式に臨んでいた。入社後配属された財務部では必死に働いた。2017 年冬、オフィスで部長から会議室に来よう呼び出された。何かへまをしでかしたか、それとも新しい極秘案件かとこれまた期待と不安が入り混じった感情で部屋の扉を開けた。来年からの海外赴任の話であった。2018 年夏、ニューヨークの JFK 空港に降り立った。1 年半の実務研修であるが、語学力と恥かし乍ら初めての異国の地での長期滞在への不安と、研修を終えたときの自分への期待が隣り合わせの心持であった。2019 年春、2 週間の一時帰国で結婚式を挙げた。天気も良く、多くの友人にも囲まれ人生でも最高の一瞬の一つとなったが、その幸福感と背中合わせで家族を支えなければいけないという重圧も押し掛かっていた。2020 年春、久々の日本のオフィスに戻り、新部署での業務をスタートさせた。希望通り事業投資の部署に配属され、米国勤務で培った経験や知識を存分に活かすチャンスに心躍らせていた。

冒頭冗長な記載となりましたが、これは卒業後の私の人生のターニングポイントです。6 年半の間に仕事では 3 部署と海外勤務、プライベートでは結婚もし、土日は妻や友人と過ごす傍ら、趣味のサッカーや資格試験の勉強にもそれなりに取り組んできました。ステレオタイプな過ごし方かもしれませんが、充実した 6 年半であったかと思えます。他方、今考えると、どの時点も常に先のことを考えていて、あまり過去を振り返ることが少なかったように思えます。だからこそ、山本さんから寄稿の話を頂いたとき、「久しく YM 寮のことなんて考えてなかった、何を書くべきか」と身構えてしまいました。卒寮からまともに訪問しておらず、コロナ禍も災いして帰国後もあまり交流の機会を持てなかった寮のこと、ただ振り返ってみると意外や意外、自分の人生のどの場面でも YM 寮は何かしらの形で関わっているのだと実感しました。

入社後の 1-2 年は公私ともに会社関係の飲み会も多く、仕事についても不慣れさも相まってハードな日々が続き、心身ともに疲弊していました。充実しているという言い方も出来ませんが、気心の知れた寮生・寮母さんに囲まれ、日々自由気ままに過ごしてきた YM 寮での時間がどこか恋しく思っていました。そんな時、職場も近かった O 先輩や N 先輩がたまに食事に誘って下さり、仕事の話に始まり愚痴も聞いて頂きながら、それでも最後は寮や寮生のお話で盛り上がりました。また、たまの土日には寮を訪問、瀧さん(安藤さん)や現役寮生とも交流の時を持つこともあり、今思えばどこか帰郷をしたときのような寛ぎと日常への活力を貰っていたのだと思います。個性的なメンバーが多い同期の 3 人は勤務先もバラバラ(北海道、富山、九州)で日常的な交流は難しいものの、時折稼働する LINE を見る度懐かしさを覚え、遠路遥々自分の結婚式に臨席してくれた際は、兄弟に久々に会ったときのような感情を頂きました。

米国への赴任が決まった後、1 年半の実務研修とも割り切っていたこともあり、先輩後輩諸兄への挨拶も碌にせず(今となっては大変反省しております)赴任しました。そして、滞在から 2 か月が経過したある日、1 通のメールを受け取ったことを今でも覚えております。メールは卒寮後大分疎遠になってしまった斎藤理事長からで、寮の大

先輩でありニューヨークで弁護士として活躍されている秋山武夫先輩を紹介して下さるとのことでした。赴任後業務外での知り合いも数少なく交友関係を上手く築けていなかった当時の自分にとって本当に有難いことであり、まして卒寮後殆ど寮の行事にも出席せず、赴任の挨拶も怠っていたにも拘わらず、気にかけて頂いていたことへの感謝と寮の懐の深さを改めて感じました。秋山先輩にはその後弁護士事務所のセミナーやパーティーにもお招き頂き、自分の NY での生活に活力を与えて頂きました。

ただ、帰国後はコロナ禍も災いし、殆ど寮生との交流も無くなってしまいました。同期とも自分の結婚式を最期に交流が無く、早 2 年半が経ちます。卒寮後も自分が気づかないところで心の支えになり、日々の生活の豊かさを陰ながら齎して下さっていた YMCA 一橋寮というコミュニティとの距離が大きく空いてしまいました。そして正直、この会報の執筆をするまでは、その事実に対する問題意識も無く、YMCA 一橋寮に対する感謝も忘れ去るところでした。私は幸い新型コロナウィルスに罹患することはありませんでしたが、精神・社会的にコロナウィルスに負け、大事なものを失うところでした。この会報の執筆依頼でそう思うことが出来たことも、神のお導きかもしれません。だから、執筆の最後の最後でタイトルを書き直しました(「私の 6 年半と YM 寮」というタイトルで執筆を開始しました)。若手 OB の皆様、この会報がリリースされる頃にはコロナ禍が沈静化されていることを祈り、久々に飲み会を企画しますので、是非ご参加下さい！

土岐先生とバイクと私と、少し哲学～1

菅野 浩生(平5経卒)

もう何年も前の話になるが、ある朝出勤前にテレ朝のニュース番組「羽鳥慎一モーニングショー」(当時は違う番組名だったかもしれない)をつけていたところ、ノストラダムスの大予言が何かで人類終末の日がもうすぐやってくる、という話題を取り上げていた。羽鳥アナが「それでは専門家の方にお話を伺います。先生、これはどうなのでしょう？」などと言っている。すると、「いやあ、そんな馬鹿な話はありませんよ！」と明るく一蹴する声が聞こえてきた。んっ？聞き覚えのある懐かしい声に思わず画面に目をやると、“一橋大学名誉教授 土岐健治先生”のテロップと共に、土岐先生のお写真がテレビに出ている。そう、聖書研究会でご指導いただいていた土岐先生が電話で生出演され、世のオカルトファンの期待？を明るく元気に一刀両断される場に出くわしたのであった。お変わりなくお元気そうで、何よりである。

後年お目にかかってお話を伺ったところでは、時々依頼を受けられるものの、先生はテレビへの出演を避けられており、依頼を受けるたびに、テレビ局に誰か他の人を当たってほしいと伝えていらっしゃるそうだが、巡りめぐってやはり土岐先生のところに依頼が来てしまうのだそうである。死海文書とか旧約聖書の世界に関して、土岐先生を超える専門家はいないのかもしれない。この時もまた仕方なく、電話でならと出演を引き受けられたとのこと。ご出演は数分で終わってしまったが、土岐先生にご指導いただいた我々としては、機会があれば是非テレビにご出演いただき、色々とお話しいただきたいところである。

もう 30 年も前のことになるが、私が学生当時、土岐先生は一橋大学で唯一の宗教学の講義と、国立と小平でゼミを持たれており、講義はしっかり出席してハードワークしなければ単位が取れないシビアな教授として知られていた。私が大学 2 年か 3 年の時から、一橋 YMCA の聖書研究会でご指導をいただくことになったのだが、それ

までの斎藤先生の優しく穏やかに新約聖書を読み進める聖書研究会から、20 世紀の英国を代表する聖書学者バークレーの聖書解説の原書をテキストに行われる形に進化を遂げた。当番が来ると原書と格闘しながら何とかレジュメを仕上げるのだが、当然それだけでは済まずに、研究会では土岐先生から、時には厳しい突っ込みを食らうのである。しかし、土岐先生のご指摘や解説は、時に含蓄ある重みのある一言を混ぜながら、納得のいくお話しが多かった。世の中はバブル景気に沸いていたが、土岐先生は世俗を寄せ付けない、真実を追求する孤高の学者の雰囲気を漂わせておられた。そうした雰囲気は、寮生にどこか落ち着きと安心感を与えていたように思う。

そんな土岐先生が、何故バイクに乗ろうと思われたのか、全くもっていまだに謎である。ある日、昼間に土岐先生が突然 YMCA 寮に現れ、「バイクに乗ろうと思うんだが、どんなバイクがいいかな。」とお尋ねになったのである。突然で少し驚いたが、「先生は自動車免許をお持ちですか」とお尋ねしたところ、「いや、持っていない」と仰る。万が一のことも考えてお止めの方が良いのではとも思ったが、先生には先生のお考えもありだろう。やはりバイクに乗っていた豊君とも相談し、必要なら我々がサポートして差し上げれば大丈夫だろうということになり、余計なことを申し上げるのは差し控えた。

土岐先生は二輪中型免許を取得され、ついにバイクを手に入れられたのだが、先生が愛車に選ばれたのはなんと、当時走り屋に人気を博していたカワサキ GPZ400F であった。車格もあり、性能もデザインも高度に両立した素晴らしいオートバイで、往年のライダーには名車の 1 つとして記憶され、今でも中古車市場では高値で取引されている。

バイクを手に入れられたら、当然ツーリングとなる。当時 YMCA 寮にはバイクやスクーターに乗る寮生が総勢 7 ～ 8 名いたと思うが、ある日土岐先生から、皆でツーリングのお誘いをいただいた。行先は、中部地方の山奥にある、先生の秘密の隠れ家とのこと、我々は喜んで大いに盛り上がり、秋のとある週末、土岐先生を隊長に YMCA 聖書研究会第 1 回ツーリングが開催された。先生の奥様とお嬢様も同行されることになり、バイクの後席や寮生が実家から借り出した車でご一緒する運びとなった。目的地のふもとのさびれた山村に全員無事に到着し、そこから皆で未舗装の山道をくねくねと上がっていく。深い木々の間を抜けると不意に野原が広がり、農家が 1 軒ぽつんと建っている。ここが先生の秘密の別荘？であった。

築 70 ～ 80 年、いや、もしかしたらもっと古い家かもしれない。どこか日本の原風景とも思えるような佇まいで、土間作りにかまどと囲炉裏、水は井戸水、厠は屋外で 2 階は蚕部屋、古びてはいるが広々とした作りで寛げるお宅である。土岐先生のお話では、農家のご主人が年を取られてふもとの村に下りることになり、それ以来、好きに使ってくださいと言われているとのこと。その昔、学生運動の終わり頃、警察に追われた革マル派の最後の残党がこの辺りに逃げ込んだという噂もあるような静かな山奥で、道はもうその先どこにも通じていない。皆で燃料にする薪や枝を集め、かまどに火を起こして飯をたき、ふもとの村の 1 軒しかない店で買った干物などを炙り、それぞれビールや日本酒や焼酎を手し、土岐先生と奥様を中心に車座となり、夜遅くまで飲み語らった。

我々寮生のたわいもない話の合間に、土岐先生がされる昔の思い出話が面白く、楽しく和やかに夜は更けていく。そのうち先生の話は死海文書や外典偽典に及んだ。正典との比較を通して、当時伝えられていたことを立体的に考えるといったこと、ギリシア哲学とキリスト教の関係についてもお話ししてくださった。土岐先生がサンスクリット語を読めることを我々寮生が知ったのも、この時である。そうこうする内に誰かがキルケゴールやデカルトについて先生にいろいろとお尋ねし出す。ちょうど私は、豊君から薦められてニーチェの「ツァラトゥストラかく語りき」など読み終えたところだったので、疑問に思っていたことを先生にお尋ねしたりする。土岐先生からすれば、浅学な我々の質問には的外れなものも多かったと思うのだが、それでも先生は全ての質問に、解説やご自分のお考

えも交えて穏やかな優しい語り口で答えを返して下さるのである。キルケゴールとニーチェの話をされる中で、ヘーゲルを読むと理解が進む、といったアドバイスを頂いたかもしれない。土岐先生のお話は冴えわたり、本質にズバっと切り込む鋭さとともに、どこかユーモアやウィットが感じられ、聴いていて実に楽しかった。お言葉には重みがあり、これまで万卷の書を読まれ、考え抜かれた上で到達された結論であることが感じられた。我々の中途半端な理解を補い、また、どう考えればよいのかベクトルがなんとなく見えてくるような、時には勇気づけられる思いがするお答えであったことを覚えている。

当時、土岐先生はすでに御歳 40 台後半、端正な彫りの深いお顔立ちに黒縁のメガネの奥から鋭い眼光を放ち、バイクに跨るととても新米ライダーには見えず、ベテランライダーの貫禄を漂わせておられ、今思い返してもなんと勇ましく、素敵で格好良かった。髭を長く伸ばされ、孤高の学者の雰囲気なたたえておられた土岐先生が、名車 GPZ400F を駆る雄姿をお見せできないのが本当に残念でならない。皆で何枚も写真を撮ったはずなのだが、当時まだデジカメはなく、今回写真を探したが見つかることができなかった。

後年、私はニーチェに関する書物で、ニーチェの哲学や思想がどの様に導き出されたのかという命題に対し、ニーチェの哲学は自身の鋭い直観で自ら導いたともいうべきもので、ニーチェは鋭敏な“嗅覚”ともいうべき感覚で世の中の矛盾や隠された問題を嗅ぎ分けてしまうのである、といった哲学者による解説を読んだことがあるのだが、あの当時私が土岐先生に感じていたのは、まさにそうした鋭さでなかったか。

そんな土岐先生が、お世辞にも勤勉とか優秀とは言えない我々のレベルまで下りてこられ、聖書研究会とは別の形で親しくお付き合いをいただいたこと、そして様々なお話を伺う機会を与えてくださったことは本当にありがたく、今も私を含め、当時の寮生の貴重な財産となっている。聖書研究会やツーリングの機会を通じて、真摯に考える姿勢や人としてどうあるべきかといったことについて、皆それぞれに大いなる学びがあったと思うのである。研究者として妥協を許さぬ、どこか世俗を超越したところを感じさせる謹厳な土岐先生が、ツーリングや宴席で見せてくださる朗らかで豊かなユーモアのセンスが、またとても楽しく素敵であった。そして、長年の研究に裏打ちされた深みと重み、そして朗らかでユーモアたっぷりの側面が、あの日の朝、明るく楽し気な、しかし自信に満ちたトーンで土岐先生が発せられ、全国に放送された「いやあ、そんな馬鹿な話はありませんよ！」という一言に凝縮されていたように思われるのである。

土岐先生とバイクと私と、少し哲学～2

豊 義人(平5法卒)

平成 5 年法学部卒の豊です。卒業後は石油精製専門の東燃(現 ENEOS)に就職しました。当時東燃には、YMCA の先輩で丹野さんと初海さん、同期で菅野くんがいました。東燃では和歌山工場でのプラント生産管理からキャリアをスタートして、管理会計、経営企画を経験しました。私が在籍していた間に、東燃はゼネラル石油と合併して東燃ゼネラルとなり、当時東燃の両株主(各出資比率 25%)であった米国のエクソンとモービルが 1999 年に合併してエクソンモービルとなり、2000 年に東燃ゼネラルはエクソンモービルの子会社となりました。エネルギーや安全保障といった国策にも関わる石油業界であっても、環境の変化と資本の論理は容赦なく業界再編をも

たらずことを実感しました。その後の東燃ゼネラルは、経営統合により旧日本石油の ENEOS グループに入り社名も消えました。かつては外資系対民族系という構図で、自他ともに認めるライバル関係だった旧日本石油の傘下に東燃があるということに隔世の感を覚えます。東燃で約 12 年勤めた後、堀部ゼミの同期に声をかけられたことがきっかけで、2005 年に博報堂グループのデジタル・アドバイジング・コンソーシアム(DAC)に転職しました。当時の DAC は、TV・ラジオ・新聞・雑誌といった従来のマスメディアに対して、新興で市場規模も小さかったインターネットメディアの卸業を営む社員数 200 名程度の中堅ベンチャー企業といった感じでした。石油精製からインターネット広告会社という全く畑違いの業界への転職で当初は不安もありましたが、大企業での知識や経験を新興企業でも活かすことができたのは幸いでした。現在は DAC から同じ博報堂グループの博報堂アイ・スタジオに向向して管理領域全般を担当しています。

さて、本題である土岐先生とバイクに関する思い出を書く前に、そもそもなぜ私は学生時代にバイクにはまったのだろうか？ということについて思い返してみました。きっかけは自宅から最寄り駅までの通学用に原付スクーターを使ったことでした。子供のころから自転車であちこち行くのが好きだったのですが、自転車のダイレクト感はそのままだと、原付だと一気に移動範囲が広がることに驚きました。原付での初の遠出として房総半島を 2 泊でのんびり一周したときは本当に感動しました。大学時代の私はヤマハ TZR125 から始まり、その後ホンダ FT400 という単気筒バイクに乗っていました。FT400 は決して速くはないのですが、ホンダらしく丈夫で壊れることもなく安心して長距離ツーリングに行けて、荒れた未舗装林道にも入って行ける一方で、舗装峠道の深いカーブでも安定して曲がれる面白いバイクでした。バイクに乗っていると、不安定な二輪を操作することによるダイレクトな運転フィードバックに加えて、外部に対して体がむき出しでリスク感覚が高まるためなのか、五感と感性が鋭くなっていくような気がします。今でもバイクを 2 台所有して乗り続けていることを考えると、よほど私の性に合っているのだろうと思います。

土岐先生の愛車は黒赤カラーのカワサキ GPz400F でした。GPz400F と言えば、当時人気だったバイク漫画の名作「湘南爆走族」主人公の江口洋助のライバルであり「地獄の軍団」リーダーの権田二毛作が乗っていたバイクです。比較的大柄な車体に角張ったアッパーカウルがついたカワサキらしい厳ついデザインが特徴的なのですが、映画トップガンでトム・クルーズが乗っていたカワサキ GPZ900R は兄弟車に当たるので、覚えている方はイメージできるかもしれません。40 年近く前のバイクにも関わらず、今の中古車市場ではプレミアムがついていて、最新の高性能大型バイクの新車を上回る価格で取引されているほどの名車です。何度か試乗させてもらいましたが、現在のような排ガス規制による馬力ダウンがなかった時代の DOHC 空冷直列 4 気筒エンジンは、低回転域では比較的静かなドリユドリユといった低音なのですが、高回転域まで回すと空冷 4 気筒特有の乾いたカーンと抜けるような気持ちいい音を出しました。先生は普段極めて安全運転でしたが、高速道路では時々やんちゃ？な一面も見せることがありました。GPz400F は速くて安定感のあるバイクなので、高速道路での加速や巡航速度ではついていけないことがよくありました。

私にとって、先生は勉学の面では多少強面で近寄りがたくもあったのですが、バイクに乗っていると聞いて「しめた！」と思いました。先生と話をしたかった私は、バイクをネタに先生との距離を縮めたいと考えたものです。はじめて先生の GPz400F を見た時に「先生、ワルいバイクに乗ってますねー」と思わず言ったところ「カワサキらしい

デザインがいい。その気になれば速いけど安定していいバイクなんだ。」と仰っていたことを覚えています。先生と YMCA の仲間で行ったバイクツーリングの定番コースは、相模湖から山梨県道志みちと富士五湖周辺を抜けて、富士山の東麓にある先生のお知り合いの山上の旧住居まで行くというものでした。そこは長年使われていない昔ながらの古民家で、土間脇の壁に 1970 年ごろのチャールズ・ブロンソンのマンダムのポスターが貼ってありました。夜になると、古民家の所有者である先生のお知り合いがおすそ分けしてくれた食材などを焚火で炙りながらいろいろな話をしました。今となってはさっぱり内容を思い出せないのですが、学生らしく背伸びしてキリスト教哲学や西洋哲学について一生懸命話したことを覚えています。浅学なうえにお酒も入って散々な感じの我々の哲学談義に対して、先生は否定も訂正もせずニコニコ時にニヤニヤしながら聞いていました。ただ、学生による稚拙な議論ではあっても稀に重要な論点に差し掛かることはあるようで、そうした際に先生がポツリと語る巨大な知に裏打ちされたコメントには圧倒され痺れるような思いをしたことを今でも思い出します。もちろん、そうした話以外にも我々学生の将来のこと、バイクのこと、YMCA 寮にまつわる他愛もない話にもつきあっていただけたことが何よりもうれしかったです。また、土岐先生のご家族とお会いできたことも懐かしく楽しい思い出です。奥様、お嬢様とお話ししていると、聖書研究会での厳格さとはまた異なる普段の土岐先生の優しい表情はご家庭からきているのだなと納得したものです。

当然のことながら先生はすでにバイクから離れていますし、私も体力的にあと何年ぐらい乗れるのかなと思うことがあります。バイクでの土岐先生との忘れがたい思い出と私自身のバイクライフを今後も大切にしていきたいと思っています。

最後に、3 年ほど前、当時の YMCA 寮生が集まって土岐先生と奥様にお会いしました。土岐先生は読書会の講師をされた後に寄られたとのことで、読書会で使われたメモをいただきました。創世記のアブラハム、サラ、ハガル、イサク、イシマエルに関する記述に対して、様々な文献に基づき注釈・解釈を加えたもので、最後は「おまけ」としてガリレイ、デカルト、パスカル、ピエール・ベールを取り上げ、理神論・汎神論から近代自然科学、啓蒙主義に至るまでの流れを簡潔に説明したうえで、現代は近代自然科学の確実明晰性一辺倒から、確実性・規範性の崩壊をきっかけとする転換期にあると喝破されていました。今もお縦横無尽に巨大な知を駆使し続ける先生にあらためて感動すると同時に元気をいただくことができました。

土岐先生とバイクと私と、少し哲学～3

淵辺 穰(平6社卒)

土岐先生で思い出すのは、何と言っても、バイクに乗ったその雄姿である。

いつもの紳士的なグレーのツイードジャケットの上に、艶のある厚手の黒革のライダースを重ねる。細身の革ジャンの斜めに走るチャックを上までしっかり締めているが、ジャケットの裾がペンギンの尻尾のようにみ出ている。黒いフルフェイスのヘルメットをかぶり、その下からは山羊のようなアゴ髭を突き出す。窮屈そうなシールドの向こうには、黒縁眼鏡がジロリと睨んでいる。そして跨ぐのは、無骨な男のバイク、赤黒のカワサキ GPz。知らない人が見たら何者と思っただろうか。先生に言わせば、安全と快適のための格好でしかないそうだったが、そのスタイルに滑稽さは無く、とにかくイカしていた。

先生には何度か、富士のほうにツーリングに連れて行ってもらった。

相模湖のあたりから道志川沿いの山道を抜けて山中湖に突き当たり、そこからは富士山の裏側をまわっていく。サティアンのまだ無い平和な朝霧高原を抜け、白糸の滝に寄り道しながら、富士宮まで走る。いつも泊めていただいたのは、もう人が棲むことがなくなり、農作作業小屋としてしか使われなくなった古民家である。そこにたどりつくためには、峠を 2 回ほど越しながら、最後には富士川の支流である稲子川沿いからさらに山奥に入っていく必要があった。富士川は川幅が数百メートルあるような大河だが、稲子川は山間を流れるどこにでもあるような小さな川。そこから舗装もよくない林道とも言えるべきクネクネ道を苦勞しながら登っていく。

山間は、日が沈むのが早い。土岐先生が古民家の奥の家の住人に挨拶をすませると、番茶で一服。一息入れたら、風呂と買い出し。せっかく登ってきた山道を、少し離れた集落を目指してまた降りていく。集落と言っても、小学校を中心に川沿いに家が数軒程度とお店がひとつあるだけだった。そして、川を渡った向こう側には、比較的新しい建物の日帰り温泉があり、いつも私たちはそこで旅の疲れを癒すのである。ひとつ風呂浴びると、「よろずやさん」と呼ばれる集落唯一の商店で店主に挨拶し、冷えたビールとわずかな食材を買いこむのであった。古民家に戻れば、土岐先生とのゆっくりとした談笑の時間である。大したごちそうを作ることはなかったが、裏の住人からいただいた芽生姜と自家製味噌がおいしかったのを覚えている。闇夜の中で焚火を囲んでいるときは、土岐先生の昔話が最高の肴だった。

ある時には、土岐先生が「見せたいものがある」ということで、古民家から散策に出たことがあった。人が通らなくなつて獣道となつてしまったような山道を分け入って 30 分位。そこには、丸太で手作りされた小さな小屋があった。都会の学校になじめない子供たちのために、田舎で米作りをはじめとした農家生活を経験させることで、健康を取り戻す活動をする拠点だったという。どうやら活動は、構想通りに実現したわけではなく、小屋も建築途中で打ち捨てられた状態であった。富士の奥地に、70 年代の社会運動の汗の残り香を感じたのを覚えている。

私が入寮したのは、平成に元号が変わったばかりの 1989 年。時代は「バブル」。学生は消費することが存在意義という風潮だった。私たち学生の生活は決してバブリーなわけではなかったが、将来的な不安があるわけでもなかった。しっかり勉強すれば、一流企業への就職も難しくないのだと安心感をもったものだ。でも 90 年代に入り、寮の空気にもわずかに変化が訪れた。天安門事件、ベルリンの壁崩壊、冷戦終結、という立て続けに世界的な激動があり、時代の変化が少しずつ寮にも伝わっていた。「囲い込み」という名の接待を受けながら就職活動を行う時代は終わりを告げ、「そんな簡単じゃないんだ」という気配がようやく漂い始めたころである。一方で、不安に逆らうように「フリーター」という言葉も主体的選択の一つとして注目されていた。就職ではなく学問の道を考える学生も徐々に増えてきた。高度経済成長以降の自明の価値観が変わってきたタイミングだったのではないかと思う。失われた 20 年の始まり。当時の寮は、寮母さん不在の時期でもあった。そもそも学校の授業に積極的に出席していたわけではなかったが、不規則な生活はより一層不規則になっていた。個人的なことなのか、時代的なことなのか、進むべき方向を見失っているような時期だったような気がする。

そんな混乱の時期に、土岐先生が聖書研究会のチューターをしていただくことになったとき、寮生の中では緊張感が漂ったのを覚えている。土岐先生は、6 か国語を駆使する研究者であり、ゼミでは非常に厳しい指導をされるという前評判を聞いていた。自堕落な寮生を前に、どれだけ失望し、どれだけ厳しいことを言われるのか不安

に感じたものである。

実際、聖書研究会を通じて、土岐先生からは研究者としての厳しさを垣間見る瞬間はいくつもあった。例えば、常に事実や史実に立脚しようという姿勢。「ディカイオシュネーは何回聖書で使われているか？」などと、聖書の文献学的な議論をしていただいたのを覚えている。聖典が政治的・恣意的に翻訳され改編される歴史の中で、第一次資料の原典に立ち返る姿に、研究者としてのあるべき実直で真摯な姿勢を見たような気がする。

歴史に対するものの見方も学びとなった。「聖書は政治書だ」という話をよくしていただいた。現代の中東政治の混乱の萌芽が、聖書ですでに描かれていることを話していただいた。芥川龍之介は河童に「我々の生活に必要な思想は三千年前に尽きたかもしれない。我々は唯古い薪に新しい炎を加えるだけであろう。」と言わせたが、土岐先生はそれが本当か確かめているような研究者なのだろうと思った。

また、土岐先生は、形だけの権威に対しては厳しい言葉を向けることも印象的だった。「教授会なんて出ないよ」なんて優しいレベルの言葉はもとより、通念上では正統とさせる事柄であっても矛盾を厳しく批判する言葉をいくつも耳にすることができた。あらゆることを薄っぺらな理解でよしとせず、事実に戻り、歴史的経緯を理解し、矛盾を指摘する。研究者としての職業倫理以上の矜持を見た気がする。

しかしその一方、土岐先生で本当に思い出すのは、我々寮生に対する穏やかなまなざしである。聖書研究会で、先生から質問を投げかけられると、我々は無理して背伸びして回答をしようとしたものである。教義的に正統とされるような、クリスチャンとしてあるべき模範的な回答を探して言うのだ。そういう時、先生は我々の不勉強を叱責したり矛盾を追求したりすることはなく、フムフムと聞いてくれるのである。しかし、後でお酒を飲みながら話をすると、土岐先生はそういう学生について、ニカッと笑いながら言うのである。「お行儀のいいことしか言わないね」と。私はこの瞬間の笑顔が、たまらなく好きだった。土岐先生は、当時私たちとの交流の中で何を求めていたのだろうか。「お行儀のいい話をしに来たんじゃないよ」と言われたことはないが、きっとそうだと思う。

先生からすれば、我々は学問的には落第生ばかり。寮生の中で、土岐先生の学問的な偉大さを本当に理解していた者はごく限られていたように思うし、少なくとも私は全くわかってはいなかった。土岐先生からも、「教えていたつもりはない」なんて言われそうである。もしかしたら、先生が情熱を傾けた歴史を私たちに見せたかったという部分も少しはあったかもしれない。しかし、それ以上に、何故我々がバイクに夢中になっているのかを、自分で確かめたかったのではないかと今は思う。何事も自分で確かめないと納得しない先生でしょうから。いずれにせよ、40代半ばを過ぎて免許を取得してバイクに乗る土岐先生の姿は、自分の探しているもののためには行動を辞さない強い信念の人のように見えたものである。多感な時期に、土岐先生のような背筋の伸びた大人と交流するのは非常に刺激的な経験だったし、それからの人生を過ごすうえでの自分自身のバックボーンの一部になっているのは間違いない。

富田寮母さんの思い出

小栗真吾(昭 57 年経卒)

YMCA 寮と言えば真っ先に思い出されるのは、聖書研究会の日に富田寮母さんが作ってくださったカレーです。豊潤でスパイシーなあの香り、色々な野菜や肉が1つにまとまって作り出す深くてまろやかな味わい。後にも先にも、あのカレー以上に美味しいカレーは、食べたことがありません。

一緒に暮した寮生達も同意見で、自分でも料理をする寮生は富田さんに秘訣を尋ねていました。富田さんは、「まとめて沢山作るからよ」と笑っておられました、下拵えからかなりの手間を掛け、愛情を込めて作って頂いたことは間違いありません。

私は大阪の天王寺高校出身ですが、当時通っていた長居教会でお世話になった、阿久戸先輩(昭和 48 年社会学部、昭和 50 年法学部ご卒業)のご薫陶を強く受けて一橋大学を受験し、入学したら YMCA 寮に入れて頂こうと楽しみにしていました。昭和 53 年に入学した時は丁度、寮の建て替えが行われていましたので、1 年目は下宿生活を送りました。下宿にはまかないも調理設備もなく、外食や買った総菜で凌ぎましたが、1 年経つとすっかり飽きてしまいました。

翌年には待ちに待った新寮の寮生募集があり、喜び勇んで入寮させて頂きました。各学年 4 人ずつ、計 16 人のそれぞれに個性的な寮生達の共同生活が始まりました。新寮は諸設備が整っていて、とても快適でした。

チャペルには旧寮から引き継がれたオルガンや多くの図書があって、朝礼拝を開いたり、オルガンを弾いたり、キェルケゴールの「死に至る病」等に触れたりすることが出来ました。食堂には全員が集まれるテーブルがあり、聖書研究会を行ったり、寮生が集まって親睦を深めたりする憩いの場所でした。結構広い厨房や寮母さんの部屋もあり、住み込みの寮母さんを想定して建設されたのだと思います。

新寮の寮母さんを探すに際して、諸先輩は大変ご苦労されたと同ったことがあります。自らを振り返ってみれば、むさ苦しく我が儘な 16 人もの野郎共の世話を、進んで引き受けてくださる方が滅多にいないことは、容易に想像出来ます。

こうした中で、加藤先輩(昭和 47 年社会学部ご卒業)のご尽力で、同じ牛込払方町教会に通っておられた富田さんが、新寮スタートの翌月から寮母を引き受けてくださったことは、我々にとって大変ありがたいことでした。ただ、富田さんは当時 36 歳で若くて美人でした(過去形にするのは不適切ですが)ので、住み込みではなく通いで勤められるとしても、諸先輩はとても心配されたと後で伺いました。

なお、富田さんのご主人は我々の卒業後に天に召され、富田さんはその後しばらくして再婚され、今は佐藤さんになっておられますが、このまま富田さんとして続けさせて頂きますのでご容赦ください。(お名前の表記は、ご本人の記載に合わせています。)

当時の我々はそのようなご苦労やご心配を知る由もなく、お母さんよりお姉さんの方が相応しい寮母さんにどっぷりとお世話になることになりました。後で何うと、当初の話では住み込みの寮母が決まるまで、2～3 ヶ月の臨時

でとのことだったそうで、そのまま十余年をお勤めになるとは思っておられなかったでしょう。

富田さんにはお子様がおられなかったもので、いきなり 16 人の息子達の母親役を引き受けられるのには、そうは言っても相当なご覚悟があったと思います。ご本人は表には出されませんでした。寮母としてしっかりしなくてはと考えておられたのだと思います。

初めの頃は、食器や調理道具等を揃えるのが大変だったと思います。一部は事前に備えられていたかもしれませんが、そもそも 16 人は普通の家族の 4~5 軒分ですから、探してくるのも運ぶのも大変だったと思います。

ここで、「思います」が続くのは、申し訳ないことに当時はそのようなことに気が回らず、一部の先輩は手伝われたのかもしれませんが、私は全くお手伝いしなかったからです。

ただ、そうやって買ってきたお皿を洗っておられた際に、何枚かが割れたのに動揺して、富田さんが泣いてしまったことがありました。我々には状況が飲み込めず、必死で慰めることしか出来ませんでした。きっとかなりの緊張感があったのでしょう。

また、しばらく経った時のことですが、広島ご出身の T 先輩のご実家から頂いた生牡蠣をご馳走になったことがありました。大変美味しかったのですが、生憎それに食中たりを起こす寮生が多数出ました。(確か、寮長の中山先輩だけが無事だったと記憶しています。) 富田さんには全く責任がないことですが、ご本人はそう受け止められず、辞めなければと考えられたそうです。日頃から、強い責任感を持っておられたのだと思います。

寮内のルールは、旧寮にも住んでおられた寮長の中山先輩(昭和 55 年社会学部ご卒業)が中心になって、色々決めていきました。聖書研究会・朝礼拝の運営、共用部分の利用・清掃、食事の要否連絡・片付け等、決めることは沢山ありました。皆にとって家族以外との初めての共同生活であり、先輩も後輩も同時に入寮したので、小さな行き違いや混乱は頻繁にありました。

そもそも、皆それぞれ自分は常識人だとおもっているのですが、その「常識」が個人個人でバラバラなのです。

特に食事関係はそれが顕著で、食事が要るのか要らないのか、それをいつまでに連絡するのか等について、富田さんには随分とご迷惑をお掛けしました。食堂の壁に「夕食の要否 ○×表」が貼ってあり、そこに各人で書き込むのですが、中には△を書く人がいました。その後も各自の都合次第で、○にしているのに帰って来ない人、帰って来ないからと食べる人(本人ではない)、食べられた後で帰ってくる人等々。

特に大変なのは、冒頭記載の絶品カレーでした。聖書研究会の日には、遅れて帰ってきて聖書研究会に参加する際も簡単に食事が出来るようにと、決まってカレーを作ってください、チューターをお勤め頂いた齋藤忠利先生や富田さんと一緒に頂きました。また、栄養のバランスを考えて、キャベツの浅漬けもご用意頂きました。

そのカレーは当然大人気で、食べ盛りの我々が競って食べるので、遅れた人の分が足りなくなりそうになると、富田さんからストップが掛かりました。

食事を作る前後に、富田さんは食堂のテーブルでスーパー等のレシートを広げて、家計簿を付けておられました。夕食を食べた日に応じて、個人別に食事代を精算するために、食材等を丁寧に記載しておられたのです。ご自宅に持ち帰る、建築設計事務所を経営されていたご主人との 2 人分の食費も、細かく仕分けられていました。

「夕食の要否 ○×表」は先刻の通りの有様ですし、人数も多いのでかなりの手間だったと思います。

今なら、夕食の要否や精算には、メールや Web のアプリや表計算で連絡・集計等が出来るでしょうが、当時は携帯電話も PC もない時代です。電話もロビーに公衆電話(ピンク電話)を1台だけおいて、皆で使っていました。そんな中で、ひたすらアナログの手作業にて電卓を叩いておられたので、相当なご苦勞だったと思います。

食事の量やレパートリー、栄養のバランス等についても、細やかな心配りをして頂きました。富田さんにご用意くださるのは夕食だけですが、よく「朝食や昼食はちゃんと食べてるの?」「梅干しを食べ過ぎると塩分を取り過ぎるのよね」「栄養があるからって卵ばかり食べては駄目よ」等々、実家の母親のように親身に声を掛けてくださいました。

我々にしても、半分大人ですが半分子供が残っているような年頃ですから、色々と失敗します。とりわけ後輩の T 君は、ゆで卵を作ろうと生卵を電子レンジで温めて大爆発させたり、納豆を食べた食器を中途半端に洗ってスポンジをベタベタのまま放置したりしておりました。それを見た富田さんが、「あなた達、一流大学に通ってるんでしょう?」と呆れていたのを思い出すと、今でも笑ってしまいます。もしかしたら、富田さんは T 君が「猫を捕まえて電子レンジに掛けたらどうなるんだろう」と言った笑えない冗談を、真に受けて心配していたのかもしれません。

いずれにせよ、実家ではあまり手伝いをしたことがない我々の掃除や食器洗いが、富田さんの目から見たら随分と拙い家事だったことは間違いありません。自分達では大したことが出来ない状況ですのに、寮祭で卒業された諸先輩をお招きしたり、他大学の女子大生に声を掛けて寮内でクリスマス会を開催したりする度に、富田さんに多大なご負担をお掛けしてしまいました。とんでもない「子育て」を経験させてしまい、申し訳ない気持ちで一杯です。我々には1つ1つが懐かしい思い出ですが、富田さんにとってもそうであることを祈る気持ちです。

卒業後、富田さんのご主人が亡くなられたことを知り、盛岡さん(昭和 57 年商学部ご卒業)が幹事になってくださって、富田さんを励ます会を開くことが出来ました。それ以降も盛岡さんのお陰で年に一度程度は、当時の寮生が集まり、富田さんもお呼びして懇親会を行って来ました。近年はコロナ禍が始まる前まで、富田さん(佐藤さん)のご自宅にお招き頂き、佐藤さんご夫妻と一緒に親睦を深めさせて頂いております。

ご自宅では、富田さんが寮母を退かれる際に捨てるに忍びないとご自宅に移された、多数の貴重な資料を拝見することが出来ました。昭和 53 年に故大平総理大臣が就任された時のお祝いの寄せ書きの色紙のコピーの他、「夕食の要否 ○×表」や、食材等を記載した家計簿、聖書研究会の時に発表者が作成・配付したレジュメ、一橋祭等の際に作成した文集等、我々が忘れていた数々の思い出の品を、大切に保管して頂いていました。拙い文章に赤面するとともに、富田さんの祈りと無私の奉仕のお陰で我々の生活が成り立っていたことに改めて気付いて、感謝の思いを新たにしました。

大変悲しいことに、富田さんは現在具合を悪くされてご入院されていますが、ご主人様も含めて、誰もコロナ禍でお見舞いにも伺えません。コロナ禍が収まるとともに、富田さんが健康を取り戻されて、ご主人様共々、YMCA 寮でお世話になった面々で、懇親会を再び開ける奇跡の日が訪れますことを、心から祈っています。

学習支援の3か月

法学部1年 吉田翔

初めまして。法学部1年の吉田翔です。

自分は夏休みから秋にかけて、何をやったというわけではない。何を調べていたわけでもない。

自堕落に寝たり食ったり、時々Amazonで映画のDVDを買って観る程度の生活だった。自分でも大学生という人生のモラトリウムと言べき時期に、この生活スタイルはどうなのだと思います、最近ようやく尻に火が付いたように資格試験に向けた勉強をいそいそとしている。

だが、よく思い起こしてみると、自分にはこの時期から始めたことがあった。

夏休みが始まった7月から、自分は学習支援のバイトを始めたのだ。

言葉を選ばずに言ってしまうと、自分はとんでもないクソガキだった。

中高一貫の学校に入って勉強にそれなりの自信をつけ、ようやく始まった受験勉強の時期。高校に入ったと同時に、大学受験というものについてボンヤリと考え始めた。

すると目に映るのは、やらなければいけないとされている、夥しい量の問題集、参考書、教科書。周りの同級生の中にはもう既に将来の進路を決め、キラキラとした未来に向かって全速前進している子もいる。何だそれは。何でそんなに「勉強」というやりたくもない作業に打ち込めるのだ。ハッキリ言うと自分はもうこの時点で受験勉強をするのがイヤになってしまった。現実逃避できるものなら何でも、ネットやら漫画やらに手を出し、自堕落な高校生活を送ってしまった。

そんな自分も両親や通っていた塾の塾長にこんこんと、何回も時間をかけて諭され、また入りたい大学が見つかったこともあって、何とか共通テストの半年前から受験勉強というものに対するエンジンを全開にして、国立大学の法学部という狭き門に滑り込むことができた。

こんな経緯があったからか、自分の最初のアルバイトはなるべく自分の得意分野、つまるところ「勉強」で戦いたいと思うようになった。当時はあんなにやりたくない、つまらないと思っていた勉強が、いつの間にか自分が誇れる武器になっていた。いつかは食品関係のバイトもやりたいのだが、まあまずは家庭教師なんかがいいかな。家庭教師サービスの登録サイトに自分の名前を登録したらワンサカ出てくる案件メール。十数件あるメールの1つ1つに目を通し、条件に合うもののうちどれがいいかと吟味して、最終的に選んだのは「北区での学習支援」。面接で聞くことには、児童館で中学生に数学を教えるそうだ。文系数学ならば自分の最も得意とする分野だ。二つ返事で快諾して、いざ向かうは北区の児童館。そこそこ空いている電車を乗り継ぎながらの往復2時間は、英語の単語帳を見ながら座って過ごせる。7月下旬、大学の春夏学期の授業も終わり、夏がはいよいよ始まってきた頃合い。クーラーの利いた車内はなかなか快適だ。

自分が受け持ったのは、中学2年生の女の子だった。

自分が中 2 の時はどんなだっただろうか。まあ高校生の自分がクソガキだったのだ、それより若い自分なんかもっとクソガキだろう。頭の片隅でそんなことを考えながら、まずは初めの自己紹介。アイスブレイク。この瞬間が一番大事なのだ。

「初めまして。今日からここに入ります、吉田と言います。よろしくね」

「よろしくお願いします」

これはまた随分陽気そうな子だ。部活はバスケットをやっているらしい。それにしても日焼けしているのは、よく外で遊んでいるからだろうか。学校が実家から離れているのもあって休日に友人と遊ぶという文化が存在しなかった自分にとっては羨ましすぎる話だ。

まずは教科書を開いてもらって、授業を進めていく。基本事項ができていると確認したら応用問題へ。疎かになっている箇所があったらその事項の練習問題を集中的に解かせる。中学 2 年生だったらこんなものだろう。自分のいた環境に特殊過ぎる、勉強を楽しんでしまうような子が多数集まっていただけで、大体子供は学校の授業なんて苦痛だ。

周りを見る。自分と同じような大学生が、自分と同じように生徒に勉強を教えている。雑談交じりの一団もいる。雑談とは。今は勉強の時間だろう。

何とか分かりやすいように、絵を交え文字を交えて試行錯誤しながら問題の解説をする。方程式は中学生にとってはさぞ意味不明だろう。自分なりに咀嚼して教えるのには楽しいものがあった。

異変が起こったのは 8 月の下旬。

この時期になると、監督者の方から「この時間に、残った夏休みの宿題を進めてもいいですよ」とお達しが出る。

自分も同じように受け持った生徒に伝える。聞くところによると読書感想文が残っているらしい。それをこの場でやる意味とは何ぞやと思いつつも、「じゃあそれをやってね」と言っておく。

10 分ほど経ち、ちらと様子を見てみる。

原稿用紙が埋まった様子がない。

何が難しいのか聞いてみたところ、最後の 1 段落がどうしても思い浮かばないらしい。「書く内容は思い当たるんだけどなー。」にこにこしながら言っている。

自分はこの眼に思い当たりがある。この口調を知っている。

これは自分が勉強をサボっているときの顔だ。

元々真面目にやる気配の見えない子だった。どうも勉強に集中しない。「できない」のではなく、「しない」。これは困りものだ。その時は何とか嗜めて、鉛筆を動かすことには成功した。

そしてその日から、彼女の怠け癖は加速していった。授業中にも他の子に話しかけるようになり、こちらの方を見ない時間が少しずつ増えていった。

極めつけは 9 月の末のこと。あまりの雑談に耐えかねた監督者の方が、彼女と仲のいい子との席を離れたのだ。

その日、彼女は大変不機嫌だった。問題を解いてと言っても解こうともしない。頭では何か考えているのだろうか。でも走り書きすらしない。いや違う、鉛筆は動かしている。落書きだけでも。埒が明かないのでしばらく黙って様子を見ることにしたら、20 分くらい経ってもこちらの方を見もせずになんか顔らしきものを描いている。

あまりの態度に耐えかね、声をかけてみた。

「何描いてるの？」

何も答えない。

「今は勉強をする時間のはず、だけど……」

何も答えない。暖簾の腕押した。自分の中で何かが切れた。

「やりたくないんだったらやめればいいじゃない？」

授業が終わり、監督者の方から呼ばれた。荷が重いかどうか聞かれて、自分はすぐに否定できなかった。あの状態に入ったら、子供はもう大人の言うことは聞かない。それは、自分が一番よく分かっていた。高校生の頃の自分も同じだったから。

自分が高校 3 年の時、受験勉強から逃げて遊んでいたことが親にバレたことがある。「やめたいのならやめてもいい」とよく言われた。自分はそのようなことが何十回とあったわけで、その度に同じ話を繰り返していたのだが。

そして今、親や塾の先生と同じ目線に立ってみて、自分が本当に一言一句違わず同じことを言っている。あの時自分は、「やめればいい」という答えに何と答えたのだったか。

少なくとも、自分が受け持った彼女はこう答えた。

「だって親にここに行けて行かされたんだもん。やりたいわけじゃないじゃん」

その言葉は、自分が学生の頃に内心想っていたこととそっくりそのまま一致していた。

そうか、分かった。彼女は過去の自分なのだ。そして今の自分は、過去の自分の両親、ひいては周りの大人と同じ目線になったのだ。

過去の自分は、大人からしてみればこのように見えていたのだ。

改めて、とんでもないクソガキだったと思い知らされた。自分で自分が恥ずかしくなった。

自分は勉強に関しては一欠片の、言わば「才能」があった。そのおかげで半年間死ぬ気で勉強をするくらいで第一志望だった一橋大学に滑り込むことができたのだから。

自分には幸運があった。去年度からセンター試験の形式が変わり、その問題形式が自分の得意分野だった。肝心要の一橋大学前期入試も、ネックだった数学が思った以上にスルスル解けた。

何より自分を応援してくれた家族や塾、周囲の環境に恵まれていた。何かが食い違っていれば、自分はあつという間に落ちこぼれていただろう。

彼女は赤の他人だが、受け持った以上は自分が勉強を見る義務がある。それが社会というものであり、責任であり、「働く」ということだと自分は思う。監督者の方から「もういいよ」と言われるなら仕方がない。けれども自分は自分にできる限り、彼女に向き合わなければならないと思っている。手を差し伸べて、それでも掴まないのならばそれが彼女の選択だろうけれども、期限のギリギリまではそうしていようと思う。

そして、この返しきれない家族への恩は、働いて得た月 2 万ちょつとのバイト代で何か買ったり贈ったりすることで返していこうと思っている。それでは到底返しきれないだろうが、親孝行とは元々してもしきれないものなのだ。19 歳になった今、家族に送り出されて社会に半身漬かっている身として、これからも自分に何ができるかを模索していきたい。

自分史(高校～現在)

法学部 1 年 松尾圭祐

YMCA 一橋寮に入寮させていただきました松尾圭祐です。福岡県北九州市出身、法学部、サークルはアルティメットサークル UFO に所属しています。よろしくお願いします。

これは締め切りギリギリに書いています。この会報を一稿書いて欲しいと言われても、書く内容は自由と言われてしまっただけで、ただでさえ自分の言葉で考えを表すことが苦手である私は何を書いているかわからなくなり、さらに3000字以上とのかかなりハードな条件を突きつけられたため、考えることをやめて放置してしまいました。しかし、何も考えずにいるのは良くないと思い、この知らせを受けてから書くテーマについて考えていました。まず、会報担当から提示された望ましいものについて、「読書感想文」や「自分の研究課題について」、最近では読みたい本もあるが、毎日をYouTubeなどの動画視聴に費やしているため実質積読状態になってしまい、さらに、よく読む本としてはサスペンスが多めであるので、読書感想文には少し似つかわしくないと考え、却下しました。研究課題についての文章に至っては、私はいまだに大学に入って約9ヶ月しかたっておらず、法学も憲法と刑法を少し齧ったくらいで3000字程度もの超大作は書けるとは思えず、聖書研究についてもまだまだ読み足りないところが多く、テーマにすることを断念しました。そこで、今年の会報に目を通してみると自分のことについて書かれているものが幾つか見受けられたので、私も自分のことについて書いていこうと思います。なかなか自分の過去について思い出す機会はそうそうないので、自分のことを振り返るいい機会になりそうです。前置きが長くなりましたが、本題に移ります。

中学生までも細かく書いていくと、記憶を掘り起こすのに時間がかかりそうなので、比較的記憶にも新しい高校時代から記したいと思います。私は中学校ではほぼトップの成績を取り続け、指定学区内では最も偏差値の高い東筑高校に入学しました。私は中学までバスケットボールをやっていましたが、なかなかうまくいかなかったため、経験者が下手であるのは恥ずかしいので、高校では別の部活、弓道部に入ろうとしていました。しかし、中学で共にバスケットボールをしてきた元キャプテンの友達 K が一緒にクラスだったこともあり、さらに中学の部はそこそこの強豪校だったなどの悪運が重なり、何かしらの繋がりでも K は高校の顧問と知り合い、入学式当日から練習に招かれそれに私も行かないかと誘われました。当時、私は体験入部の一環としていくぐらいいいかな程度の気持ちで快く誘いに乗りましたが、今となってはこの決断が今後の学校生活を決定的に決めたものだと思います。部活の時間になり体育館に足を踏み入れると、早速顧問に体育館倉庫に呼ばれ、中学時代についてやポジションについてなどいくつか質問されました。私は生徒会長であったことを言い訳に「練習時間が短かったから下手ですけど大丈夫ですかね?」と遠回しに部に入ることを断ろうとしましたが、顧問はこれを謙遜の言葉と受け取ってしまって、より期待を寄せるようになりました。顧問は私を「主力以外の余ったユニフォームを着させられた部員」ではなく「強豪校の一選手」として見ていたのです。また運が悪くも、その日の練習には少ししか参加しなかったため、まだ私のバスケの下手具合は明るみに出ませんでした。練習後は先輩方から期待の目を向けられ、断りきれない性格の私はなんとバスケット部の LINE グループに入ってしまった。逃げ場を失った私は足掻くこともせず、他の部活の見学に行くことなく、大人しく体験入部期間にバスケットボール部員になりました。

ここからが地獄の始まりでした。顧問も入部当初は笑顔で優しく接していましたが、これは部員をたくさん引き入れるための仮の顔で、体験入部期間が終わるとスパルタ指導で、何かしらに怒っている日がほぼ毎日でした。校

内でもバス部顧問は厳しく理不尽なのは有名で、部室や空き教室で話し合ったり、職員室に謝りに行くことは日常茶飯事でした。一度はキャプテンが顧問の家まで謝りに行ったこともありましたが。そんな厳しい練習状況の中で私はうまくやっていくこともできず、先輩や同級生にも迷惑をかけたり、高校でも全く上達せずに女子部員や後輩にも劣る次第で、罪悪感や羞恥心から部活に行くのがずっと嫌でした。しかし、部活を辞めるのは負けだと思っていた私は、意地でも部活を辞めずに最後までやり遂げようと思いました。また先輩や同期も私のミスに対して叱責することはありましたが、練習の支障になるから排除しようという人はおらず、最後の試合はベンチ入りすらありませんでしたが、最後は全員辞めることなく終わることができました。いまだに顧問の体罰に近いスパルタ指導を根に持ってネチネチ愚痴を言う部員もいますが、私としてはこんな形ではありますが部員たちとの団結力が高まり、さまざまな出来事が鮮明に記憶に残るような強い思い出となったので、こういった形の部活も悪くないと今では思うようになりました。

続いて高校での学校生活全般についてですが、ここでも同じクラスになった同中の友人 K が重要になってきます。まず、私はそもそも自分からあまり話すことなく、3人以上になってくるとうまく会話に入れないいわゆる「コミュ症」と呼ばれる部類に入るものだと思います。そんな中で、小学生の頃から築いてきた人間関係がなくなってしまい、一から友達作りをしなければならないことになりかなり不安を抱いていました。入学当初は、とりあえずどんな人でもいいから同じ中学の人と同じクラスになってほしいと切に願っていました。とりあえずその人と仲良くなろうとしていました。だから K が同じクラスだと知った時はかなりホッとしました。それだけではありませんでした。K は社交的ですぐにクラスの中心的存在になっていて、存在が遠くに感じていました。しかし、K は中学で見てきた私の為人とクラスの雰囲気をもとに私を「いじられキャラ」として改造していきました。私としても別にいじられるのは嫌ではなかったので、さまざまないじりを許容しました。このキャラが確立したことで私の人間関係はかなり広くなり、学校生活が楽しいものとなりました。時々無茶振りもされることもありましたが、みんなが喜んでくれるならと思って色々挑戦しました。そのせいか私に M 気質が備わったようです。一年生終盤になってくると、他クラスから見ると私に対するいじりは純粋な「いじめ」に見えていたようです。やっぱりいじめが問題になる場合には、いじめている側に悪意がない時も多いのではないかとふと思うことが多くなった気がします。三年生では一年中いじめられているにではないかと不安に思っていた、と卒業式の日担任に告白されました。

二年生になると K とはクラスが離れてしまいましたが、ここでも私の「いじられキャラ」は話題となって、クラスに同じ中学だった S もいて、すぐに多くの人と仲良くなりました。また、この時のクラスは三年生まで持ち上がって、男子の数が女子30人に対して10人だったのでさらに男子の絆が深まったような気がします。修学旅行では全員が同じ部屋に集まるということもありました。そんな中で信頼関係も厚くなり、言い方が正しいのか分かりませんが、いじりはさらに悪化していきました。それでもむしろ喜びを感じる私はもうすでに手遅れで、生粋のマゾヒストなのかも知れません。このこととも関連して、高校での一番の黒歴史は受験期です。この時期は全員何かで頭がおかしくなっていたのでしょう。私は S を中心にけしかけられ、成功するはずもないある同級生に告白してしまいました。周囲は見せ物のように見ている人もいましたが、私はそこには不信を抱いていましたが結局実行してしまいました。ここで周囲が本気で応援してくれているのか、ただ面白がっているのか言葉からだけでは読み取れず、ほんの少し人間不信になりました。結果はもちろん振られました。そこで終わればいいものの、私は何を血迷ったのか振られてから1ヶ月も立たずに別の人に告白をしたのです。こればかりは、今考えても理由が見つけ出せません。これを聞いた周囲は、驚くとともに面白がって狂喜乱舞していました。これも結果としては複雑な経緯をたどりましたが振られて終わりました。この騒動もあってか一橋大学は現役合格できませんでした。このほかにも私は直接関わ

っていませんが、自分の代では多くの進学校にはあってはならないようなハプニングが度々あってそのニュースが流れるにあたり、その噂話で持ちきりになって面白いものが多かったですが、会報ということを考えて、書くのを自重します。

卒業して、合格発表後一応後期で合格した熊本大学に行くか、浪人するか迷っていました。そんな時、同じクラスだった S が河合塾の説明会に誘ってきて、とりあえず行っただけ行ってすぐ帰ろうと思っていました。デジャヴです。説明を聞くだけかと思ったら、もうすでに浪人する気の S とともに申し込みの説明を個別にされて流れで予備校に行くことが決まってしまいました。親は元々「一年だけなら」という条件付きで浪人は認めてくれていたので、すぐに承諾はしてくれました。しかし、浪人しなければ一橋大学にはいけなかったわけで、S が誘ってくれたことは幸運でした。浪人中は S もいてお互いに叱咤激励しながら勉強できたためか、あまり勉強は苦に思えませんでした。ただ、毎日毎日同じことの繰り返しで、さらに大学に合格できるかの不安で無感情になってきていました。そこで、現在の趣味となっているアニメに出会いました。当時アニメはオタクの見るものであまり世間的にはオタクと見られたくないため忌避していましたが、S から勧められて一度見てみるとアニメの作り出すドラマでは表せない世界観に引き込まれて一気にハマっていき、何もなかった日常がアニメのおかげで楽しいものになりました。一番初めに見たのは『氷菓』です。また、受験生である自分に重なるような激励の台詞などがあればそれが勉強の原動力となったこともありました。アニメは浪人時代を支えてくれた大事な趣味です。ほかにも浪人中の数ヶ月に一回九州大学に通っている高校同期の元に遊びに行くこともありましたが、そこでも一晩中お酒を飲んで色々話して英気を養うことができました。ともに勉強に励む S の存在やアニメの支えのおかげで、勉強も順調に進み、京大、神戸大、一橋大の実践模試ではすべて成績優秀者になり、本番も余裕を持って試験に臨むことができ、無事に合格できました。

大学生になり、また心機一転勉強に励もうと意気込んでいましたが 1 人で周りの目もないせいかサボり気味になって、オンデマンド授業もギリギリまで貯めつつあります。ただ最近ではサークル活動も始まり、友人関係も少しずつではありますが広がってきて、大学生活はさらさらはしていませんが自分なりに充実したものになりつつあります。現在勉強を妨げている、またはモチベーションを下けている要因と考えられるのは、課題の重い P A C E があるので 2 年生になった時に学問に没頭するか否かの真価が問われそうです。

周りと比べて拙く幼稚な文章取ろうと思いますが、最後まで目を通していただきありがとうございました。付け加えて少し盛った話もあります。今後も YMCA の寮生としてさまざまな活動に参加したり、自分の役割をしっかり全うしていきたいと思います。改めてよろしくお願いします。

正しさの難しさ

法学部 2 年 猪股梨玖

私は一年生の時はヨハネの福音書を、二年生ではマタイの福音書を聖書研究で読んでいます。そのどちらにも出てきた教えで、私が特に関心を持ったものは「正しい裁きをしなさい」という教えです。

初めにこの言葉がどういった教えとされるかについてまとめると、「うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。」(ヨハネによる福音書 7 章 24 節)とあるように、自らの勝手な価値判断で人を裁くのではなく、神様による正しい裁きに任せなければならないというものであるとされています。この箇所について、聖書研究でお世話になっている牧師の水口功先生は、一切の裁き(判断)をしないのではなく、自分勝手な裁きにならないように気をつけることが重要であるということがここでの大切な教えであると示されました。

また、ルカによる福音書の第六章 41 節 42 節では「あなたがたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目にある丸太に気づかないのか。自分の目にある丸太を見ないで、兄弟に向かって、『さあ、あなたの目にあるおが屑を取らせてください』と、どうして言えるだろうか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目にあるおが屑を取り除くことができる。」とある。この箇所は自ら罪に目を向けずに他者の罪を咎める姿勢を批判する部分で、人を裁く前に己の罪に向き合う重要性を説いているとされています。まとめると、「人間の不完全な考えで相手を裁くことは難しいため、少なくとも身勝手な判断をすることや自己を省みない偽善的な姿勢は控えなければならない」という教えです。

今回はこの聖書の教えを手がかりにしながら、「正しさ」に関する様々な問題や、それに対してどのように対処していくのが良いかについて考えていきたいと思います。

第一に、聖書で示されている、「人は不完全であり間違いを犯すものである」という考えはキリスト教的人間観を抜きにしてもなお大切だと思われます。自分が正しいと思っていたことが間違っていたり、間違っているにもかかわらず気づかないということもあるでしょう。私たちの限られた視点では完璧な判断は難しいのですが、それでも一切の判断をしないという姿勢は現実的ではないので、重要なのは自らの考えが絶対的なものであると過信せず、様々な可能性を認めることであると考えられます。私の住む YMCA 一橋寮においても日々様々なトラブルが発生しますが、安易に相手を批判するのではなく、さまざまな事情があることや、自分の予想や考え、そしてそれらの前提となる根拠の部分が誤っている可能性にも目を向け、決して自分の秤で相手を裁かないように心がける必要があるように考えられます。私は今年設備担当をしており、寮内で誰かが掃除を忘れるなどのトラブルを起こしたときにどうするか判断をすることになっており、幸いにもこの記事を書いている今のところは難しい問題も発生していませんが、それでも判断を下す時には気をつけたいと思います。

私は 2 年生の春夏学期で西洋思想の講義を受けたのですが、そこで学んだことに、「自らが当事者の問題は客観的な判断を下すことが難しい」というものがあるのですが、このことにも人が誤った裁きをしてしまう一因があるように思われます。相手の過ちや論理の破綻は見分けられても、自らの誤りに気づくことは難しいからです。そのため、自分が正しいと思い込み、相手を自らの価値判断で裁くことにつながると考えられます。この問題に対する自分なりの解決策は、常に自分の行動や主張が正しいものであるかということについて批判的に自問自答を繰り返すことですが、他にもさまざまな解決策があると思われるので一度考えてみるのもいいと思います。

また、私が日常において見かける「正しさ」に関する問題として、自らの個人的な好き・嫌いを善悪(正しい・間

違い)の問題に置き換えて、自分の気に入らない考えを悪(間違い)として批判するというものがあります。この例としては、腐女子(二次元や BL など好むオタクの女性、蔑称ではなく本人たちの呼称)における「解釈・解釈違い」が挙げられます。私の知り合いにも腐女子とされる方々がいますが、「A さんと B さんの組み合わせしか認めない、AさんとCさんを組み合わせる人はキャラの容姿しか見ていないからゴミ」と言った過激な発言をする人もおり、自分の好みに合わないために攻撃するということがしばしば発生しております。*1 しかし、こうした二次創作における解釈は正しいか間違っているかという問題でなく、個人の嗜好に過ぎないと思われます。そもそも二次創作である以上、多かれ少なかれ原作にない自らの解釈が含まれていますし、原作から離れた表現であっても他者を貶める意図や特段の事情のない限りあくまで一つの解釈として尊重されることはあってもことさら批判されることはないでしょう。そのため、この例では自分の気に入らないものを「悪」と認定し、「正義」である自分の立場から相手を否定しようとしていると考えられますが、その「正義」は実は個人的なエゴであり、間違っただけを裁きをしていると考えられます。こうしたケースは我々の日常においても起こりうるものであるため、自らの「正義」が単なるエゴでないか省みることが大切だと思われます。また、同様の問題として相手に対する好き嫌いの心情が相手が正しいか間違っているかの判断に影響を与えるというパターンも考えられます。こうしたバイアスを知覚して無くそうとすることも重要であると思われます*1。

他にも、大事にとっておいたプリンを勝手に食べられたからといって相手を殺害してはいけないように、相手の行いや主張が間違っているとしても、自分のその後の対応を誤ってはいけないということも大切です。これは今日のネット社会で見かけられることですが、問題を起こした人や法を犯した人に対して誹謗中傷をしたり、私刑が行われることがあります。また、私たちの普段の生活においても相手が間違っているからこっちもそれ相応の態度を取ろうとして結果的に自分たちも悪い行いをすることもあつてしょう。こうした行動は相手を不用意に傷つけることになったり、自分も間違っただけになったりするため、避けるべきでしょう。

以上のように、「何が正しいか」というのは非常に難しい問題であり、ここで挙げたこと以外にも考慮すべきことは多くあつてしょうし、個人の道徳法則や信仰などによつても何が正しいかに差異が有つてしょうが、それでも人はその時々状況に応じて判断を下さなければならぬので、独断を避け、常に他の可能性を考慮しつつ、謙虚な姿勢で判断を下すことが重要であると思われます。自らの意志の格率を普遍立法の原理に妥当させることは難しいことですが、そのことが正しい判断をするために必要な事なのだと私は考えました。

最後に、このテーマに関心を持たれた方には「寛容のパラドックス」というパラドックスについて考えてみられることもおすすめてします。これは、「社会が無制限に寛容であるならば不寛容な人々をも許容しなければならぬ、最終的に不寛容な人々によつて寛容性が奪われるか破壊される。そのため寛容な社会を維持するためには不寛容な人々に対して不寛容にならなければならない」というものである。先程の腐女子の例を用いると、他者を攻撃する不寛容なオタクに寛容でいると、最終的には不寛容なオタクに攻撃された人々が萎縮してしまうので、不寛容なオタクを許容せず、寛容なオタクを守らなければならないというものです。今日では多様性や寛容が話題になることも多いので考えてみると面白いと思います。

*1(この証拠となる発言はプライバシーのほか様々な理由により引用を避けますが、ネット上で「顔カブ」と検索すれば上記と同じような、場合によってはより攻撃的な発言も確認できると思われます。)

親のありがたみ

法学部 2 年 高岡竜成

私が大学生になって、1年と半年が経とうとしています。私が大学生になった 2020 年 4 月、新型コロナウイルスの感染が爆発的に流行し、大学の授業はすべてオンラインとなってしまいました。そのため、大学 1 年の 4 月から 8 月までは、地元広島の実家で、大学生になったことを感じるできないまま、ひたすら家にこもって、パソコン越しに教授の退屈な講義を聞いていました。同年の 9 月からは、コロナがやや収束方向に向かい、一部対面授業となったことで、YMCA 一橋寮で生活すべく、上京しました。これが、私が完全に親元から離れて暮らす最初の経験となりました。寮に来た頃の頃は、洗濯、食事、掃除、など、今まで両親にやってもらっていた家事をすべて自分で行わなければならない、慣れない家事をしなければならないことに、ひどくストレスを感じるとともに、親の尊さ、ありがたみをつくづく感じていました。また、サークルや部活などに入るタイミングを完全に逸し、なかなか友人を作ることができなかった私にとって、寮の先輩や同級生以外で話したり、交流したりする人はほとんどいなかったものですから、たまにかかってくる父親、母親からの電話や仕送りとともに送られてくる荷物は非常にうれしく、安心させられるような気持ちになりました。

時は流れ、YMCA 寮に来てから半年が経ち、冬休みになりました。本当は、実家に帰省したかったのですが、このころ、新型コロナウイルスの感染者が、爆発的に増え、帰るに帰れない状況でしたので、寮の一室で一人寂しくクリスマス、新年を迎えることになりました。特に、クリスマスに関しては、まさに「クリぼっち」という状況であったので、非常に悲しく、寂しい思いをしたことをよく覚えています。また、この冬休み(12 月下旬から 4 月上旬)は、新型コロナウイルスがなかなか収まらなかったことに加え、私的な用事もあったため、帰省の機会がなく、この期間中、1回も地元に戻ることはできませんでした。このころになると、寮に来た頃の頃に大嫌いであった家事に関しては、かなり慣れてきていたので、ストレスには思うことは少なくなり、特に、料理に関しては趣味にまでなっていましたのですが、それでも、帰省の思いや、家族に会いたいという思いは、日に日に大きくなる一方でした。

冬、春休みも終わり、大学 2 年生としての学期が始まりました。当然のことながら、学期中は授業がありますので、帰省することもできず、実家が恋しくなるばかりでした。このころも、両親は、定期的に電話をかけてくれ、自分が抱えている悩みや問題について聞いてもらったり、家族の現状について教えてもらったりしていました。この両親からの電話をもらうたびに、親への感謝の気持ちは強くなるばかりでした。

2021 年の春夏学期も終わり、大学生になって二度目の夏休みがやってきました。さすがに、この夏休みを利用して、一度地元に戻ろうと思っていましたが、このころになると、帰省ラッシュに伴って、再び新型コロナウイルス感染者が急激に増加するとともに、同時にワクチン接種も開始されたために帰省の日程が整わず、残念ながら今夏も地元に戻り、徐々に家族と再会することもかないませんでした。両親も自分が帰ってきてくれることを楽しみにしてくれていたそうなので、帰省することができず、寂しい限りです。

さすがに、地元に戻ることはできず、地元の友人や両親に会えずに 1 年も経過してしまうと、望郷の念がより一層強くなるとともに、日常生活を送っているときにさえも、ふと寂しさを感じることも増えてくるようになりました。何とか今年中には地元に戻り、家族と再会して様々な話をしたり、一緒にどこかへ旅行したりできればと思っています。

それにしても、私は本当に不思議に思います。かつて地元でいたころ、私は、親にありがたみを感じたことはなかったことはないけれども、そこまで強いものではなく、また、自分は早く大学生になって、地元を出たいという気

持ちがとても強かったのです。特に、私が高校生であったころ、私は反抗期真っただ中にあり、親と言い争うことも多く、また、学校生活に加え、部活動に塾といった多忙な生活を送っていたため、家族や両親について考えることもほとんどありませんでした。親に対して、暴言を吐いたことさえありました。特に、私が高校 3 年生だったころ、部活動や模擬試験で結果が出ない時期に、親から求めてもないアドバイスを受けたり、志望校を決める際に、親と考え方が真っ向から対立したりしたときに、ひどくいら立って、機嫌が悪くなり、ここでは書けないようなひどいことを言ってしまったこともよく覚えています。しかしながら、今では前述したように、親元を離れた寮暮らしの中で、寂しさを多く感じるとともに、両親に会いたいという気持ちが強くなっているのです。高校生から大学生になっただけで、こんな心情変化が起こるとは想像もしていなかったし、本当に不思議なことです。そして、親の存在は絶大なものであると改めて感じています。

さて、私は 10 月 16 日に誕生日を迎え、20 歳を迎えます。この日には、20 年間自分を育ててくれた感謝を伝えたいと考えています。そして、これからは、大学時代に学んだことを生かして、自分の夢をかなえ、親孝行ができればと思っています。しかし、ただの大学 2 年生である現時点では大したことはできません。今、自分にできることは、将来、自分が親孝行することができるように、一生懸命勉学に努め、地元に戻った時に、両親に元気な顔を見せることであると思います。それが、今、私が両親に対してできる最大限の親孝行であると信じ、両親への感謝に気持ちを忘れず、頑張っていきたいと思っています。そして、将来、いつか自分が親になった時、自分が受けた親からの愛情や恩を、自分の子供に与えることができるように、残りの大学生活で、様々なことに全力で取り組んで行きたいと思っています。

大学三年生

商学部 3 年 桑江竜威

今回会報を書くにあたって、一番苦労したのは何を書くかということである。近況報告、自分の専攻、読書感想文など書けそうなテーマはたくさんあるのだが、会報に載せられるほどの字数にはどれも届きそうになかった。かなりの時間悩んだのだが結局苦肉の策として、何となくずっと考えていたことや夏休みの思い出など、いろいろと候補に挙がっていたいくつかを短めに書くことにした。テーマとしてまともではないが、「無理に書けないものを字数に届かせるために内容を薄くして引き伸ばすよりはましだ」と判断した。

名前負け

「エモい」ってあんまりエモい表現ではない。最近よく使われる「ナウい」言葉で意味は、懐かしいとか情緒があるとか様々でとにかく感情が揺さぶられたときに使われるらしい。「エモい」という言葉を多用する人は、感情を揺さぶられることが好きなくせにそれを感情を揺さぶるように表現することは苦手なのだ。もしくは普段感情が揺さぶられすぎているからせめてそれを表現する時くらいは「月並みな表現」を使いたくなるのだろうか。とにかくこんな言葉を自分自身は使おうとは思わない。こんなことを会報に載せて自分でももはや何が書きたいかわからないが、こんな文章でも何年後、何十年後に読み返すときがくるかもしれない。大学生の時に書いた文章を年をとった僕が読む。そのことを思うと、何とも言えない気持ちになる。この感情は「筆舌に尽くしがたい」。強いて言うなら「エモい」だろう。

一番大切なもの

「お金が一番ではない」って言葉をよく耳にする。僕はこの言葉に大賛成だ。美しい自然、小説、映画、旅行、その他いろいろこの世の中にはお金以外にすばらしいものがたくさんある。できることなら自分の人生をこういったもので埋めたい。一度きりの人生なのにお金なんてものに一生懸命になったり悩んだりする時間が多くていいはずがない。「人生が豊かな人」というのはお金なんかに悩まず、自分の好きなことをなるべくたくさん味わうことができる人なのかもしれない。そうであるならば、そのような「人生が豊かな人」を目指すのは僕にとっては当然である。目指すためにはまず目標を具体化しなければならない。さて、お金に悩んだりする時間ができるだけ少ない「人生が豊かな人」とはどういう人だろうか。答えは簡単である「お金持ち」だ。それでは、僕の頑張るべきこと、一番頭を使わなければならないことは、「いかにしてお金を稼ぐか」ということである。

実家のような安心感

大学三年の夏休みに大阪に行った。この大阪来訪は、もともと予定していたものではなく、当初の予定が実行できなくなって急遽決まったものであった。そのため、特に計画を立てていなければ一緒に行く友達もおらず、一人での大阪観光であった。大阪を訪れるのは二回目では初めてではないが、一回目はかつて所属していた体育会の大会がメインだったので大阪らしいところも大阪らしいことも経験せずに終わってしまった。せいぜい「たこせん」を食べたくらいである。そんな理由から、急遽決まった大阪の一人旅もかなりワクワクしながらスタートすることができた。とりあえず「大阪っぽい」というのを重視しながら行く場所を決めた。最初に選んだのは梅田で、電車を降りて

すぐにたこ焼きを食べた。そこまではよかったのだが、次に何をしたらいいのかがわからず、ただうろうろし続けた。スマホを使って梅田の観光地を検索すればよかったのだが、僕の部屋の wi-fi が不調であったことでスマホはすでに通信制限にかかってしまっており、それもなかなか手間であった。そんなこんなで梅田には見切りをつけ次なる「大阪っぽい」場所である道頓堀へと向かった。道頓堀に着くころにはもうすでに外は暗くなり始めていた。そのためかキャッチもコロナ禍なりに存在していて関西弁で声をかけられ続けた。特に目的もなかったのだが、少なくとも例の「グリコ」だけは写真に撮ろうとそこを目指した。しかし、どうもなかなか見つからない。通信制限の中で苦労しながらスマホのマップが指し示す場所に行っても見つからなかった。この辺から、長距離移動、キャッチ、見つからないグリコなど様々な要因で疲れはピークに達していた。「国立に帰りたい」とまで考えながら歩いていたとき、発見した。伝説のすた井を。国立で何百回と見てきたその店は道頓堀仕様で確かにそこに存在していた。疲れを少し忘れることができた。

無駄な支出

コンビニやスーパーに行くとはほぼ必ず買ってしまうものがジャスミン茶だ。この飲み物を「ジャスミン茶」と言い始めたのは大学生になってからで、地元である沖縄では「さんぴん茶」と呼んでいた。呼び方にこだわっている地元の友達は何人かいるが、僕自身はどうでもいいので今は「ジャスミン茶」と呼んでいる。沖縄では、どこに行っても日常的に飲む機会があったのだが、東京に来るとこれを飲むためには自分で買うしかない。呼び方にはこだわっていないが、好きなものは好きなのでどうしても買って飲むのはやめられない。僕の支出の中で最も割合を占めているものではないが、最も無駄な浪費ではある。コンビニで買うと一本百円だが積み重なると出費もばかにならない。これはまずいということで、数ヶ月前に寮で作れるようにジャスミン茶のパックとボトルを購入した。しかし、一回も使うことなくジャスミン茶のパックをまるまる紛失してしまい、ジャスミン茶をコンビニで購入し続ける日々が続いていた。積み重なる出費と部屋にたまり続けるジャスミン茶のペットボトルにうんざりしていたのだが、なんと昨日偶然にもかつて購入した封すら切られていないジャスミン茶のパックを部屋の前の棚で発見した。これでついに最も無駄な支出をなくすことができる。大いに喜びながら、今この文章をコンビニで購入したジャスミン茶のペットボトルを横におきながら書いている。

コミュニケーションについて「考えて」きたこと

商学部 4 年 鳥居大朗

私はこれまでに 3 回会報を書いてきたが、うち 2 年生と 3 年生では対人関係、特にコミュニケーションについて書いてきた。また日常生活でも、私はコミュニケーションについて考える時間が人よりも多いように思う。もちろん自分が完璧だとは考えていないし、むしろここまで時間を割いて考えているのも元来私がコミュニケーションに苦手意識を持っているからである。しかし少なくともここ数年で、「これは人に共有したい」と思えるような気付きはいくつか得てきた。今回はそれらについて書き、私の最後の会報文しようと思う。なお、今回は主に 1 対 1 または少人数でのコミュニケーションについて述べる。

1, 論理的≠感情無視

すでに色々なところで言われ過ぎて、ほとんどの人にとっては「何を今さら」といったところだろう。しかし未だに相手の感情に配慮することなく正論を文字通り「ぶつけて」いる人は一定数いる。これにはいくつかの原因があると思われる。

①「正しい事は正しいのだからそれ以上に何も考える必要はない」と考えている

②「論理性と感情への配慮はトレードオフ」と考えている

③「感情を無視する俺カッコいい」と思っている中二病

①については、確かに正しさは大事である。特に何かを決める時の話し合いや仕事での指示などでは、内容の正しさは発言の前提条件である（「正しさは人によって違う」などそもそもの正しさについての議論はここでは置いておく）。しかし、大事なのは正しさだけだろうか？話し合いの最終目的は「決めること」であり「合意」である。仕事の指示の目的は「仕事を進めること」であり「伝達」である。そして相手は論理だけで動くロボットではなく、ほとんどの場合感情を持った人間である。そのような相手に対して受け入れやすい形に加工せずに「正しいんだから受け入れろ」と正論をぶつけるのは、合意や伝達という観点で、また長期的な相手との関係という観点でも効果的とは言えないのではないだろうか。

②について、このような人は一つ大きな勘違いをしている。「論理性」は伝える内容の問題、「感情への配慮」は伝え方の問題であって、そもそも競合するものではない。つまり「感情に配慮するのと正しい事を言うのはどっちが大事なんだ！」という問いは、そもそも比べようのないものを比べていることになる。答えるとすれば「どちらも大事だしどちらも考えるべきだ」というのが答えである。

③については特に何も言う事はない。中二病が収まるのを待つしかないだろう。

2, 2 秒思考でアドバイスしない

これは主に悩み相談やトラブル解決の際に気を付けるべきことである。人が何か相談しているのを聞いていたり、あるいは私自身人に何かを相談したりしてよく見るのが、話を聞いた段階で相談された側がすぐに答えを出して解決しようとするパターンである。「問題解決がすぐに出来ていて、良いのでは？」と思う人もいるだろうが、これには二つの落とし穴がある。それは、

①背後にある事情を考慮に入れずに解決しようとしても解決にならない

②解決方法は一つではない

①について、一見簡単に解決できそうな問題だったとしても、往々にして背後に時間的・金銭的制約や、個人の信念や信条などその人なりに大切にしている事が絡んでいることも多い。というより、そのように問題が複雑に絡み合っているからこそ、すぐに答えが出ずに「人に相談する」という行動を取っているのである。最終的にそれらの条件に合わせて解決するのか、それともある程度は妥協して解決するのかは、場合によって異なるだろう。しかし少なくとも悩みを聞いた段階では、次にすべきことは背景にある相手の事情を深く知っていくことなのではないだろうか。

②について、例えば「仕事の負担が大きすぎる」という相談一つをとっても、人に頼る・自分のキャパシティを増やす・仕事の量を減らしてもらうなど、問題解決にはいくつもの方法がある。話を聞いて一つ目に思いついた解決方法を押し付けるよりは、どのような手札が手元にあるのか、そのうちどれを選ぶのが最も効果的なのかを相手と共に深く考えて答えを出す方がより効果的な解決になるのは明らかだろう。

ここからは私の個人的な意見になるが、悩み相談では「相手に解決方法を与える」のではなく、「相手が解決方法を考える手助けをする」ことに専念すべきだと思う。悩みの解決によって利益を得るのは相談をしている本人なので、最終的に本人の中で出た結論の方が人から与えられた結論よりも納得して受け入れられるのではないだろうか。また、「人に話しているうちに自分の中で整理されて答えが見つかる」という効果も見込める(実際に私がアルバイトの個別指導をしている時も、生徒に自分の解き方を説明させているうちに自分で間違いに気づくということはある)。これが絶対的に正しい相談の受け方とは考えていないが、一度試してみてもいいかなと思う。

3, 「正しさ」と「心地良さ」

人間関係において、往々にして「これが正しいんだ！」と絶対的な正しさを主張する人がいる。いや、私を含めほとんどの人は何かしらの「正しさ」に基づいて意見を言っているだろう。確かに「物事はこうあるべき」だったり「こういう人間であるべき」などといった「正しさ」は自分の行動、ひいては人生の指針となる重要なものである。しかし人間関係で「正しさ」にこだわりすぎると、何が起ころうか？そもそも何を「正しい」とするのかは人によって大きく異なるし、その人の中で「正しさ」として存在している以上「絶対的に間違っている正しさ」などというものは存在しない(法律違反や重大な倫理観の欠如は別として)。すると「正しさ」と「正しさ」のぶつかり合いという、勝ち負けの基準が存在しない不毛な争いが生まれることになる。

では正しさ同士がぶつかって平行線を辿っている時、どうすれば良いのか？私の一つの提案として、「こうあるべき」から「こうあれば楽だよね/心地良いよね」という考え方に変えて話し合うのはどうだろうか。自分の中の「正しさ」が満たされないという不満は残るかもしれないが、延々と平行線を辿っていく「正しさのぶつかり合い」よりはお互いの負担は少ないのではないだろうか。それでも自分の中の「正しさ」に拘りたいと言うのなら、自分と同じ「正しさ」を共有する相手を見つけるほかはないだろう。

以上が、私が日々色々なところでコミュニケーションについて考えたりひらめいたり感じてきた事のほんの一部である。多くの人には「何を当たり前のことを」といったところだろう。しかし、かつての私と同じように、深く考えて納得しなければこの「当たり前」に辿り着かない人に1人でも届けばそれで良いと思う。

近況報告 ジョギングで広がる新たな世界

崔 勇 (平 2 法卒)

平成2年卒の崔 勇です。とりとめのない内容で恐縮ですが、以下近況報告としてお付き合い下さい。

1990年3月に卒業し、4月から社会人生活を開始し今年で32年目に突入しました。前回は資産運用について書きましたので、今回は仕事以外の話題をお届けします。仕事以外の現在の私の日課はジョギングです。早朝の皇居の周辺を約12-13キロ周回し、雨の日を除いてほぼ毎日ジョギングしています。家族が誕生日に贈ってくれたアップル・ウォッチに促され、月300キロ、年間3,600キロを目標に、昨年、今年と何とか目標通りに走っています。コロナ禍で、在宅勤務を余儀なくされている方が多いと思いますが、オフィスの方が仕事が捗ることを口実に、ほぼ毎日出社し、ジョギングで1日を開始しています。オフィスに近い将門塚を出発し、皇居周辺の周回コースに入ります。如水会館を右手に見ながら、東京国立近代美術館、国立公文書館前の緩やかな坂を上り、代官町の首都高入口をやり過ごし、英国大使館の手前で左折、その後半蔵門を通過し、国立劇場、最高裁、三宅坂を右手に見ながら、外務省、警視庁、桜田門までの緩やかな坂道を駆け下り、桜田門をくぐって皇居前広場に入ります。内堀通りを走り、東京駅の正面に繋がる御幸通り、パレスホテルを右手に見ながら、大手門まで帰って来ます。皇居周回は約5キロですので2周走ることになります。皇居周辺の季節の移り変わりを全身で感じつつ、顔なじみ常連組の方々との緩やかな交流も楽しんでいます。続けられている最大の理由は、もちろん無理をしないことありますが、走ることで心身がリフレッシュできるというメリットがあります。仕事で壁にぶち当たったり、考えがまとまらない時に、走ることでもやもやしていた頭が整理され、考えがより明確になり、それまで思いつかなかった良いアイデアも浮かんで来ます。瞑想に近い効果も得られ、自分と対話するために走っている、とも言えます。走り終わると心身ともに爽快になり、また走ろうという気持ちにさせてくれます。

ジョギングは約30年前に赴任していた京都で、お取引先の部長にお誘いを受け、地元のマラソン大会に会社の同僚と参加したことが契機となりました。その後、フルマラソンにも挑戦し、会社の同僚達と東京マラソンにも参加しました。2010 年前後のマラソン・ブームもあって、周囲にジョギングやマラソンをしている方が多数おられ、マラソンを通じて多くの知り合いができました。国内外の出張先に必ずランニング・シューズを持参し、滞在先で時間を見つけてジョギングしています。残念ながら、コロナ禍で最近では出張できませんが、ロンドンのケンジントン公園、シカゴのミレニウム・パーク周辺や、ニューヨークのセントラル・パーク(ジャクリーン・オナシス・ケネディ貯水池の周回コースは最高です！)を多くのランナーがジョギングをしており、これに参加することが出張の楽しみの1つになっています。

シニアにとって、マラソンの最大の障害は、膝や足の怪我や故障です。特に夏場は汗により身体ミネラルが流出し、栄養補給や適度に休むなどの体調管理も欠かせません。走る姿勢が悪いため、膝のお皿の外側が痛むマラソン膝（腸脛靭帯炎）に苦しめられましたが、トレーナーの方に走り方を矯正してもらい、痛みが少しずつ和らぎ、無理なく走れる様になってきました。何かの記録のためではなく、ジョギングを楽しむために、これからも末永く続けてゆきたいと思います。最後までお付き合い頂き有難うございました。（以上）

ヨガと日常

経済学部 3 年 下野 治

1 はじめに

私は最近ヨガに凝っている。きっかけは、大学の授業でヨガを履修したことだ。私が当初ヨガを履修した目的は、柔軟を通して部活での疲労のケアを行うためであった。履修する前、私はヨガに対して、“柔軟をメインとした軽い運動”といったイメージを抱いており、単位が取れて疲労も取れるならいいかといったやや消極的なモチベーションであった。しかし、ヨガの授業に参加していくうちに、ヨガとは軽いケア程度の運動や柔軟に限らない、スポーツの枠からみ出る、食事など生活全般に及ぶものであると知った。実際私の母親も、ヨガと聞けば皆が連想するような、街のホットヨガスタジオに通っている。そこでは私の思い描いていたような柔軟や体幹トレーニングを中心とした運動を行なっているようだが、それは単にヨガの一部を抽出しているだけである。以下では、授業で習った動きを中心として、自分の生活にヨガを取り入れられるような練習メニュー作成を行う。ただし、前述のようにヨガ＝柔軟ではないため、食習慣を含めた日常を向上させられるようなものを考える。また、この会報を読んだ人にとって、以下がヨガで日常を見直すきっかけとなればよいと思う。

2 練習メニュー作成にあたって

ヨガを行う目的は多様に存在し、また、そこへの到達手段も様々に存在する。そのため、練習メニュー作成の際も、メニューをいくつかの目的ごとに分け、それぞれに具体的なアーサナ(目的に応じた体位)を考えることにした。

まずは、私の日常の最も大きな部分であるハンドボールのためのヨガである。私はハンドボール部に所属し、一週間の多くをその練習に費やしている。体が硬いと怪我をしやすくなり、また運動後も疲労が残りやすくなるため、スポーツにおいて柔軟性は重要である。実際、私は体の柔軟性が低いせいで何度も怪我をしている。また、怪我予防のためだけではなく、柔軟性はスポーツにおけるパフォーマンス向上にもつながる。ハンドボールでは、ボールを投げる右肩、肩甲骨周辺が柔軟である方が、より全身の力をうまくボールに伝えることができ、より強く、速いボールを投げることができる。よって柔軟性の向上はすなわちハンドボーラーとしての向上につながると言える。なお、柔軟を行う際は、ただ、柔らかい筋肉というより、しなやかで弾力のある筋肉が理想のため、静的なものよりも動的なストレッチを行いたい。静的ストレッチのみで獲得したただ柔らかい筋肉は、可動域そのものは広くても、運動性が低かったり、動きの中で力を発揮しにくかったりするからだ。またハンドボールでは空中でのボディーバランスや激しい接触に耐える体幹が求められるため、柔軟だけではなく、太陽礼拝や戦士のポーズなどの筋力が強化できる動きも取り入れたい。

次は、勉強や就活などによって心身ともに疲れた時や、寝る前などに行うリラクスのためのヨガである。ヨガの授業で初めて瞑想をした時、覚醒時のスッキリとした感覚がなんとも絶妙であった。集中とリラクスが両立したような不思議な感覚を味わうことができた。うまく瞑想に集中できた際の清涼感は、単位時間当たりの回復量が求めら

れる勉強の休憩時間に最適であろう。他にも倒立なども頭に血流を送り、リラックスするのに向いている。就寝前に布団の中で行うシャバースナも睡眠導入になるだろう。シャバースナとは、一度全身に力を入れてから脱力することで筋弛緩が起こり、よりリラックスすることができるというヨガである。

最後に食事に関するヨガである。親元を離れてもうすぐ3年になるが、一人暮らし初心者の頃と比べて外食ばかりになってしまっている。アーサナの練習や瞑想などに日々取り組んでいると、自分の感覚に対して鋭敏になる。それに伴って食事に対する考え方や嗜好が変化していくこともある。自分に合った食事に変えていけるように食生活を見直したい。

3 具体的な練習メニュー

(1) ハンドボールのためのヨガ

① 太もも伸ばし

外部からの先生が来てくださった時に教わった。動的にハムストリングス、ふくらはぎを伸ばす。

② ダウンドッグ

ふくらはぎ、背中、肩甲骨を伸ばす。

③ 赤ちゃんのポーズ→左右へ揺らし

これは普段のヨガの授業でも頻繁に行った。肩回りが伸びる。

④ イーグルポーズ

これも上と同様に肩回りが伸びる。

⑤ 太陽礼拝

ヨガの基本でストレッチのあと筋肉を動かす前に入れることで体にスイッチを入れる。

⑥ 戦士のポーズ1～3

筋力とバランス力、柔軟性の向上が見込める。ひねりや足上げを入れることでより発展させることもできる。

(2) リラックスのためのヨガ

順不同であり、行いたい順番で行えば良い。

① 瞑想

瞑想の効果は先述の通りだが、朝早く誰もいない外で瞑想をすると効果はよりはっきり感じられた。

実際私は一橋のグラウンドで朝早く瞑想をしたことがあるが、部屋の中よりも頭をからにするのが容易で集中しやすい。

② 倒立

脳に血流を流し、足にたまっていた疲労物質なども流すことができる。実際に早稲田大学の首席が勉強の休憩時間にやっていたと聞いた。

③ シャバースナ

眠る前などにすると普通に寝付こうとするよりも早く寝付ける。

(3) 食事とヨガ

現状、朝ごはんを食べない日もあり、食べる日でも冷凍パスタである。冷凍食品は保存料も入っているため、本当は体にもよくない。タンパク質も摂りつつ、朝は野菜を多く摂りたい。ヨガは動物性タンパク質や

発酵食品を否定するが、ヨガが盛んな地域と日本では気候や風土が違うので、私はこれらを否定はせず、摂っていききたいと思うが、野菜をないがしろにせず、むしろ意識的に摂取することを心がけたい。

4 最後に

ヨガを履修して授業に参加することで、ヨガに関する知識は増えたが、これらは実践しない限りなんの意味もない。練習メニューの全てをこなし続けるのは困難だが、1日5分でも今回作成したメニューを意識した生活を送り、立派なヨギーニになりたい。

国立における居酒屋の研究

経済学部 4 年 小林莉季

YMCA 一橋寮の寮生が住む街、国立。学生時代の様々な思い出が詰まっていると思います。

私にとって寮はもちろんのこと一橋大学、大学通りの桜など思い出がありますが、一番は居酒屋かもしれません。趣味が居酒屋巡りの私は学生時代、国立の居酒屋開拓に励みました。そんな国立で、地元で愛されている居酒屋の中から、個人的におすすめの居酒屋をいくつか紹介させていただきたいと思います。OB の方々が実際に訪れたことのある店もあれば、卒業後に新しくできたものもあります。懐かしさや新鮮さを感じていただけたら幸いです。

・うなちゃん

☆高架下

国立駅から徒歩 1 分。1964 年創業、屋台が始まりの鰻酒場。

中央線の改修により移転はしたものの、建物をそのまま移動し、創業当時の建物が残されているとの事。昔ながらの居酒屋という感じで、大変趣深い。開店前から並んでいることも多いので、予約していくと無難。複数人で行く場合は 1 階のカウンター席ではなく、急勾配な階段で 2 階の畳席に通される。

お酒は瓶ビール・日本酒(銘柄は福生の銘酒「多満自慢」)・焼酎のみ

料理はおまかせが吉。常連さんに聞いた話だと、飲む量に限らず串のおまかせは 2500 (うな重付は 5000 円) とのこと。実際にぼくが行った際、3 人でおまかせ(うな重付)を頼み、それぞれ飲む量にかなりばらつきがあったが、一人 5000 円だった。メインのうな重はあっさり系。

おすすめ: くりから、うな重



・まっちゃん

国立駅から徒歩 1 分。1957 年創業、もつ焼き屋。道路計画のため 2016 年に移転し、リニューアルオープン。

連作的長編小説「居酒屋兆治」のモデルとなった居酒屋文蔵の八木さんが修行された店であり、作者である山口瞳など国立文化人も愛した店とのこと。

店内には「お酒をお召し上がりにならない方はご遠慮ください。またご婦人の方は土曜日にご来店下さい」の貼り紙。そう、ここには酒呑み以外入店禁止、平日は女人禁制のルールが存在する。それでも、この時代に人気店として生き残っているのだから、感心したものである。このルールを聞くと入店しにくく感じるかもしれないが、常連さんが気にかけて話しかけてくれ、居心地がよかった。店主の口数は少なかったが。

もつ煮込みと後は好みの串を頼むという形が一般的。お酒は日本酒と瓶ビールのみ。常連の方を見ていると長居する居酒屋ではないようなので、サクッと飲んで帰るのが暗黙の了解のようであった。

予約不可なので、開店時間に合わせていくことをおすすめする。



おすすめ:もつ煮込み、こぶくろ

・大衆酒場しんさく

☆旭通

2018年創業、国立に3軒居酒屋を経営する株式会社ぶちえらいの店舗の1つ。店名は山口県ゆかりの高杉晋作からとっており、ご想像通り山口料理・地酒をメインに提供する居酒屋である。

中でもおすすめの刺身は、その日の朝に山口県萩市で採れた天然鮮魚を東京の国立市に直送。鮮度と旨味が抜群である。入口は狭いが店内は十分広がっている。喫煙可のため、煙草の匂いが苦手な人には向かない。

店長・店員の年齢は若く、気さくに接客してくれるので、学生も多い。

おすすめ:刺身三点盛り、モツ煮込み、豚しそ



・とむ

国立駅から徒歩4分。レトロな居酒屋。

コロナ前に寮の飲み会で何度か利用したこともある。どの店員さんもととてもフレンドリーで、店の雰囲気はとても良い。なんといってもアルコールメニューが豊富なため、飲み放題コースがおすすめ。大学生の利用も多く入りやすい。店主の趣味か店内は昭和の音楽が流れている。

おすすめ:とむピザ、かぼちゃのカレー天

・おぼこ

国立駅から徒歩7分、寮から徒歩30秒。馬刺しと黒おでんが楽しめる居酒屋。寮からいちばん近い飲食店。しかし前を通るばかりで、いったことのない寮生も多いはず。

料理の種類が多く、どれもおいしいという印象。周りは常連さんばかりだが、店主も気さくに話しかけてくれた。

それなりに飲んで食べて3000円いかないくらいで、コスパの良さを感じた。

おすすめ:ピザ、たこと大葉にんにくのオリーブオイル和え



・居酒屋ぶちえらい

☆富士見通

国立駅から徒歩3分、2012年創業。株式会社ぶちえらいの1店舗目で、山口料理の居酒屋。

「ぶちえらい」とは山口弁で「すごく疲れた」という意味で、疲れた時に山口の名産で癒されてほしいという意図とのこと。階段を上がると店先には大きなタヌキがお出迎え、店内は山口に関係する物やポスターであふれている。酒樽をテーブルとしており、the居酒屋という印象。



おすすめ:かわらそば、とりのから揚げ

・@See You(あしーゆ)

国立駅から徒歩 3 分、2018 年創業。足湯につかりながらお酒を楽しめる梅酒専門バー。店内は和庭園をモチーフにしており、奥ゆかしい雰囲気。店名の由来は、女将にとってなじみのある国立に「またここで会いましょう」と笑顔になれる癒しの場所を提供したいという思いからとのこと。

お酒は梅酒専門というだけあって、焼酎ベース・日本酒ベース・ウイスキーベースなどの 75 種類以上の梅酒があり、女将が好みに合った梅酒を提供してくれる。梅酒が苦手な私も楽しむことができた。梅酒好きな人は一度は試してみていただきたい。余談だが、一緒に行った友人がアルバイトの募集について尋ねたところ、若い女性のみ募集しているとか。

以上、国立の個人的おすすめ居酒屋 7 軒を紹介させていただきました。いかがでしたでしょうか？コロナ禍で居酒屋に行けないことが多かったかもしれませんが、寮生も興味をもってくれたら卒業までにぜひ行ってください。せっかく国立に住んでいるのですから。OBの方々は、学生時代に入りづらかった居酒屋もあるかもしれません。今度国立にいらした際には、思い出と共に足を運んでいただけたら幸いです。私の将来の夢は居酒屋を開くことなので、思い出深い街であるこの国立に開店できたらと考えています。その際は、皆様のご来店をお待ちしております。

『シナモンロールにハチミツをかけて』読書感想

商学部2年 角颯真

この本は早稲田大学や明治大学で教鞭をとる、法学博士岡田昭夫氏の著作であるが、法律の話は一ミリも出てこない。本書は、彼の趣味であるスクーバダイビングを通じて、彼の親友となったミクロネシアのトラック島のキミオ・アイザックとの出会い、そして別れについて記したものである。

幸せは持っているお金によって決まるのか。「一億総中流」と言われた時代とは打って変わり、いまや貧富の格差が拡大した現代において大変頻繁に扱われる話題である。あまり収入の多くない家庭に育った私も折に触れて考えている論題であるが、この本を通じて改めてこの論題について考えた。まず本書を通じてこの論題を考える時、前提としてキミオが幸福であったかを検討しなければならない。彼自身に聞いてみないと結局の所わからないものではあるが、私は、彼は幸福だったのではないかと考える。自分の大好きなダイビングに関する仕事をし、成功を収め、また自分のために危険を犯して記念碑を手向けてくれる生涯の友人と出会えたからだ。確かに彼は事業に成功し「ダイビングの神さま」と言われるほどの名声を得て、お金持ちにもなったが、その要因だけではキミオの人生は実際のような幸福なものにはなりえなかったのではないかと。では何がキミオを幸福にしたのか。それは家族同然の「仲間」の存在であったと私は考える。キミオと著者はダイビングの講師と生徒として出会い、何十年の間互いへの尊敬、信頼、愛を持ち続けた。しかも、著者とキミオは何千キロも離れたところに住む関係である。会えず、連絡も取れない日が何ヶ月以上も続くことは普通であるのに、それにもかかわらずお互いのことを思い続けられるのは、類まれなる絆ということに他ならない。また、キミオが亡くなった後には、友人たちが異口同音に彼のことを思い集い、命懸けで記念碑を設置してくれた。こんな最良の友人と出会える人はどのくらいいるだろうか。あるいは、この人のためなら命を懸けられる、という人に出会えた人はどのくらいいるだろうか。私はといえば、まだ、ある人のためなら命は惜しくないと言える自信はない。キミオがこれほど慕われる存在であったのは、やはり彼の人柄によるところが大きいであろう。彼の寛大な心、愛情、ひたむきさには私も読んでいて大いに感激させられた。お金で手に入れられるものはかなり多いが、結局の所、お金で手に入れられないものの一つが「愛」なのである。彼はその愛を存分に与え、また受けていた人だった。「人間はボリスの動物である」というアリストテレスの言葉があるが、人間は「善く生きる」ために他者につながり、そのつながりの中で幸福を増大させるのである。その意味を、キミオの人生譚を通じて再確認することができた。やはり、自分の死を心から悲しんでくれる友人や家族がいるということが、「幸福」の必要条件だと考えた。「愛情」を「幸福」を測る一要素とし、同時に「幸福」の理由付けとして「愛情」を用いるという、少しトートロジーチックな論理になってしまったが、これは「幸福」を測る明確で客観的な基準が存在しないからであろう。少々乱暴ではあるが、自然と「幸せだ」と思えたらその人はその時点で幸福なのではないか。

また、キミオの戦友たちへの思いを知り、「アイデンティティ」というものについて考えた。感じたこととして、キミオのアイデンティティの1つに「子どもの頃に経験した戦争」というものがあつたのではないと思う。キミオは戦争の経験をずっと記憶に残し、その後の人生に影響を及ぼされたからだ。戦争の記憶がアイデンティティたりえるというのは、戦争を直に経験していない私にとって驚くべきものだった。現在の美しい風景ではなく、黒い鉄の塊が何隻も停泊していて、すぐそばに攻撃の気配がある状況で、そこで過ごした日々が輝かしい思い出になることなどあ

るのだろうか。減圧症に冒され、身体が不自由になっても慰霊碑設置を敢行させる思い出とは何なのだろうか。だが、本文を読んでいくうちに、彼が兵士たちと一緒に過ごした日々は、振り返って楽しげに語れる美しい思い出なのだろうと確信させられた。戦時下においても、彼の子ども時代の思い出は、平和な時代の私達のものとは何ら変わらないのだ。キミオのこのエピソードを読んでいるとどんな状況でも、心持ち次第で幸せを感じられうるのだなということを実感させられる。戦争にこのような側面があるとは想像もしていなかったが、彼は確かに素晴らしい思い出を作っていた。それも、キミオの明るい性格、人懐っこい性格が、兵士たちに彼を世話したいと思わせ、その間での絆を強めたからであろう。もちろん、出会いには偶然、運の要素もあるであろうが、その機会を価値のあるものにするのはその人自身の精神なのである。著者の言葉「品格が人生を変える」ということにも通ずるが、やはり、人格を高めるということは、どのような状況においても、豊かな人生を導くものだと思った。私も、彼を見習い、与えられる前に与えることができ、他者のことを思いやれるような人物になりたい。たとえば、「幸福」を与えるためには、自分自身が普段から幸福を感じることで、つまり、幸福を知覚する能力を高めることが必要だろう。そのためには、日常となっていることにも新鮮な目線をもって接することが重要だ。ストア派の教えに、「今あるものに感謝するためには、それらがなくなってしまった時のことを想像してみよ」というものがある。先述したように、私は命を懸けられるほどの友人はまだいないが、それでも、仲良くしてくれる友人はやはり当たり前なものではないだろう。彼らがいなければ、私の生活は確実に今より刺激のないものになってしまうだろう。そのことを考えると、彼らに感謝の気持ちを伝えたい。この本を読んでから、遊びが終わって別れる際に「さようなら」とともに「ありがとう」「楽しかったよ」と伝えることにしている。思っているだけでは伝わらないからだ。こうした「幸福」の共有によって、少しでも他の人を良い気分になければ、幸福を与えられる存在になれればとても幸いである。

そして、「人はいつか必ず死ぬ」ということを改めて感じさせられた。当たり前だが、人の名声や人望とその人が亡くなる年齢・状況はリンクしない。これほどみんなから慕われていた「ダイビングの神様」キミオも、死には抵抗することはできなかったのだ。ところで、私の祖母は今年で80歳になる。今でもとても元気で家業の飲食店で仕事をしている祖母であるが、いつ何が起ころかは誰にもわからない。だからこそ、日頃から伝えたいことは全て伝えたいと思う。まだ私は身近な人の別れを経験したことがないが、別れを受け容れるには、相手と後悔のない時間を過ごしたという確信が必要なのだろう。私は一人暮らしをしており、家族に毎日会うことはかなわないが、帰省期間中は多少他のことを蔑ろにしても家族と話したり、一緒にになにかしたりすることを大切にしたいと改めて感じた。そして、家族に会えるのは何にも増して幸せなので、この情勢下では厳しいことであるが、感染症が明けた後は土日に予定を入れないようにして帰省するということをしたい。毎週電話している等、いろいろ話せる機会はあるが、やはりオフラインで会うことには代えがたい。このように、本当に自分がすべきことは何かということ気付かされた。総じて、良い人生を生きるために大切なことを多く教わった貴重な読書体験であった。

最後に、本書と、今まで読んできた「人生」、「幸福」についての本を通じて、「自分の理想の死に方」について考えたことを記す。キミオがダイビングとトラック諸島、そして仲間に情熱を捧げたように、私は好きなものへの気持ちを存分に尊重した生き方をすることで、死ぬ前に後悔することがないようにしたい。ある本で、「自分が本当に好きなものを進んでやろうとしていない人がいる。その人は幸せになることを避けていることと同じではないか。」という事が書いてあり、自分の問題の芯を突かれた気分になった。この文章が実は自分に当てはまる部分があるからだ。生来、自分は興味を持ったら色んなものに手を出す傾向があり、本当に好きだとわかっているものに割く時間が減ってしまっている気がする。先述したように、まず、大好きなものとして自分の家族がある。家族の顔を見るだけでとても幸せになれるのだ。こんな存在は他にはない。ならば、幸せになるためには、より多くの時間を家族と

関わることに使えばよいということになる。しかも、「もの」とは違い、いつまで一緒にいられるかわからないため、せめて電話だけでも、また土日だけでも帰ることで死ぬ前に後悔しないようにしたい。これは自分が親となっても同じだ。おそらく、社会人になって働き始めると、自由時間はかなり少なくなるだろう。それで子どもができたなら、子どものことをないがしろにしてしまう可能性は否定できない。しかし、やはりそこでも自分にとってかけがえのないものを考えて、後悔のない時間の使い方をしたい。先述したように、大好きで、幸せになれるものに時間を使うことこそが自分の「幸福」を高め、死ぬ時の満足度を高める方法であるからだ。

参考文献

『シナモンロールにハチミツをかけて』(岡田昭夫)

『幸福のレッスン』(鴻上尚史)

『良き人生について』(ウィリアム・B・アーヴァイン)

台湾ポップスのなかの原住民族アーティスト

社会学部 1 年 樋口祐熙

こんにちは、はじめまして。本年度からこの寮にお世話になっている社会学部1年の樋口です。初めての会報で、何を書くか考えていましたが、ここは私自身の趣味でもあり、また歴史・社会・文化にも関わる話を一つしてみたいと思います。題して、「台湾ポップスのなかの原住民族アーティスト」です¹。

・台湾の原住民族とは その歴史と今

そもそも台湾は、いまでこそ中華民国が実効支配しており、中国語が主に話されていますが、歴史をずっと遡ると、漢人の移民がやってくる前から、オーストロネシア語族である「台湾原住民族²」が住んでいました。彼らは見た目も漢族と異なりますが、それぞれ独自の言語・文化をもって暮らしていました。ところが約400年前からオランダやスペインの支配が始まり、さらに鄭氏政権、清朝の時代になるにつれ、中国大陆の今の福建省あたりから漢族移民が次々にやってきて、台湾は漢族社会になりました。同時に、台湾原住民族は圧倒的少数者となり、漢人からは「生番」「熟番」という蔑称で呼ばれ、漢族社会の中で山地に追いやられたり同化させられたりしていきました。1895年から1945年の日本統治時代では「蕃人」と差別され警察による支配を受け、「近代化」のなかで狩猟・焼畑農業といった伝統生活や刺青などの風習も廃れていきました。さらに戦時下では、原住民族青年が「高砂義勇隊」として動員されるなど戦争にも巻き込まれていきました。戦後では、国民党政権のもと日本以上に強力な「同化政策」を受け、「山地同胞」と呼ばれながら、社会・経済的に弱者となり、都市への流出も増えました。都市に出ても差別を受け、教育水準の格差によって、不安定な仕事にしか就けず、男性は肉体労働者に、原住民族女性は「結婚売買」や売春の対象になりました。また、文化的には大変深刻な危機に直面しました。とくに、政府の中国語教育により、民族の言葉が若い世代に継承できなくなりました。

1980年代、台湾で「本土化」「民主化」が進むのに伴って、原住民族も権利運動・民族運動をはじめ、「名前を返せ」「土地を返せ」デモ、権利宣言の発表などを行いました。ついに1994年に中華民国憲法に主体的な存在として「原住民族」と明記され、1996年には行政院原住民族委員会が設立されるなど、行政上の権利の整備が進んでいきました。現在では、政府によって16の原住民族が公式に認められており、人口は約58万人(台湾人口の2%)となっています。現在は、伝統文化の復興や継承といった活動も盛んに行われるようになりました。なお、台湾原住民族は大多数がキリスト教徒です。これは戦後にキリスト教長老教会による布教が盛んに行われ、集団的な改宗が起こったためだと言われています。

・台湾ポップスにおける原住民族

¹ なお、この文章の一部は、所属するサークル会誌に寄せて書いた記事「台湾原住民族の歴史と現在」を圧縮・再構成したものです。

² 日本では、原住民という言葉は差別語だとされ「先住民」と呼ばれることが多いですが、むしろ台湾では、「先住民」はすでに消えてしまった人々を連想するため使われません。また「原住民族」という呼称は、1980年代の民族運動・権利運動の中で生まれた自称でもあります。1988年には、「原住民族権利宣言」が発表されました。

1980年代以降の台湾は、「民主化」「本土化」に伴い、閩南人³、客家、原住民族、といった各族群の権利・文化を尊重する多文化主義が採られるようになりました。それは、音楽においても見られます。現在、台湾でもっとも権威のある音楽アワードであり、台湾のグラミー賞とも言われる「金曲獎」は、それぞれ台湾語（閩南語が発展）・客家語・原住民語の歌の賞が設けられています。さて、本稿では台湾の多元的、多文化的、そして多言語的な台湾ポップス界における原住民族アーティストの動きを少し見ていきましょう。

台湾ポップス界での原住民族歌手の先駆けは、台湾を代表する歌手でもある張惠妹（A-Mei 民族名 Kulilay Amit 1972-）です。プユマ族出身の彼女は台北に仕事に出ていた頃、父親の意向でテレビの歌唱番組に出演したことがきっかけで見いだされ、1996年に歌手デビュー、アルバム「姉妹」は爆発的ヒットを呼びました。「姉妹」では原住民語の歌がバックに盛り込まれており「原住民の風格」が醸し出されています。彼女は原住民語の他に、台湾語の曲も出しました。デビューから25年で彼女はこれまで「金曲獎」（台湾最高峰の音楽アワード）にて累計28度ノミネートされ、6度受賞しました。また2009年からは自身の原住民族名 Amit（阿密特）名義でアルバムを出しています。彼女の原住民意識が伺えます。

張惠妹に続いたのが、1997年に「無情的情書」でデビューしたパイワン族の男性二人組ユニット、「動力火車」です。「原住民特有」の高音を魅力とした彼らはロックからバラードまで多岐にわたる歌を出しており、言語はほぼ中国語中心ですが、一部の歌には原住民族の「山地歌」が挟まれています。彼らも原住民族ポップスを牽引し、2005年には「金曲獎」を獲得しました。「誰もが心のなかに動力火車の歌を一曲持っている」と言われるほど、彼らは長きに渡りヒット曲を出してきました。

彼らの経歴は現代に生きる台湾原住民族の特質を数多く含んでいます。1960年代末に生まれた二人は幼少の頃に知り合いましたが、二人ともキリスト教徒で、キリスト教の学校に進みました。兵役を終えると都市部に出てPUB等で歌いながら、建築現場や下水道、高層ビルの清掃といった肉体労働に従事する日々を送り、金銭的には極貧でした。セブンイレブンのカップ麺を二人で分けて食べ、それでも腹が空くようなら寝ることで飢えを凌ぐ、といった生活をしていたそうです。彼らはのちのインタビューでこう答えています。「私たちが建てた建物は、私たちの手には届かない、買うことの出来ないものだった。」時にはその肌の黒さから東南アジアからの外国人労働者や、不法入国者と間違われ、通報されることもあったといいます。見いだされてメジャー歌手となるまでの生活は、当時の原住民族の若者の一般的な境遇であったと考えられます。歌手としての活動を始めるため台北に住居を見つけようとしたときには、大家に「原住民族は酒とタバコの癖が悪いから」という理由で入居を拒否されました。90年代の後半にも、差別が根強かったことが窺えます。彼らはある意味夢を掴むことができた、成功者といえるかもしれませんが、しかし一方では当時も今も、都市の最底辺層に位置付けられて苦しい生活をする原住民族が多くいます。動力火車の二人自身、「何十年前から今に至るまでずっと工事の仕事をする親戚がいる」と話しています。彼らにも原住民族意識はあり、近年では2016年に原住民族委員会の年度MVとして「太陽」を発表し、今年には少数民族の教育や都市で働く原住民族の子供達を支援する事業に携わる至善基金会と提携するなど、原住民族運動や彼らの地位向上において一定の役割を果たしています。

一方で、原住民族としての自らの出自を強く意識し、原住民族語による音楽や歌を制作するアーティストも多々います。このことは「金曲獎」に「原住民族語」による賞が設けられていることから伺えます。さらにここ最近では、

³ 閩南人は、福建省周辺に分布する、閩南語を話す人々で、17世紀ころから台湾にやってきた漢族移民の多くが閩南人でした。その影響で今日台湾語と言われる言葉は、閩南語が台湾で独自の歴史経路を経て発展した独自の言語ということになります。

原住民族委員会によって文化活動が支援されているため、音楽制作活動も盛んになりました。著名なアーティストには、MATZKA、ブヌン族の王宏恩 (Biung)、イリー・カオルー、桑布伊 Sangpuy などがいますが、ここで紹介したいのは 2017 年度と 2020 年度の金曲獎を獲得した ABAO (阿爆) です。

パイワン族出身の ABAO は、21 世紀はじめにデビューした女性歌手です。2003 年には第 15 回金曲獎の年度グループ賞を獲得していましたが、所属会社が倒産したことで一度引退していました。2012 年には原住民族テレビの司会者になるなどの活動をしていましたが、祖母や母親の、自分の言語文化を保存伝承したいという思いに触発されたことで、2014 年ころからパイワン語による歌を作るようになりました。2016 年にはアルバム「Vavayan・女人」で原住民族語アルバム賞を受賞し、2020 年度では「kinakaian 母親的舌頭」で年間アルバム賞、原住民族語アルバム賞、年度楽曲賞の 3 冠を受賞しました。彼女は音楽制作の傍ら、自身の YouTube チャンネルでパイワン語講座を開いたり、近年では若手の原住民族アーティストを集めてコンピアルバム「N1」を制作したりするなど、民族の言語文化の保存と原住民族の連携を強く意識した活動を行っています。彼女のインタビューでは「なぜ言語が失われていくのか？それは現代社会で使う機会がないからだ。今私が國語(中国語)を話しているように」という発言が残されており、現代の原住民族の言語事情はここにも現れてきています。しかし彼女は民族の言語で音楽を創ります。「なぜパイワン語の歌を作るのか？それは私がパイワン語をうまくは話せないからだ」「今は本当に使う機会が少ない。親も子供と民族語で話すことを諦め、むしろ幼稚園に行って英語を学ばせたいと思っているだろう。それが現実である。良いも悪いもない。ならば、私はその言語を音楽にしよう」「原住民文化は私にとって最高のものをもたらしてくれた。それは私が誰なのかというものを知らせ、安心感をもたらしてくれるのである」。ABAO はこれからも民族の言語で音楽を創りつづけるでしょう。

彼女は金曲獎受賞に際し、「このアルバムを通じて、みなさんに原住民だけでなく、マイノリティについて理解しようとしてもらえれば。理解を深めることで誤解を減らしてほしい」という言葉を残しています。彼女の歌はパイワン語で、多くの人には聴いただけでは歌詞の意味はわからないでしょう。しかしそれでも良いのです。

原住民族の歌手について最後に一人紹介したいと思います。ABAO が統括するコンピアルバム「N1」の参加者のなかに、「夏子 Natsuko」というアミ族のアーティストがいます。いかにも日本人の名前に見えますが、実は本名、それも原住民族名でした。なぜ彼女の名前が Natsuko という日本語なのか、答えを探ると、歴史的背景が見え隠れすることがわかります。

Natsuko はこの問題についてインタビューで触れていました。それによると、彼女は祖母と遊ぶことが多かったのですが、祖母は日本時代の影響で日本語を話す世代で、日本文化にも親しんでいたそうです。夏子というのは、その祖母によって名付けられたものでした。祖母には「なっちゃん」と呼ばれていましたが、それがあだ名ではなく本名であることは、彼女が「原住民族名を選ぼうとしたとき」に、「それこそが本名よ」と教えられたことで初めて知ったといいます。そしてそれが日本由来の言葉であることは、彼女のアイデンティティの問題を起きました。「本当の伝統的な名前ではない」というものです。しかし、現在のアミ語には、すでに日本時代やキリスト教の影響などにより、外国由来の言葉が根付いています。アミ族はいまや 7 時のことを「しちじ」といい、「スリッパ」が借用された「solipa」という単語もあります。Natsuko の父親の名前「Pitoro」はキリスト教のペトロが由来です。「それがキリスト教の聖なる名前、日本の名前、またはバナイのような伝統的な民族の名前であるかどうかにかかわらず、彼らはすべて現代の原住民です」と彼女は割り切ります。多くの都市に生きる原住民族の若者は、まるで自身がよそ者であるように感じ、アイデンティティに悩むことが有るといいます。しかし、彼らが「原住民であることは、変えようのない事

実」です。

Natsuko の音楽を聴いてみると、驚くほど多言語に満ちていることがわかります。中国語の歌もありますが、彼女の祖母を記念して作られた「MALIYANG」⁴や、先述のアルバム「N1」に収録された「fu'is 星星歌」は、日本語とアミ語の歌詞によってできています。また「這該死的拘執俗愛」や「萬千花蕊慈母悲哀」は台湾語の歌です。それぞれの歌は YouTube で公開されるとどれもミリオン再生を達成し、「萬千花蕊慈母悲哀」に至っては500万回以上再生され話題になりました。コメントをみると、「言葉はわからないが、感動した」という言葉が頻繁に見られます。今の台湾の人は基本的に國語で生活していますが、しかし日本語も、アミ語も、台湾語も、台湾という島で、過去の歴史において、また現代において、土着の人々が使ってきた言葉なのです。台湾の歴史的背景と多言語性、そして歴史に動かされて来た自身のルーツに向き合う若きアーティストがここにいます。

2021年8月21日、第32回金曲獎の授賞式が行われました。式典のオープニングパフォーマンスでは、前年度の受賞者である ABAO が、「N1」メンバーを引き連れて自身の原住民族語歌曲を披露しました。ABAO がトロフィー授与役をしたときには、原住民アスリートで2021年東京オリンピックメダリストの楊勇偉、郭婞淳が同席しました。年度アルバム賞には、プユマ族の歌手、桑布伊 Sangpuy が受賞。「皆がお互いに祝福し、お互いに寄り添い、台湾のそれぞれの族群が相互に支持しあい、励まし称え合い、台湾がもっと美しく、もっと良くなることを願います。」と述べました。原住民族の存在が、意図的かと思うほどに強く印象付けられた金曲獎でした。

・おわりに

以上で、現代の台湾原住民族音楽アーティストについて、それぞれのもつ背景や人生も交えながら紹介してみました。私が台湾ポップスの世界に入ったのはほんの1年前のことでしたが、原因は明らかに私が台湾にルーツを持つことでした。しかし台湾の世界は、驚くほど多元的で、重層的な様相を呈しており、極めて興味深い世界でした。台湾は、おそらく日本人のイメージ以上に多言語で多元的な社会です。それは、台湾が歩んできた極めて複雑な歴史—オーストロネシア語族の島に、まずはオランダが、それとともに漢族の移民が、次に日本人が、そして国民党政権が支配者としてやってきた歴史—が背景にあります。台湾の多民族性・多言語性は、我々が簡単にアクセスできる YouTube などで見られる台湾ポップスにも現れています。皆様も、台湾ポップス、台湾原住民ポップスを聴いてみてはいかがでしょうか。興味を持ってくださるのであれば、それはこの上ない喜びでございます。

⁴ MALIYANG の表紙には、台湾をこれまで支配して来たオランダ、清朝、日本、中華民国と、原住民族に広く浸透したキリスト教とをそれぞれ象徴した花を飾った少女が描かれています。

They Shall Not Grow Old

商学部 4 年 今川明人

今回が最後の会報となった。いつも、自分語りをしていたが、今回は会報担当から自分の研究課題や何か本を一冊読んでそれについて書くようにと言われた。最初、私が現在執筆中の卒論「アニメの聖地巡礼がどの程度地域経済に貢献するか」について述べようと思った。ただ、あまりにも世俗的でしかも、キモオタになりそうだったのでやめておいた。そして、本については父から大学 2 年次の時に借りたヴィクトール・フランクル著「夜と霧」を読んだ。読んだ理由としては二点あり、①なんとなく昔から知っていてアウシュビッツについて興味があった②父から借りていて申し訳ないという思いからである。この本は第二次世界大戦中、ドイツ強制収容所に収容されていた著者が心理学という観点から自身の体験を分析するというものであった。本自体は非常に面白かったが、このホロコーストという壮大なテーマを書くことを自分の力量不足だと感じた。そこで、私は映像作品なら本の代用として効きかつ、感想自体も書きやすく勧められた時のハードルが本よりも低いのではないかと考え映像作品を見ていた。このような紆余曲折を経て選ばれた作品は「They Shall Not Grow Old」。この映像作品は、第一次世界大戦中の若いイギリス軍兵士のドイツ軍との塹壕戦が描かれている。そして、その中での青年らの戦争に参加する前・最中・後でそれぞれどのようなことを思っていたのかについて重きを置いているように感じた。映像作品には映像の組み合わせ方や音響・演出など評価する点は多々あるが、今回は私が内容的に重きを置いているのではと感じた青年らの心理的变化に着目して述べていきたい。

①戦争に参加する前の青年ら

第一次世界大戦が始まる予兆があったイギリスでは、愛国心を煽った兵士募集の広告をかけた。その募集に応じた殆どが 18 にも満たない青年であった。下は 14 歳もいた。しかし、兵士になれる条件は満 18 歳以上であった。青年らはなぜ募集条件にも満たないにもかかわらず応募したのか。それは戦争に参加しないことは臆病者の烙印を押されることと同義であったからである。当時、若者の間では兵士に応募するのは当然という潮流があり、参加しない若者は白い羽(＝臆病者の意味)を街中で渡されるほどであった。また、戦争を一つのイベントとして捉えていた傾向にもあったのではと考える。当時のイギリスの若者の殆どが労働者として単純労働を課せられていた。血気盛んな若者は仕事では発散しきれない有り余るエネルギーをどこかに吐き出す必要があった。戦争はこの有り余るエネルギーを活かすために格好であり、戦争の勝ち負けなどは気にせずに兎に角戦いたかったのであろう。このような経緯で参加しているので、若者らは戦争を楽観視していた。つまり、戦争は人が死ぬものであるということを分かっているにしても、非現実であり想像できなかった。戦争に参加する前の青年らは、戦争を自分らの鬱憤を晴らす場所として定義し参加することに対して一種の高揚感があったのではと考える。

②戦争最中の青年ら

戦争最中と一括りにしているが心情の波としては大きく 4 つに分けられる。第一に戦線に行く前。第二に戦線到着時。第三に機関銃への突撃。そして、最後にドイツ軍の捕虜との交流である。それぞれ見ていきたい。

戦線に行く前の彼らはいよいよ戦うことが出来ると胸躍っていた。戦線に行く前に戦争が終わってしまうのではないかと心配になっていたほどである。しかし、いざ戦線に近づくと戦争の恐ろしさを垣間見ることとなる。怪我をし

て口を利くことのできない兵士・荒涼たる街並み・そこら中に建てられている墓。これらを見て始めて死を意識し始めたのである。この段階で初めて恐怖を覚えたのである。しかし、戦争に対してのモチベーション、戦いたいという意思はなおも変わらず持ち続けていた。

そして、戦線で青年らは、死を実感していたのと同時に、その非日常を楽しんでいた。戦線での日常は市民生活としての日常とは大きく異なっていた。戦闘時は隣の兵士が狙撃にあうことや砲弾が塹壕に飛んできていた。このようなことが日常茶飯事であったので、死体を処理する余裕もなかった。その為、腐乱臭が戦地あたりに広がり、死を身近なものとして捉えることになった。また、戦争の本物の顔は文明社会とはかけ離れており、青年らが人を殺す手段はナイフや銃剣で片手銃ばかりで、まさにケモノの世界であった。この世界は青年らにとっては意外なものであったが、まさにこの非日常を求めているのである。彼らは戦いを求めているのである。彼らは戦線で死を日常のものとして捉えた結果、死に対しての恐怖が麻痺していた。それよりも彼らはこの非日常性を「ピクニックのようなもの」と表現し楽しんでいた。戦線には彼らが戦争に求めているものが詰まっていたのである。

青年らの戦線に対しての心理的变化の転換点は、機関銃への突撃である。それまで膠着状態であった戦場に文明の利器が登場する。戦車である。戦車で塹壕を超えていこうという戦略であった。塹壕にいた青年らの使命は戦車の障壁となる機関銃部隊を殲滅することであった。この作戦は青年らに緊張を走らせた。相手の機関銃に向かって正面から走るとするのは自殺行為である。たとえ奇襲が成功したとしても、大量の兵士が死ぬことはわかりきっていた。死に慣れきっていたとはいえ、次は自分である確率が桁違いである。しかし、作戦が始まると緊張はなくなり、野生の本能で敵に立ち向かう。この時、仲間が死ぬ中ただひたすらに走る。映像の演出などには触れない予定だったが、この時の映像の演出は非常に臨場感があり、是非一度見て頂きたいと思う。そして、敵の塹壕に到着すると白兵戦である。この時の青年らは、仲間の仇をとるために狂氣的に人を殺していく。その中で奇妙な興奮を覚える。虐殺本能である。そして、虐殺本能が落ち着き、戦闘が終わると妙な誇りと満足感が心を満たす。600人が機関銃に突撃しに行き、そのうち生き残ったのは負傷者含め 100 人である。先に述べた誇りと満足感を得られたのは全体の 6 分の 1。では残りの 500 人は戦場に來たことに何を思ったのだろうか。死ぬ間際は戦場に來たことを後悔したのだろうか。彼らに目的や本当にやり残したことがあるなら、後悔するであろう。一方、彼らは戦うことを目的としてきたので、戦場に來たことを後悔するだろうか？死んだ人の気持ちを押し量ることはできない。(余談になるがこの部分は進撃の巨人のエルビン団長 vs 獣の巨人を思い出す。一縷の望みをかけた出撃シーンは何度見ても心に残るものがある。)

そして、面白いのがドイツ捕虜との交流である。戦場では憎み合い殺し合っていたドイツ人に対して復讐心は全くなかったのである。同情心が勝っていたのである。この心境の変化は、戦いに対しての疲弊が影響しているのではないかと考える。ただ、ひたすらに戦うことだけを求めて戦場に赴いた若者は戦争の現実と戦いの無意味さを思いしる。そして、互いに戦いに興味を持たなくなった結果、敵国であるドイツ人と文化的な交流ができたのだと私は考える。

戦線での若者らは兎に角死を身近に感じ麻痺していた。そして、戦うという野生の本能に従って敵を虐殺していった。しかし、いざ我を取り戻すと、ドイツ人との文化的な交流を行う。戦場で戦いを通して戦いの無意味さを思い知ったのである。

① 争から戻ってきた青年ら

終戦後、帰還兵への風当たりは強く、大量の失業者を出した。戦争に参加していない市民らは、戦争のこと

など何も知らずに生きてきた。戦争に参加した者と市民らには大きな隔たりがあるのである。それ故に、互いに分かり合えない。それ故に、彼らの間で話も生まれず、市民の間で戦争の話が広がっていかない。戦争に参加した青年だけが戦争の恐ろしさを感じ、いかなる理由でも正当化することを否定する。

戦争に参加した青年らの心境は、最初で最後とでは大きく変わっている。これは、戦争がどのようなものかを知っているか否かによる。戦争がどのようなものか知っていたら、エネルギーのある若者らは全力で否定するであろう。一方で、この塹壕戦に参加していた人達に、もう一度この戦争に参加しますかと聞くと全員が参加したいというのである。この答えは戦争を無意味なものであるといったことに矛盾する。いったい、なぜなのだろうか？恐らく、この戦争は彼らにとっての青春であり、戦争に参加している日常が何物にも代えがたい思い出であったのだろう。これは生き残ってかつ戦勝国だからこそ言えるのだろうか？日本人でそのように答えた人は見たことがない。戦勝国の軍人だけが味わえる誇りや満足感がそこにはあったのだろう。ただ、この満足感は無意味な戦争と死によって成り立っている。この事実を忘れてはいけないし、戦争で無意味に人を殺めるのにはもちろん反対だ。

教育の個別「最適」化

社会学部 2 年 岩切龍聖

私は現在教育に興味を持っているので、教育の個別「最適」化という問題について書きたいと思います。

昨今、教育現場において急速に教育・学習の「デジタル化」が進み、コロナ禍においてその傾向は顕著になりました。「GIGA スクール構想」は技術発展やグローバル化、さらに「Society5.0 の時代」の到来など、急激に変動する現代社会において、社会関係資本を活用しながら自立的に行動し、直面する様々な課題を解決できる人材が求められているということを背景にコロナ禍から議論されてきました。しかし、臨時休校を余儀なくされた教育現場において学びの保証という「至上命題」を達成する、と目的を転換させることによって半ば強制的に構想の実現が推し進められたと私は認識しています。また、経済産業省と文部科学省はそれぞれ「ICT の活用による個別『最適』な教育」についての政策を打ち出しており、両者はその目指すところが異なるように感じています。そこでこの 2 政策について検討し、教育の「デジタル化」、そしてそれによる個別「最適」な教育という政策の是非について考察したいと思います。

まず、子供の多様性への認識が進んでいく中でそれぞれに応じた学びの内容や学習形態をカスタマイズすることが社会の更なる「発展」を可能にするという考えにおいて、「個別最適」は善とされます。しかしながら、「最適」という語は多分に価値を含むため、経済成長において「最適」なのか、児童生徒の発達において「最適」なのかということはこの検討においては問題です。ここではそのことを踏まえ、「最適」の中にある価値を明らかにして議論しようと思います。

経済産業省は「未来の教室」ビジョンを打ち出し、①「学びの STEAM 化」、②「学びの自立化・個別最適化」、③「新しい学習基盤づくり」を教育改革の 3 つの柱としました。①の「STEAM 化」とは、「学際研究の低年齢化」であり、つまり、中高生のうちから実際の社会問題について分野横断的にアプローチすることで解決策を見出す経験をすることです。②については、EdTech によって教科知識の学習を効率的に行い、個別学習計画と学習ログをもとに個別最適な学習内容を構築して、多様な学び方の選択肢を実現するものです。私はこの経済産業省が提唱する「未来の教室」における学びの「個別最適化」には異議を唱えたいと思います。現代のグローバル社会において求められる資質は産業面からも考えられるべきではありますが、それ以上に社会や文化といったあらゆる面における優れた人材の育成を教育は担っていると考えます。しかし、EdTech の導入をはじめとした経済産業省の「個別最適化」された学びの本質的な目標は経済成長にあり、ほとんど産業・経済面にのみ焦点化しているとおもいます。また、経済産業省が想定している「個」は経済成長のために優れ才能を持つ子どもであり、「だれ一人取り残すことのない」という文部科学省とは相反する目標がそこにはあります。そのため、「未来の教室」ビジョンは「進む子は進む」という、教育界が長年議論してきた「詰め込み」型の教育を無批判に導入しようとする試みであり、容易に認められるものではないと考えます。また、EdTech を活用して教科知識の学習を効率化することは産業界においても求められていないのではないかと考えます。確かに現代の技術発展によるビッグデータへのアクセスを考慮すれば、「探求プロジェクト型学習」に重点を置くことは当然のことです。しかし、それは知識の習得プロセスを軽視する理由にはならないと考えます。要するに、経済産業省の提言に欠落している視点は、学校の

社会文化的な教育という視点、深い学びという視点であると私は考えます。

続いて文部科学省の提唱する「GIGA スクール構想」について検討したいと思います。先述の通り、「GIGA スクール構想」はコロナ禍において顕在化したデジタル格差の問題に対応し、教育現場において通信環境を整備するとともに「一人一台」デジタル端末を配布するという形で急速に進められましたが、文部科学省が打ち出したこの「構想」が本来目指していたところは「一人一台」のデジタル端末によって「だれ一人取り残すことのない」個別「最適な」学びの実現にあります。具体的には、学習障害やディスレクシアなどの生徒を、彼らがその特殊性を押しとどめるという形ではなく、学校が彼らの特性や要求に応えるという形で「普通」の学校に通わせ続けられることを保証するものです。ブラック校則を代表として様々な旧態依然としたシステムの残っている学校現場が、学習障害やディスレクシアといった、近年明らかになり、社会においては寛容に受け入れられつつある生徒の多様性を排除し、「普通」の学校を作ろうとするのを防ぐという意味で「だれ一人取り残さない」政策だと解釈できます。いやむしろ、そうした多様性を適切にとらえて伸ばすという意味で「すべての生徒の可能性を引き出す」という子供の発達を重視した個別「最適」化であると評価できると私は考えます。

ただし、現代社会において若者が学習に意欲的に取り組み、個性を伸ばそうとする心を失っていることには注意しなければなりません。スマホをはじめとしたインターネットへのアクセスが常態化したことによって世界が拡大し、グローバル社会を俯瞰できるようになったことによって世界の不確実性が認識されるようになったことと社会的成功が先天的能力や運などによってなされているように映ってしまうことにより、若者は努力して勉強することによりできるようになる能力、つまり獲得的属性を軽視するようになっていくと考えます。就職氷河期において我が子に個性を身につけさせたいと思う保護者はさまざまな習い事をさせようと思いますが、それは両親との温かみのあるかかわりの中ではなく、アウトソーシングによって個性を伸ばそうというものであるため、学びや努力は受動的になるし、そうして獲得した属性に子供たちは誇りを持つこともないため、一層獲得的属性は軽視されるでしょう。

こういったことを踏まえて学校教育の中で生徒の個性を最大限に引き出すという目標を達成するには、結果ではなく、努力やプロセスを評価するような土壌を作ること、生徒の価値における「最適」の判断を尊重することが必要であると考えます。後天的能力がどれだけ軽視されたとしても先天的能力を最大限生かす方法の習得は重要視されるはずであるため、学習に対する動機付けを生徒に保証する必要があります。また、対人関係スキルなど保護者や社会から身につけなければならないといわれている能力ではなく、子供の興味関心から出る能力の伸長を優先することは学習に対する動機付けになると思います。

こうした意味で、経済産業省と文部科学省が打ち出している2政策はこうしたプロセス重視の教育を前提とされなければ、そして生徒の「やりたいこと」を重視する教育を前提として考え直されるべきなのではないかと考えます。

ヨーゼフ・ボイスと宇沢弘文の視点から紐解くサステイナブルな社会

経済学部 2 年 岩崎友哉

GLP(グローバルリーダーズプログラム)という経済学部のプログラムに今年度から参加しているのですが、そのプログラムの一環で初めての論文をこの夏書き上げました。本来は 20000 字近いのですがそれを 5000 字に圧縮しましたので皆様にご覧いただければと思います。ですが 3600 字以内に仕上げるようにと会報担当からの指示があり(その後 3600 字を超えてもいいとなったのですが、私の時間の都合上)、残念ながら全体を掲載することはできませんでしたので、重要な部分を抜粋して掲載いたします。論文全体を読んでいただける方がいましたらぜひご連絡ください。また、ご感想やフィードバックがございましたら私までお送りいただけますと幸いです。

連絡先:ayuyikasawi@gmail.com

『ヨーゼフ・ボイスと宇沢弘文の視点から紐解くサステイナブルな社会』

要約

気候変動や人種差別、経済格差など、現在の世界に山積する課題を解決し、持続可能で安心安全な社会を創るためには、既存の経済社会システムを根本的に変革する必要がある。新たな世界像の構想にあたり、ドイツの芸術家ヨーゼフ・ボイスと日本の経済学者宇沢弘文の視点の導入を試みる。同時代に各分野で功績を残した彼らの共通点に注目されたことはかつてなかったが、本稿ではいくつかの共通点を炙り出し、ボイスが提唱した、社会全体を一つの芸術作品と捉える「社会彫刻」と、宇沢が提唱した、生活に不可欠なものを総称した「社会的共通資本」の二つの概念を組み合わせる。両者の思想を紐解き、それらを擦り合わせる作業を通して、持続可能な社会実現のためには、各人が「芸術家」となり、自身の「創造力」を発揮し、社会的共通資本を社会的に管理する社会を作り上げるとともに、社会という一つの彫刻作品を常に作り替えていかなければならないという結論を導き出す。

第一章 はじめに

2021 年は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、様々な分野で多くの問題が表面化し、私たちは生活や仕事、コミュニケーションのあり方などの根本的なことについて考え直す必要に迫られた。また人種差別撤廃を訴える BLM 運動等の草の根的な市民運動が世界中で活発化している。私たちは、突如訪れたコロナ禍と、それと並行して起こっている世界的な市民運動、そして昨今勢いを増している SDGs 実現に向けた政府や企業の動きの中で、山積する問題の根本的解決のためには、対症療法的に対処するのではなく、支配的な体制や価値観の根本的な変革の必要性を感じているのではないだろうか。

本稿では社会経済システムを変革する必要があるとの視点に立ち、地球環境の持続可能性と人間生活の持続可能性という二つの持続可能性を実現しうる社会のあり方を模索する。それにあたり、ドイツの芸術家ヨーゼフ・ボイスと日本の経済学者宇沢弘文が各々提唱した、「社会彫刻」と「社会的共通資本」の概念を導入する。両者は異なる分野で活躍したものの、共通点に注目されたことはなかった。ボイスと宇沢の問題意識・活動・未来像を紐解くとともに、それらを一本の糸として擦り合わせる作業を通して、既存の経済社会システムに代わる、持続可能で安心安全な社会像を提示する。

(中略)

第四章 共通点

本章では個別に検討してきたボイスと宇沢の共通点を列挙する。

第一に活動時期である。ボイスが脂肪やフェルトを使用した作品を作り始めたのは 1960 年であり、84 年に亡くなるまで活動を続けた。宇沢がスタンフォード大学に着任したのは 1956 年。74 年に『自動車の社会的費用』を出版した。両者ともに 60 年代から 80 年代に活躍した。

第二に、資本主義と社会主義に代わる第三の道の必要性を訴えていた点である。ボイスは両体制がともに自然環境を略奪する点と、貨幣と権力で人間を抑圧する点を批判しており、第三のレヴェルが必要であると訴えている。宇沢は両体制の内在的矛盾を指摘し、それらに代わる制度主義の導入を説いている。

第三に、新体制を築くにあたり草の根的行動を重視している点である。ボイスは社会変革のために我々ができることについて、「そういうことについて話し、考え、感じ、欲することだ。動かすしかないわけだ。」と語る。ボイスはすべての人に創造力が備わっており、人々はそれを発揮して社会という彫刻作品を作り上げなければならないと主張していた。宇沢は、先に見た通り、社会的共通資本は社会的に管理しなければならないと語る。「社会的に」とは、社会的共通資本を職業的専門家が人々から信託を受けて、利潤的動機から独立して当該資本を管理することである。

第四に、人々の意識改革や概念の再定義といった、精神面の変化を求めた点である。ボイスは「まずその人各自の考え方から始めねばなりません。(中略)人々に指令を出す最高本部のようなものに頼るのはあまり役に立たない。」として、各々の思考の改革から始めなければならないと言う。草の根的活動をボイスは求めていたが、その方法論として、唯物論とは逆に、意識や概念を組み替えることで、合法的、非暴力的に社会体制の変革を目指したのである。宇沢は、「社会的共通資本」という概念を導入することで人々の認識を変化させることに成功した。人間性を失わずに豊かな社会を実現するために必要ではあるが、従来は見落とされていた要素に対し、社会的共通資本と名付けることで、人々がその存在を認識することを可能にしたのである。

以上のように、一見何の共通点もないように感じられるボイスと宇沢は、その思想の根幹的な部分で多くが共通している。

第五章 サステイナブルな社会

本章では、両者の主張を整合的に解釈し、人々が安心して安全に暮らすことのできる持続可能な社会について考える。

創造力の解放を要求してきたボイスは、目指すべき世界像を提出していないことへの批判に対し、第三のレヴェルには皆が自由になり、考え、自己決定することで、誰もが到達できるのであり、それは唯一の真理であるから、各個人のよって異なるものではないと主張する。

では第三のレヴェルは一体どのようなものなのか。ボイスは、「(社会彫刻という)理念は、21 世紀という環境が重視される時代において、ようやく実を結ぶだろう」と言う。翻って 21 世紀の世界について考えると、自然環境破壊、貨幣至上主義の蔓延、国家間・国内での経済格差拡大、人種差別、人間性の破壊など、ボイス自身が創造力を用いて解決を試みてきた問題が著しくなっている。こうした地球環境の持続可能性や人間生活の持続可能性を脅かすような問題が解決された社会を彼は第三のレヴェルと考えていたと言える。

ここで第三のレベルを理論的に説明したのが、宇沢が提唱した、社会的共通資本の概念であると言えるだろう。各人が自身の創造力を発揮し得る場で発揮しなければならないというボイスの言葉は、社会的共通資本は職業的専門家が信託を受けて利潤的動機に基づくことなしに管理されなければならないという宇沢の言葉と重なる。

地球環境と人間生活の持続可能性を実現しうるのは、ボイスが社会彫刻と言い、宇沢が制度主義・社会的共通資本と言った社会である。理想状態を演繹的に導くのではなく、地域や時代に応じた変化を求める点で、既存システムとは根本的に異なるこの理想社会は、私たち自身が自ら考え、自ら決定し、自ら行動することを要求する。現状に安住する方が楽かもしれないが、今行動を起こさなければ、自然環境の破壊は進み、人々は利己的になり、人間性は退廃し、人間を含めたこの地球ごと失われてしまう。地球環境を守るためだけでなく、私たちが豊かな生活を営むためにも、まずは理想の社会について考え、現状の問題点をあぶり出し、周囲の人と議論し、社会彫刻の骨組みとなる社会的共通資本の具体的要素について合意を形成し、それを各人が芸術家として創造力を発揮して社会的に管理する制度を構築するところから始めなければならない。

新型コロナウイルスの感染拡大により、幸か不幸か、現在の社会の問題点や矛盾が一気に噴出した今、私たちは時代の分岐点に立っている。自然と人間がサステナブルな社会を築くのか、それともこの地球ごと破滅に追い込むのか。ボイスの挑発に私たちは今どう反応するか。宇沢はそのヒントを私たちに与えてくれている。

言語と政治体制の関係 ～『1984 年』を手掛かりに～

社会学部 4 年 松原悠紀

後期ゼミの主ゼミとして田中拓道ゼミ(比較政治学)、副ゼミとして井頭昌彦ゼミ(分析哲学)に所属している。会報に載せるにあたり、ロトクラシー(抽選制民主主義)や政治におけるフェミニズム(クォータ制)といったテーマも検討したが、今回は両ゼミの領域に関わるという意味で「政治と言語」というテーマにした(分析哲学ゼミでは言語哲学や言語学を主要領域として扱う)。

私自身来年からマスコミ業界で働くということで関心が高いテーマであったため、5000 字近い分量になってしまったことをご了承いただきたい。

0. はじめに

本稿の目的は、政治と言語の関係について考察することである。まずは、「ニュースピーク」という新しい発想で言語と政治体制の関係を考察した、ジョージ・オーウェルの『1984 年』を紹介する。次に、この発想を裏付ける、構造言語学について理論的に述べる。そして、現代における言語と政治体制の关系到結び付けられる事象を、『1984 年』を基に解釈する。ここでは「自粛の要請」言説を取り上げ、『1984 年』に見られる「言語によって思考を規定・誘導する」というテーゼの確認をする。また、政治体制によって言語使用が制限されることも指摘する。

1. ジョージ・オーウェル『1984 年』

1.1. 概要

当該小説は、トマス・モア『ユートピア』、スウィフト『ガリヴァー旅行記』、ザミヤーチン『われら』、などのディストピア小説の系譜を引く作品で、英国で 1949 年に刊行され、日本では 1972 年に翻訳版が刊行された。冷戦下において、反全体主義、反共産主義、反権威主義等の立場に支持され、英米を中心に幅広く読まれた。言語・思想・文学・音楽等幅広い分野に多大な影響を与えた。

舞台は 1984 年のオセアニア。世界は 1950 年代に発生した核戦争を経てオセアニア、ユーラシア、イースタシアの 3 つの超大国によって分割統治されている。ここでは、思想・言語・セックスに至るまで日常生活のあらゆる場面に政府からの統制が加えられており、市民は「テレスクリーン」という双方向テレビジョン、街中に仕掛けられたマイクによってほとんどすべての行動が監視されていた。

オセアニアではビッグ・ブラザー率いる“党”が唯一無二の政党であり、国民は政党及びビッグ・ブラザーを敬愛することが義務であった。また、監視社会を印象付けるように、「ビッグ・ブラザーはあなたを見守っている(BIG BROTHER IS WATCHING YOU)」という言葉とともに彼の写真(実在する人物かどうかは分からない)が街中に貼られている。

この非人間的な管理社会に反発した真理省の役人ウィンストンは思想警察の監視をかいぐって日記をつけ、体制への疑問を大きくしていくが、このことが思いもよらぬ人物から当局に漏れてしまい、ウィンストンは逮捕される。そして拷問の末に「愛情省」の 101 号室で自分の信念を徹底的に打ちのめされ、党の思想を受け入れ、処刑(銃殺)される日を想いながら“心から”党を愛すようになる。以上があらすじだ。

1.2. 「ニュースピーク」

政府は人々が政治体制について反抗的なことを考えられないよう、「ニュースピーク」という英語を簡略化した新語法を開発した。これは、体制に反することを思考する道具としての語彙を国民から奪うことが目的である。したがって、この言語が元の英語(オールドスピーク)を完全に駆逐したとき、誰も政府に反することが考えられなくなるという。また、政府・体制に対する反抗的思考、政府体制にとって都合の悪い疑問をもった時点で思想警察の取締りの対象となり、拷問などを経て思想の矯正を施される。

「ニュースピーク」に関する詳細な説明は、本編のあとに付録としてついている。日常生活に必要な名詞や動詞が含まれる A 群、政治に使用される、イデオロギーを意味に含む用語を含む B 群、A、B 群ではカバーできない語彙を補うための C 群に分類されている。A 群は例えば、木、砂糖、走るなどだが通常の意味からはその曖昧さや意味のニュアンスがそぎ落とされており、もっと語彙の少ないものになっている。意味のニュアンスがそぎ落とされているとはどういうことか。例えば「自由 free」という語は「～からの自由」という意味でしか使用を許されず、古い意味での“政治的な自由”や“知的自由”といった意味は禁止された。B 群は、基本的には A 群と同じように意味のはく奪・語彙の縮小が行われたが、党員が抱く感情・思考においてはしばしばオールドスピークよりも適切な語を提供した。党が新たな語をここに関しては生み出し、普及させたのだ。

以上が『1984 年』の概要と「ニュースピーク」の説明だ。全体主義批判、管理社会批判などの論点も『1984 年』は提起しているが、ここでは言語と政治の関係に関わる要素として、「ニュースピーク」をまず取り上げることとする。この「ニュースピーク」による思想統制がどのような理解に基づくのかを次章で述べる。

2. 構造言語学の知見からの「ニュースピーク」理解

20 世紀において諸学に多大な影響を与えたのは、ソシュールを代表とする構造言語学である。科学認識論やジェンダー学などが、構造言語学が引き起こした「言語論的転回」によって新たな展開を見せたことは周知のとおりだ。本章では、構造言語学の知見から「ニュースピーク」を理解することを試みる。

構造言語学が発展する以前の近代では、客観的な自然・個人的な意識を前提とする「物心二元論」が支配的な位置を占めていた。この立場からすれば、言語とはコミュニケーションの媒体としての道具的なものである。人間の意識活動を音声や文字という媒体を用いて外部に表出する道具、という理解だ。つまり、あくまでも言語は人間の精神的活動を外部に伝えるための道具であり、それによって伝達される内容自体は、外部から独立したプライベートな精神の産物である。この理解のもとでは言語の違いは単に、意識を伝える道具立てが違うことを意味しているに過ぎない。

しかし、構造言語学によれば、言語は人間のコミュニケーションの道具ではなく、むしろ人間の認知・思考を規定している。つまり、言語体系が人間の認知・思考を規定する構造として機能している。

この例としてよく引き合いに出されるのが「色」だろう。虹は日本において一般に 7 色とされているが、言語(≒文化)によっては七色より少なかったり八色以上だったりする。つまり、一見自然的性質から決定できそう、されていそうな要素も言語の影響を受けているのだ。色に関して言えば、周波数や波長という側面から定義ができそうだが、そもそもその切り分け方を言語が規定しているということである。そして、その切り分け方に従って私たちは思考しているのだ。というのも、虹を七色以外と認める文化圏があるものの、私たちは現に「虹は七色」という前提以外によって立って思考をすることが極めて難しい。七色以外の文化(≒言語)がある、と知っている現代人はそれ

以外の思考が可能のように思われるかもしれないが、これは、自覚的にならなければ言語が強力に思考を規定していることの証左と言える。

「ニュースピーク」はまさにこの構造言語学の知見を下敷きにしていることが分かる。人間の思考の限界は言語(≡語彙)によって拡張・縮小されるものであり、それゆえ言語に制限や恣意的な加工を加えることで国民の思考・思想を統制できるのだ。

3. 現代における政治体制と言語の関係

本章では現代における政治現象を『1984 年』を基に読み解く。取り上げる政治現象は、コロナ禍における日本行政が標榜した「自粛の要請」言説である。

3.1. 「自粛の要請」言説

本節ではコロナ禍において日本で多用された「自粛の要請」言説について考察する。「自粛の要請」は大きく①移動・旅行の制限や、②飲食店の営業制限という文脈で使用されている。しかし、そもそも「自粛」と「要請」という言葉は本来結びつくことのない単語だ。「自粛」の定義は、自分から進んで、行いや態度を慎むこと⁵であり、「要請」は、必要だとして、強く願い求めること⁶である。「自ら進んで」と「強く求める」という語義が矛盾していることをここで指摘したい。

3.2. 言語による思考の誘導・政治体制による言語使用の規定

では、なぜこのような矛盾した言葉を政治家は使用するのか。この矛盾した言葉を使う理由は大きく二つあると考える。①「自粛」「要請」という言葉を使うことで、市民の思考を誘導する狙い、②実際に行わんとする制限が政治体制の観点からは是認されにくい、感染症拡大を阻止するには制限をせねばならず、打開策として国民の認知を誘導する狙い、の二つである。

移動の制限を政府が行ったと思われると経済の停滞を政権の非難材料にされてしまう。あくまで個人が感染予防として移動・旅行を忌避しているという印象を「自粛」という言葉で植え付ける狙いがあった。また、飲食店の休業は補償とセットで行わなければならないが、強制的な休業ではなく、あくまで「自粛」を店が自主的に行っているという立場にすればその保証が不十分なことへの非難が軽減される。つまり、財政をできるだけ出動させたくないという事情と、経済停滞の責任をできる限り回避したいという政治家の狙いが「自粛」「要請」という言葉には見られるのである(先の①)。ここに「言語による思考の規定」という『1984 年』で登場したテーゼが見られる。

しかし、実際のところ強力な制限を行おうとしている。例えば、営業時間の「自粛要請」に従わない飲食店の店名を都道府県知事は公表することが新型インフルエンザ対策特別措置法で認められている。従わないならば店名を晒すぞ、という脅しである⁷。更に、法改正に向けた議論では、要請に実効性を持たせるために罰則規定を

⁵ Goo 辞書(最終閲覧日：2021/01/11)

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E8%87%AA%E7%B2%9B/>

⁶ 同上 (最終閲覧日：2021/01/11)

<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E8%A6%81%E8%AB%8B/#jn-226560>

⁷ 実際に営業自粛の要請を無視して営業を続けたパチンコ店の店名が公表されたことがある。行政の目⁷

設けるかどうかが焦点になっている⁸。要請の実効性とは何か。罰則規定を設けたらそれはもはや「要請」ではなく「命令」ではないのか。ではなぜ「命令」と言わないのか。ここに政治体制による言語の規定が見られる。

すなわち、強権的な命令を実施したとして、その責任が行政の首長に帰属されるという政治体制が、各行政の首長に「自粛の要請」という責任回避レトリックを使うモチベーションを与えているのだ。強権的な命令をすると支持率が下がるが、制限をしないと感染が拡大し結局支持率が下がるというジレンマを「自粛の要請」は解消したのである。だから、もはや「命令」と言って差し支えない内容でも「自粛の要請の実効性を上げる」というレトリックを使うのである。これが政治体制による言語の規定である(先の②)。

4. おわりに

『1984年』でジョージ・オーウェルによって描かれた全体主義・権威主義的管理社会は、言語によっても人々を管理していた。これは構造言語学が明らかにした、人間の思考と言語の関係と合致する発想であった。さらに、この、流通させる言語のコントロールによって人々の思考に影響を与えるという発想は、小説の中の話だけでなく現実世界においても観察される現象であった。「自粛の要請」言説がその一例である。「自粛」「要請」という語を行政が用い、マスコミを通じて流布することで人々に「あくまでお願いしている」と印象付けることに成功していた。しかし、実際には社会的サンクション、経済的サンクションを伴っているため「要請」という表現は相応しくないだろう。それでも尚「自粛」「要請」という語彙を使う裏には、政治体制による言語使用の動機付けがあったと言える。

言語による思考の誘導の道徳的判断(今回の行政の「自粛」「要請」といった語の使用が善いか悪いかの判断)は本稿の射程を超えるためここでは扱わないが、少なくとも何らかの価値判断を下すために、言語による思考の誘導・規定に自覚的になる必要があることは少なくとも指摘できるだろう。そのために、『1984年』に描かれた世界を「20世紀らしい妄想だ」と思わず、現代社会においても程度の差こそあれ起こりうる現象だと捉えることが重要だ。

5. 参考文献リスト

- ・ジョージ・オーウェル(新庄哲夫訳)『1984年』、早川書房、1972
- ・長尾達也『小論文を学ぶ』、山川出版社、2001
- ・「特別措置法 拙速避けて」『読売新聞』政治 2021/1/7 木曜日朝刊 13版 4頁
- ・Goo 辞書(最終閲覧日:2021/01/11)
<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E8%87%AA%E7%B2%9B/>
- ・Goo 辞書(最終閲覧日:2021/01/11)
<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E8%A6%81%E8%AB%8B/#jn-226560>

ご感想、フィードバックがもしありましたら以下のメールアドレスに送付いただけますと幸いです。

4118203a@g.hit-u.ac.jp

⁸ 「特別措置法 拙速避けて」『読売新聞』政治 2021/1/7 木曜日朝刊 13版 4頁

なぜ日本の大学で体育会が活発なのか

社会学部 4 年 弓場耀平

1. はじめに

今回の会報では、私自身が所属している、体育会について気になったことについて述べていく。

日本では多くの大学で体育会の部活動が活発である。もちろんスポーツ推薦等を利用して自分のキャリアプランの一環としてスポーツを選択し、強豪校で体育会の部活に入る人は言うまでもない。しかし例えばいわゆる入試難関校など、勉強で入試を突破した人が多い大学においても、体育会の部活動は非常に盛んである。もちろん難関校においても、部活動で行う競技を軸にして、「選手」として生きていく人間も存在している。しかしこれら難関大学において多くの体育会部員は、在学中に行う競技を生業とはしない。(趣味等で続ける人は多くいるだろうが)だとすれば、なぜ時間的制約が非常に強い体育会に入るのだろうか。自分も体育会に所属していて、何度も抱いた疑問でもある。

今回の会報では上記で述べた通り「なぜ日本で体育会が活発なのか」という問いについて論じていく。そして、この問いに関して日本における体育会の評価、意義を考察していく。

2. 日本における体育会の始まり

日本では明治時代以前から、武道の道場は存在していたが、現代の「スポーツ」の概念が導入されたのは明治時代以降からといっていいだろう。日本において最初に体育会が創設されたのは、慶應義塾大学であり、1892 年、明治 25 年に創設された。慶應義塾大学体育会公式サイトによると「明治 25 年(1892)、慶應義塾体育会は剣術・柔術・野球・端艇・弓術・操練・徒歩の 7 部をもって創設された。『先ず獣身を成して而して後に人心を養う』という言葉に代表されるように、慶應義塾の創設者である福沢諭吉は、体育教育の重要性にいち早く注目した人物でもあったⁱとある。この後早稲田大学、東京大学、東京商科大学などで体育会は続々とつくられていった。

その後太平洋戦争が始まったが、厚生省は国民に台連方針をさだめた。「一、国民心身錬成基本方針ニ関スル件国民ヲシテ善ク忠烈廉恥ノ志操ヲ涵養セシメ、寡慾剛健ナル士的生活ノ風ヲ作興スルト共ニ、体力ヲ鍛へ、戦技ヲ練リ、集団訓練ヲ昂メ、12 活カヲ浚渌旺盛タラシムルハ、決戦態勢下喫緊ノ要務ニシテ、国民心身錬成ノ本義亦爰ニ存ス。各位ハ須ク思ヒヲ爰ニ致シ、此ノ本義ニ則リ、全国民ヲシテ居常心身ノ鍛練ニ努メシムル様万全ノ方策ヲ講ジ、以テ国力ノ根基ニ培ヒ、大東亜聖戦ノ目的ノ完遂ニ遺憾ナキヲ期セラレ度ⁱⁱ」

このような方策のなかで、戦時下も体育会の活動は続いたが、学徒出陣などで学生が戦地にいくにつれて、活動は下火になっていった。

戦争の後、体育会が復活していった。このような中で体育会における一つの言説が「体育会は就活に有利である。」というものである。束原(2011)ⁱⁱⁱによると、「近代日本を牽引したのが近代企業だとすれば、『体育会系』こそが、日本の近代化を支えた象徴的身体であったともいえるかもしれない」と述べて、大正から昭和にか

けて体育会系就職がより強固なイメージとして定着し、戦後の不景気でも 体育会系就職は好調であったことを明らかにしている。それ以降、現在においても大学生の就職に際して、この言説は一般的に用いられている。ここでなぜ体育会が就職有利とされているか、その要因を探ることで、体育会の意義を知ることができ、今回の主題である、「なぜ体育会の活発か」という問いの答えにもなると考える。

3. 体育会の意義

一般的に言われている体育会の意義とは「先輩後輩の人間関係のなかで礼儀作法を学んでいる。」「四年間で全力に物事にとりくめる」、「厳しい練習のなかで体力、忍耐力が鍛えられる」などが思い当たるが、先行研究を検討していく。

まず、人的資本研究の一つとして、近年「非認知能力」からの研究が進んでいる。非認知能力は非認知スキルともいわれ、IQ や学力テストの点数、学歴などで測られる認知能力に対して、それ以外の多様な個人の能力を指す。経済学分野においては非認知能力の指標としてよく用いられるものは、自制心、自尊心、勤勉性、自己規律など(戸田・鶴・久米、2014)^{iv}であり、性格特性や選好などのことである。この研究では従来、認知能力に偏っていた人的資本に対する研究に対し、非認知能力やそれを形成するといわれる幼少期の家庭環境に着目し、学歴や雇用形態、賃金といった労働市場における成果への影響を分析している。この中で、運動系クラブや生徒会に所属したことがある者の場合、賃金が高まる効果がみられたことを明らかにし、外向性、協調性、リーダーシップなどが将来の労働市場での 成功に結びつくと解釈できるとしている。

また、金森(2018)^vにおいて、大学時代に体育会運動部、体育系サークル、文化部、文化系サークルに在籍していた社会人を対象に、現在有すると認識 している自覚的能力を比較分析した。その結果、勉強と両立していた体育会運動部に所属していた男性は、人間関係構築力、コミュニケーション力がトップであり、折衝力・交渉力、体力、語学力、忍耐力も次いで上位にあり、女性もほぼ同様の結果で、「勉強と両立」していた体育会系所属者は、男女とも他の所属と比較してより高い能力の自己認識を有していることを明らかにしている。

これらの先行研究から一般にいわれる「体育会が就職で有利」とされているものに裏付けられていることが分かった。

4. おわりに

上記の通り、体育会の強みとされた「コミュニケーション能力」、「忍耐力」などは存在していることがわかった。このような研究に裏打ちされているからこそ、社会、企業においても体育会の強みが認識される中で、大学においても体育会が存続、形成されるとともに、現在コロナウイルスの危機のなかでも大会などが継続されるほど日本社会に体育会が根付いていると考えた。寮においても、コミュニケーション能力が必要になる場面は少なくなく、我々寮生の強みとしても「コミュニケーション能力」があげられるかもしれない。今後の寮生もコミュニケーションを絶やさない、活発な寮になってほしいと願う。

注

- [1] 慶應義塾体育会 公式サイト<<http://www.uaa.keio.ac.jp/about/history.html>>
- [2] 坂上康博(2010)太平洋戦争下のスポーツ奨励--1943 年の厚生省の政策方針、運動用具および競技大会の統制 (グローバル化とスポーツの変容)
- [3] 束原文郎(2011)〈体育会系〉就職の起源—企業が求めた有用な身体:『実業之日本』の記述を手掛かりとして
- [4] 戸田淳仁・鶴光太郎・久米功一(2014)幼少期の家庭環境, 非認知能力が学歴, 雇用形態, 賃金に与える影響
- [5] 金森史枝(2017)大学時代の体育系正課外活動への参加が社会人生活に及ぼす影響:体育会運動部と体育系サークルとの所属の違いに着目して

心の貧しい人は幸いです

山本通(昭 45 年経卒)

聖書の中には難解な個所が多々ある。イエスが「山上の垂訓」で発した最初の言葉「心の貧しい人は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」(「マタイの福音書」5 章 3 節、訳文は『聖書:新改訳 2017』による。以下同じ)もそのような難解な個所の 1 つである。しかも、このイエスのメッセージは山上の垂訓の最初のものなのだから、わからないからと言って、なおざりにするわけにはいかない。これは困った。

日本語の普通の感覚では、「心が貧しい」とは「心が豊かだ」の反対語である。「豊かな心」とは、ふつうは、おおらかに寛容な、明るく希望に満ちた心を意味し、逆に「貧しい心」とは、ふつうは、卑屈で余裕がなく、ケチ臭く、卑怯な心を意味する。それなら、どうしてこのような「貧しい心」の持ち主が幸いで、神の御国の恵みに与えられるのだろうか。どうもおかしい。おそらくこれは、普通の日本語の感覚とは違った意味なのだろう。実際、この部分のギリシャ語を直訳してみると、「プネウマにおいて貧しい人」という意味なのだそうである。プネウマというのは、「息」「息吹」であって、ここでは「神の息吹」「聖霊」を指すらしい。しかし「霊において貧しい人」といわれても、どうもピンとこない。

そこで、小笠原優神父の『キリスト教信仰のエッセンスを学ぶ:より善く生きるための希望の道しるべ』(イー・ピックス、2018 年)を参照してみる。この本はカトリック信仰の入門書であるが、本来は横浜教区でカテキスタを養成するための教科書として編まれたものである。山上の垂訓のこの箇所は、この本の 72 頁で触れられている。著者はこの箇所を次のように解説する。「イエスは今、当時のユダヤ教社会にあつて『神から見放され、神の息吹に窮乏している』と決め付けられたあなたたちこそ、実は神に祝福され受け入れられている。なぜなら、天の国はあなたたちのためなのだから、と訴えます」と記している。何となく解ったような、解らないような感じがする。つまり、「心の貧しい人」とは低い社会層に属しており、軽蔑されている人を指すという解釈なのだが、それでは一体「心が貧しい」とは何を意味するのか。その問題への答えは回避されている。読者の皆さんがご存じのとおり、「ルカの福音書」6 章 20 節の「平地の説教」の中では、イエスは「貧しい人は幸いです。神の国はあなたがたのものだからです」と語られる。小笠原神父の説明では、この「生活の貧しさ」と「心の貧しさ」が区別されていない。

そこで次に、大塚久雄の「生活の貧しさと心の貧しさ」という文を参照してみる。大塚久雄は文化勲章を受けた著名な西洋経済史家で、この文は『大塚久雄著作集』(岩波書店)の第 10 巻の収録されている。これは 1966 年 12 月 4 日に催された「矢内原忠雄先生五周年記念講演会」における講演の速記録に、著者が手を入れたものである。講演だから、余計なことが色々と言及されている。読者は、それらに惑わされずに、議論の急所を押さえないければならない。亡くなった先輩の滝浦満さんが著作集の全巻を一橋大学 YMCA に寄贈されたのだから、寮生諸君は容易に参照できるはずだ。

さて、この文の中で大塚久雄は、単なる貧しさと「心の貧しさ」とははっきりと別問題であると指摘し、前者を「経済的貧困」、後者を「精神的貧困」と言い換える。そして旧約聖書の中の「イザヤ書」「エレミヤ書」「エゼキエル書」「ヨ

ブ記」とりわけ「申命記」の中では、経済的貧困に苦しむ人々への同情と、彼らを救済する義務感が強く打ち出されている、と指摘する。そしてまた、新約聖書においては、むしろ精神的貧困の問題がクローズアップされてくる、という。大塚久雄は神学者ではないのだけれども、篤信の無教会派キリスト信者として、しっかりと旧約・新約聖書を読み込んでいることがわかる。そして大塚は、精神的貧困の実例を福音書の中からいくつか取り出して示す。

第1の例は「ルカ福音書」19章1～11節の「取税人のかしら」ザアカイの話である。この人は、イエスが近くを通られることを知ると、どうしてもイエスを見たいと思ってイチジクの木に登って待っていた。それに気が付いたイエスは「ザアカイ、急いで降りて来なさい。私は今日、あなたの家に泊まることにしているから」と言った。ザアカイは小躍りしてイエスを家に招き、「私は財産の半分を貧しい人たちに施します。誰かから脅し取ったものがあれば、四倍にして返します」と言った。これに対してイエスはこう言われた。「今日、救いがこの家に来ました。…人の子は、失われた者を探して救うために来たのです」と。ザアカイは取税人のかしらなので金持ちだった。経済的貧困に陥っていなかった。しかし精神的に貧困だった。それは、徴税人という立場の故である。徴税人はイスラエルの宗主国ローマ帝国の手先となって、ユダヤ人たちから税金を取り立てる役割を担っていたからである。ザアカイは、したがって、ユダヤ人たちから罪びとと見做され、自らも罪びとであることを自覚していた。大塚久雄が強調するのは、「罪びとである」という自覚の重要性である。生活のために罪深い仕事を引受けてしまった「うしろめたさ」が彼を苦しめていた。これが「精神的貧しさ」つまり「心の貧しさ」だと大塚は指摘するのだ。

大塚久雄が次にあげるのは、「ルカの福音書」7章36～50節に出てくる「罪深い女」である。あるパリサイ人に招かれてイエスはその人の食卓に着いた時である。「その町に一人の罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏の壺を持ってきた。そしてうしろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらイエスの足を涙でぬらし始め、髪の毛でぬぐい、その足に口づけして香油を塗った」。この香油というものはオリーブ油であろう。壺いっぱい香油は非常に高価なものだ。そして当時は、香油を人に塗る、というのは、王様のような高貴な人だけに対して行なわれることであった。つまり、この女は、イエスが神の子である救い主だと思ってそうしたのだ。ところが、この光景を見てシモンという名のこのパリサイ人は眉をひそめた。しかし、イエスはシモンの心を見抜いて、例え話を語って諫めたのちに、その女に言われた。「あなたの罪は許されています」そして「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心していきなさい」と。「罪深い女」とは恐らく売春婦のことであろう。彼女は生活のために、身体を売るはめになったのだ。その辛く悲しい思いは彼女のあふれ出る涙に表わされている。大事なことは、ここでも、彼女が自分を罪深い女だと自覚していることである。彼女は、したがって、生活のうえでも、精神的にも、貧しい状態にあったのだ。「目の見えない人や足が悪い人を治してしまったこのイエスにすがれば、私の罪も許されるかもしれない…」。そのような必死の思いで彼女はイエスに近づいたのだった。そして、彼女はイエスへの強い信頼のゆえに救われたのだ。

大塚久雄はザアカイやこの罪深い女のような人々が「心が貧しい人」だという。それを大塚は「みずから自分自身の罪を意識して、その罪の意識にさいなまれ苦しんでいる人々、そのために生きることの積極的な意味を見失い、内面的に暗黒の中にいる人」と説明する。それは、ザアカイや罪深い女に限らない。当時の社会では、身体障害者や虚弱な身体を持つ人、はすべて自らの罪の結果としてそうなった、考えられていた。そして、そのような人びとは皆「心が貧しい」状態にあった。つまり、身体障害者やライ病患者、てんかん持ち、知的障害者などなど。しかし、大塚久雄はさらに踏み込む。このような差別や排斥は現代的な問題でもある、と。現代社会においても、ある人びとは他のある人々を、人種や民族や性別や身分や階級や学歴など、様々な社会的な基準で差別し、逆に差別される人々は自らの差別状況を仕方ないものとして受け入れている。このような差別されている人々が「心

の貧しい人」「精神的に貧しい人」なのだ、というわけだ。大塚久雄はさらに、経済的貧困は往々にして精神的貧困を前提として生まれる、という。もちろん、因果関係がその逆である場合もあるだろう。しかし、精神的貧困を生み出すさまざまな社会的差別をなくすことなしには、人は本当の意味では幸せになれないだろう、と大塚は言う。

大塚久雄は社会学者として問題に深く切り込んで行くのだが、もちろんイエスはそこまで踏み込んだ発言をしているわけではない。しかし、大塚が「心の貧しさ」を本人の自意識の問題として捉えた点は重要であろう。実際、カトリックのフランシスコ会聖書研究所訳注の「マタイによる福音書」では、一般に「心の貧しい人」と訳されている部分を「自分の貧しさを知る人」と意識している。そして非常に長い注釈をつけている。次にこれを紹介しよう。そこには次のように書いてある。・・・「自分の貧しさを知る」というこの態度は、旧約聖書における「アナウイム」の態度を反映したものである。「アナウイム」は、虐げられている者、苦しむ者、哀れな者、貧しい者、柔和な者、へりくだる者、弱者などと多様に訳されている・・・この「アナウイム」の典型は、国家、富、身分などの誇りをはぎ取られ、神だけに頼っているイスラエル人の「残り」の者である。・・・自分の人間的弱さと貧しさを知ることは、全てのキリスト信者にとって必要である・・・。なお、もっと詳しい説明は『聖書思想辞典』三省堂、1989 年の中の「貧しさ」の項目に見ることができる。これはフランスの聖書学者 L. Roy の手になるものである。参照されたい。

したがって「心の貧しい者」の最も適切な意識は、「自分の精神的な貧弱さを自覚している者」ということになる。あるいは、「打ちひしがれた人」「みじめな思いをしている人」「自分をクズだと思っている人」と意識しても、当たらずとも遠からず、だろう。こう解釈すると、「マタイの福音書」11 章 28 節以後のイエスの言葉が、本当に胸に迫ってくる。・・・「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」。

一橋大学 YMCA 寮の諸君。分かりましたか。「分かった」と答えた人たちは、多分頭では分かったであろうが、まだ実感できないだろう。君たちのようなエリートが、このような秘儀を実感することは難しい。それは、当たり前だ。わたしも長い間、ずっとわからなかった。でも、いつかわかる時が来る。いつかきっと来る。だから、イエスのこの教えのことを忘れないでほしい。

追悼文

故鈴木一策兄を偲んで

宮岡五百里(昭 43 社卒)

本年 4 月、鈴木一策兄が3年ほどの闘病も空しく還らぬ人となりました。当 YMCA 寮には2年間(1966年～1968 年)だけの在寮でしたが当時の先輩、同輩、後輩には退寮後も含め記憶に残る存在ではなかったかと思えます。私には2年後輩に当たるのですが、何故かうマが合い途絶えることなく55年に亘り付合うことになりました。

最期の 1、2 ヶ月程は、電話、日野の自宅訪問を繰り返し、直前の 1 週間は、青息吐息の「意気軒昂」なつぶやきも聴くことになりました。若い頃から野口晴哉等に傾倒し、鍼灸にもはまっており東洋医学に依拠してきているので殆ど入院もせず奥様の手厚い介護中心の独自の療養生活でした。担当医師(西洋医学)は、「これだけの反西洋医学の徹底振りはお見事」と語ったとのこと。

お話したいことは多いのですが、先ずコロナが東京を席卷していた最中の 4 月 24 日に行われた「通夜式」のご紹介から始めます。

僧侶なし読経なしの焼香から始まったのですが、その後、祝詞の披露、謡曲の披露。これはそれぞれの世界での権威(勿論一策兄の親友であり、沖縄に関する師や能舞台での師。そして飲み仲間)。続いて主催者の送ることば＝弔辞。式を通して会場に流れた BGM は、フォーレのレクイエム、ブラームスの室内楽(本人の好み、御身内や私も関与)。この通夜式の主催は、「鈴木家」ではなく藤原書店であり、弔辞は仲間、友人を代表しての藤原良雄社長が、呼びかけ語りかける調子で。参列者は多士済々。御身内を含め 60 名強。賑やかなのを好む彼に相応しいものでした。

藤原書店が実質全体を取り仕切られたということで、あらためて藤原書店の編集委員の一人としての彼の存在感を再認識させられました。僕は 55 年ですが、藤原社長は 42 年の付き合いとのこと。彼は「代表作」となる『マルクスとハムレット』(後述)のあとがきにその出会いに触れています。一方藤原社長は弔辞の中で、その初対面の席で『資本論』の原註の誤りを話題にした彼をやはり専門家としての矜持もあつたことから一目置くようになり、その一途な処に惚れ込み長い付き合いが始まったと、言及されました。

いずれにせよこの並外れた通夜は、一策兄が生前に意志を伝えておいたのでは無いようですが彼ならではの、藤原社長ならではの内容でした。

6 月には御身内も参加の「偲ぶ会」が書店本社のゲストルームで開催されました。30 名超が参加、「後藤新平の会」(実質藤原書店主宰)会員を中心に、彼が講師を務めていた國學院大學や中央大学関係者、彼自身が中心になっていた各種勉強会メンバー等々、そしてその多くの方々に共通するのが「飲み仲間」。彼との縁を語り、偲ぶ席ではありながら、2014 年上梓した『マルクスとハムレット～新しく『資本論』を読む～』(藤原書店)を中心に侃々諤々議論が続き、更には彼の一学徒としての足跡を辿りつつ話題も交錯。ご長男が、『マルクスとハムレット』での「里山資本主義」に関する部分に関しては鋭い批判を展開していたのが印象的でした。又大学関係者からは、彼の独自の研究流儀が周囲と軋轢を生じることもあり仲間同僚としても戸惑うことがあったとの率直な述懐もありました。更には謡曲の師からは、流派の暗黙の決まりごと等に無頓着な一面があるもののその発声、声量、意欲は評価との披瀝もありました。(私は 12 年前に国立能楽堂での彼の能の初舞台にも駆けつけています。演目は『蟬丸』)。又比較的若い世代の勉強会メンバーは、その熱心な講義後の飲み会での「復習」があればこそ、今日もここに来ているとの弁。

触れるのが遅れましたが、当日参加者全員に「鈴木一策先生の仕事」と題する 4 頁の資料を配付。彼の生涯に亘る全著書、訳書、編書、寄稿等が記載されたもの。併せて、「藤原書店ブックガイド 2021」(同書店の全刊行物の簡潔な内容紹介版)も。これらから彼の学徒、研究者としての全貌が見えてきます。

会場のスクリーンでは元気な頃の姿も紹介されました。その冒頭は私が提供した YMCA 寮時代の写真から。これらは、昨年？一橋祭の YMCA 展示物の一つとして一時提供した私の個人アルバムからのものも含まれていますが、特に奥多摩山行の写真には、彼だけでなく当時の在寮生数人の 50 年以上昔の「勇姿」が残っています。亡くなる数日前、彼を元気づける狙いで本人から依頼のあったブラームスの室内楽全集 CD と併せて自宅に持参したものでした。

最期の式や集まりの報告から入りましたのは、彼の生き方や私との付き合いの一端が垣間見えると思ったからですが、その補足も含めて私の目から見た一策兄の足跡を少し辿りたいと思います。

仏教系の鎌倉学園高校出身ながら、『資本論』全巻を読破し人前で論陣を張ることができる新入生を迎えたのは YMCA 寮で初めてであろうし、当然大学の唯物論研究会にも参加していましたが、一方で寮の聖書研究会に

もきちんと参加しクリスチャンの寮生と堂々と渡り合っていました。私は勉学よりは太宰に耽溺、音楽優先をしていましたが、当時聖書研究会とは別に、自由参加の読書会には積極参加しており彼とはその辺りからよく会話するようになったと思います。内容はすっかり抜けましたが、マルティン・ブーバー著『我と汝』、アンリ・ポアンカレ著『科学と方法』、カール・レーヴィット著『ヨーロッパのニヒリズム』原典等が記憶の片隅にあります。

在寮時代には、当時別府温泉にあった我が実家に訪ねて来ています。又歌が得意でもあった彼の伴奏役(下手なオルガン)で、シューベルトの「冬の旅」等に付合いました。(当時はメルクールの藤原先輩、伊東先輩も居られて歌唱楽器が賑やかな寮でした。) 修士課程時代の結婚式には、寮関係では私だけが参加しました。僭越ながら披露宴では歌唱の伴奏とシューベルトの即興曲を披露しました。参列者で記憶にあるのは鈴木秀勇さん(修士課程の教官指導?) の他は数人の彼の友人たち。その多くが既に大企業に就職していましたが、宴終了後新宿に繰り出して「安保、反対」のシュプレヒコールしながらのミニジグザグ行進にも付合わされました。その後の彼等の消息を彼に聞くと、見事に会社人間に変身し交流も途絶えたとのこと。私も似たようなものなのでしょうが。但し私が心掛けてきたのは、「ご同業」との付き合いも必要ですが、「別業界」にも接点を持つておくこと、会社生活に埋没しないことを心掛けたことが、一策兄や一橋 YMCA との関係にも結果的には影響したのだらうと思います。

当時の大学紛争の影響もあったようですが、その前後から『資本論』を批判的(マルクス経済学者への?)に捉え始め「生活綴り方運動」に関心を寄せ(修士論文テーマ。中内敏夫氏との接点もこの頃)、教育学、言語学への関心、生活感を重視する彼の生涯に亘る研究姿勢が固まっていたようです。彼の語学力は若い頃には感じなかったのですが、些細な箇所にも拘る執拗さには後年敬服させられることになります。(私は、会社の仕事も面白くなく時代に流されて高橋和巳を耽読。)その頃だったと思いますが、彼に梅原猛著『隠された十字架』(新潮社 1972)を紹介され、私の読書人生のひとつの転換点になりました。

その後の彼は、前述のように藤原良雄氏との出会いにより、藤原書店に主戦場を見つけましたが、大学では周囲の後援も空しく必ずしも本人が望むような「戦場」を得られなかったようです。前段の逸話でも紹介しましたが、同じく後援した寮の同輩山本通兄もこの辺りに関しては、いろいろな思いがあるのではと推察されます。同じく寮の後輩桜井直文兄は、イヴァン・イリイチ著桜井直文訳『生きる思想』(藤原書店 1991)上梓していますが、これに絡んで一策兄と研究者同士故のゆき違いもあったようで、私のような門外漢は、象牙の塔の難しさを感じました。

著書『マルクスとハムレット～新しく『資本論』を読む～』（藤原書店 2014）は、着想から 30 年以上かけて、藤原良雄氏の後押しもあって纏めた論考です。来年こそは刊行できると毎年のように聞かされていましたが。シェークスピアもよく読んでいたマルクスの「商品」「労働」「貨幣」等に関する資本論執筆上での悩みを「ハムレットの悶え」に重ね合わせケルト文化も絡めた視座で論述。我々が漠然と一般常識化してきている戯曲『ハムレット』には彼なりの深い読み込みで斬新な解釈をしています。重要なキーワード「Quid pro quo キドプロコ」（「取り換え」「思わぬものをつかまされる」の意）というラテン語は本書で知りました。いずれにせよ学者でもない私如きが簡潔に解説できるような代物ではないので、諸兄は是非お目通し下さい。高々 200 頁です。

我々の会報第 64 号に彼が 13 頁に及ぶ論考を寄稿しています。『ハムレットと『ヨハネ黙示録』—ヨモギ文化をめぐる—』。発刊後 1 年であったこともあり、その論考でも著書の内容解説も含めて触れています。（私には、その刊行記念パーティに招待されていたのに、直前に山で骨折し参加叶わなかったのが心残り。）

会報掲載の話題ついでに、昨年の 72 号「私の本棚」で拙稿「最近の読書から」に、後藤新平著『国難来』編集・解説鈴木一策（藤原書店 2019）を取り上げています。関東大震災後の普選実施を控えての「政治の倫理化」を訴えた後藤新平の講演を約 90 年後の東日本震災と政治状況に重ね合わせたもの。更に後藤の言動にも繋がる熊澤蕃山の実学思想にも着目し、刊行も視野に入れて「熊沢蕃山と後藤新平」の標題で「後藤新平の会報」に連載を続けていました。それらに並行して以前から高く評価していた石牟礼道子にも向き合っていました。やはり会報 72 号の拙稿で数行触れました石牟礼の晩年の大作『（完本）春の城』（藤原書店 2017）。『苦海浄土』とこの大著も私の読書の在り方を考えさせてくれました。）この解説を田中優子、赤坂真理、町田康に並んで担当しましたが 3 人とはかなり異なる視点。天草・島原の乱を描いていますが巷の「歴史小説」とは次元の異なる宗教・人間・生活を深く掘り下げた 900 頁の大著。私は、一昨年から昨年にかけての半年間、彼が講師を務めた読書会風実務講座（実践女子大学主催）『春の城』を読むに参加しました。既に彼の病は進行していたものの、問題意識のしっかり共有できる小人数の参加者にも恵まれ、時には謡曲を実演したり、講師にとっても「講座講義はかくあるべし」と充実感を味わえる読書会であったと、受講者としても自負しています。最終回後には全員 6 人が我が家に集合し、殆ど酒を飲めなくなっている講師を囲んで打ち上げもしました。「一策が酒を飲めないとはよくよくのこと」とこの 2-3 年何度彼に言ったことでしょう。でもタバコは最期まで絶ちませんでした。やはり、この講座が、執筆活動を別にすれば、外での活動の最後になったようです。彼の戦場、書店での編集会議にも最後

の半年ほどは参加できなかったようです。

酒の席でも、講座の講義でも話題が跳び(彼なりには連続している)、時には学者等の批判が混じり將に我が道を行く男でした。浅学非才の私としては、冷やかしたり議論分野をすり替えたり、他の本を持ち出したりして、長い付き合いをしてきましたが、生活・自然に密着した彼の問題意識の広さ、博学ぶり、向学心には敬服しています。今になって思うのですが、彼はともすれば所謂「縦割り」思考が一般的な世情に、意識するしないに拘わらず抗い続けていたのかも知れません。

締めくくりに、一橋キリスト教青年会とはかなり距離のある男と思われる彼の一面を紹介しておきます。聖書の読み込み(諸言語版も含め)は、キリスト者の目にどう映るかは別にしてかなりの水準と推察します。現に彼の著作、論考には、聖書の引用は驚く程多数登場します。私はここ数年讃美歌に関して、日本の洋楽の源流との視点から関心を持ち、かなり聴き学ぶことも心掛けていますが、彼の「研究姿勢」に多少触発される部分もあります。同じく会報 72 号、〈先人の足跡を訪ねて〉の齋藤兄の福田徳三に関する一文には彼は大変関心を示しておりました。やはり後藤新平に絡む視点で、渋沢栄一も含め今後勉強したいと、珍しく？齋藤兄を(正確には企画か？)評価していました。これは、会報の存在価値を再認識する一件とも捉えられます。又、一昨年の秋口には、50 数年ぶりに YMCA 寮を訪ね、寮と新築の YMCA 一橋ホールを見学しています。当初私が案内するつもりでしたが、体調の波が激しいことから予定の変更による迷惑を恐れて単身となったようです。寮生との対話ができればとも考えていたようですが、あまり明確な名乗り方もしなかったようですし、現役寮生には和服姿の難しそうな痩せたジイサンと映ったかもしれません(勿論見学案内はしてくれたとのこと)。

終わりにレクイエムに関連して。一策兄が、レクイエムの双壁であるモーツァルト作品とフォーレ作品の内、フォーレに拘りを持つ理由を聞きました。「モーツァルトは、「怒りの日」「呪われた者」の部分が、暗く恐ろしい。フォーレは、地獄の暗示のような部分はなく、全体に静かで癒やされる」と。おっしゃる通り——。死が迫っていた彼の言葉だけに、悲しくも実感がこもっていました。

故鈴木一策兄の実像が多くの方々にも伝わればと念じつつ、筆を擱きます。〈了〉

渡辺先輩を偲んで

堀地史郎（昭和 30 商卒）

渡辺滉先輩（以下、渡辺さんと書かせて頂く）は、大学は昭和 28 年（1953 年）旧制のご卒業であり、小生の 2 年先輩に当たる。昭和 28 年卒は学制改革の影響により、新・旧制が同時に卒業された年である。

渡辺さんは、在学中から本所緑星教会の熱心な信徒であり、学生 YMCA 活動にも積極的に参加されていた。当時は学 Y 活動は、一橋寮生だけではなく、寮外生（当時は通学生と言っていた）の参加者もかなりおられた。学 Y 活動の中心は、夏季の東山荘におけるセミナーであり、全国の大学からの参加者があった。添付の写真は、確か昭和 27 年のものだと思うが、一橋 YMCA からは、渡辺さん、中内恒夫さん、小生が参加した。（中内さんと小生は在寮生であった。）小生にとって、渡辺さんは人生経験、聖書研究等においてまさに先輩であり、見習いたいものだという思いが強かった。確か講師は、宮本武之助先生ほかであったと思うが、渡辺さんは講師陣とも親しく、講演の内容についていろいろ解説をしてくださったことも忘れられない思い出である。

渡辺さんは、ご卒業後、三和銀行（その後の M&A により現三菱 UFJ 銀行）に入行され、1988 年に同行頭取に就任され、全国銀行協会連合会副会長、経済同友会副代表幹事等も兼任され、まさに、日本経済界のリーダーの一人としてご活躍された。いくつかの接点を通じて受けた印象を記し、今や、天上にある渡辺さんを偲びたい。

- (1) 旧三和銀行は、関西発祥の名門銀行であり、東京海上にとっても関西は、かつては有力海運業、繊維業等が本社を置いた大市場であった。お互い共通の企業客先も多かった。小生は 1984 年から 1986 年まで東京海上の大阪支店長として赴任したが、渡辺さんは三和銀行本店で頭取になれる直前であった。当時某客先の社長のご子息の結婚式があり渡辺さんご夫妻は、媒酌人を務められた。その席に小生も出席したが、渡辺さんがお客様からの信頼がいかに厚いかを感じる披露宴であり、渡辺さんの謙虚なお客様第一主義を実感した。
- (2) 2014 年 3 月は一橋寮再建のための募金活動が始まった頃であったが、是非、渡辺さんをお願いしたいと考え、ご上京の機会を伺い（渡辺さんは堺市にお住まいであった）齋藤理事長と共に如水会館でお会いした。渡辺さんは学生時代、通学生であったが趣意書を一読してすぐに賛同され後程金額を連絡しますといわれ、多額のご寄付を頂いた。我々も大変勇気づけられたことを鮮明に思い出す。

渡辺さんは入行当時の銀行業界の行員の勤務実態（特に女子行員）を回想され、残業が多くしかもその原因が閉店時に帳簿と現金が一致しない時は何回でも算盤でのチェックを行っていたことを話された。そして対策として業務の機械化（今日でいえばデジタル化というべきか）に取り組んだことを述懐された。渡辺さんの大きな業績であったと聞いた事があるが、銀行業務の変遷はまさに日本経済全体の縮図であったということができよう。

- (3) この席で渡辺さんから公益財団法人日本少年野球連盟（BOYS LEAGUE）のパンフレットを頂いた。後で読んでみてこの組織は 1970 年（昭和 45 年）にスタートし、一年後、南海ホークスの元

監督鶴岡一人氏が理事長に就任以来、その人間性に惹かれて、約 30 年間にチーム数が急増した由である。鶴岡さんは 2000 年に他界され、その後を、なんと渡辺さんが会長に就任されている。以来 10 年間「野球をやるならボーイズリーグ」などのスローガンを発せられるなど、連盟を精力的に引っ張り続けられたことを識った。

あらためて、渡辺さんの幅広い視野と活動分野そして組織指導運営能力の高さに感服した。

最後に、小生にとって、渡辺さんの印象はあの東山荘セミナーにおいて受けた柔和さの中にある芯の強さであり、これはその後も変わることはなかった。そして一橋 YMCA の交わりの中で与えられた神の恩寵に感謝の念を深くするものである。

写真＝向かって右から

中内恒夫さん、渡辺滉さん、堀地史郎さん



父の思い出

成田 章(故成田政俊様(昭 27 年卒)ご長男)

本年 7 月 18 日、父 成田政俊が天に召されました。91 歳の生涯でした。

軟弱世代の私共とは比べようもなく、大抵の患難は自助努力で切り抜けてきた矜持があるためか、最晩年まで自らの体調不良と共存しつつ母の介護に奮闘しておりました。

今年の 3 月に誤嚥性肺炎を発症して入院。爾来、容態が変わる都度々々に最善の対応を尽くしたつもりではありますが、経口での栄養摂取も出来ない寝たきり状態に加え、コロナ禍という大きな壁の前に、僅か数回・数分の面会しか許されないまま、一人で旅立たせてしまいました。さぞや不安だったであろう、寂しかったであろうと、未だ無念の想いがよぎります。

生前の父に想いを馳せてみると…。なぜか本人のキリスト教関連の活動や信条について、家族にはあまり語ることはありませんでした。宗教の勧奨に限らず、思想やライフスタイルの干渉もしませんでした。元気な頃は懇意の教会での日曜礼拝に通い、あくまでも自分の心の拠り所・指標としていたようです。

その教会でお別れ会(=葬儀)をさせていただくにあたり、我々家族が全く想像していなかった父の一面:19 歳で受洗、人付き合いは苦手だったはずが多くの教会仲間の人気者、発展途上国援助に協力、お気に入りの讃美歌があった e.t.c… を知り、何故か家族が面映ゆい気持ちになりました。

総じて寡黙、呵々大笑する姿は見たことがありません。対照的に饒舌快活タイプの母の横で、いつも言葉少なに微笑んでいるシーンばかりが目につかびます。

とはいえ、謹厳実直で実用一点張というわけではなく、進取の気性も持ち合わせており、家電や食品の奇を衒った新商品に手を出しては母に叱られていたのが微笑ましく思い出されます。

失って数か月過ぎた今、若い頃の武勇伝に仕事、人生観から些細な悩みに至るまで、ただただもっと父と話をしたかったという思いが募ります。それが叶わなくなった今、父の基本スタンスであった『人の価値は特技や能力で公正に評価せよ、他人を中傷することなかれ』を心に、前を向いていきます。

末筆ながら、生前父が皆様方から賜りましたご厚誼に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

活動報告

YMCA 一橋読書会の活動について

佐藤周一(昭 54 法卒)

1. はじめに

当初、本稿は会報の「先人の足跡を尋ねて」コーナー向けに、山本通編集長から作家の城山三郎氏(杉浦英一氏:昭 27 卒)について書くようにとの依頼がありました。これは後述の通り、YMCA 一橋読書会の初年度テーマを「城山作品に親しむ」としたことによる打診。しかし私自身は平凡な城山作品ファンでしかなく、ご本人とも一度しかお会いしたことがないこともあって、城山さんについて語る資格はありませんとお断りました。

さらに、新設された「YMCA 一橋ホール」の有効活用策として、国立市民を対象に「外部に開かれた行事」としての読書会の取り組みは、公益法人としての新たな役割を具現化した企画でもあり、その嚆矢として寮出身者である城山氏の作品群を採り上げた経緯は、会員諸兄へお知らせするに値するものと考え直しました。

そこで、城山さん自身に関する論考機会は、どなたか適任の先輩諸氏にお譲りすることにして、当該読書会の初年度の取り組み詳細と2年目の進行状況についてご報告させて頂くことにします。

2. 読書会の立ち上げ経緯(会報 72 号記事と重複部分あり)

「YMCA 一橋読書会」を始めた経緯は、「公益法人」として寮生や OB 以外の第三者に対する活動実績が監督官庁である東京都から求められていると解釈したことが契機です。文化系サークルの活動として市民も参加しやすい行事として読書会を選択し、多目的ホールの「YMCA 一橋ホール」(以下、ホール)の竣工に合わせ、私自身が居住地(墨田区)で数年に亘り参加してきた区立図書館での読書会ノウハウを活用することにしました。(因みに読書会ノウハウとしては、①課題図書を選択に際しては参加者の意向集約の上、購入費用の点から単行本より文庫本を優先すること、②作者及び課題図書に関して事前に詳細なレジメを作成しておくこと、③参加費は会場費と資料代の数百円程度、等が挙げられます)

事前に理事会で企画概要を報告し了承を得ましたが、私個人が主宰する形でスタートした背景には、当該読書会がキリスト教の普及という法人の事業目的から離れ「不偏不党」を旨とするリベラルな立場を担保する必要があったからです。これは課題図書を選択する際に、時には宗教批判やキリスト教批判の要素を含むケースを想定してのことでした。また宗教に抵抗感のある市民でも気軽に参加しやすい会とする意味もありました。

2020 年春のホール竣工を前に、読書会の最初の課題は「如何にして国立市民から参加者を募るか」という点。当初の目標としては 10 人程度の参加者を想定し寮の近隣各戸にチラシを配布することも考えましたが、「公益」法人としては広範に市民に周知することが望ましいことから、旬刊で市内全戸に配布される市広報誌に募集広告を載せることに。告知に必要な行数・スペースの有料広告代8万円は個人負担しました。

広報誌2月下旬号に掲載された広告を見て応募してきた市民は4名。平均年齢 75 歳で男女同数。私が参画している墨田区の読書会も同様な年齢構成であり、高齢者主体となることは想定内でした。一方、想定外だったのはコロナ禍で、横浜に寄港したクルーズ船から始まった感染拡大が瞬く間に全国へ広がり、教育機関への休校措置のほか、不要不急の外出自粛要請など矢継ぎ早やに感染防止対策が採られることになりました。

4月下旬に予定していた第1回読書会は、緊急事態宣言の発出もあり、二カ月ほどの延期を余儀なくされる間、参加申込者のうち3名は感染懸念のため辞退を申し出ることに。その結果、6月下旬に開催した読書会は、公募参加者の女性(78 歳)のほか、墨田区の街歩きツアーで知り合った小金井市在住の大学先輩(昭46卒:元日本経済新聞記者)S 氏と、私の高校同級生で街歩きガイド仲間の W 君(法務省勤務)を加えた計4名で、土曜の午後3時からのがスタートしました。

3. 初年度(2020 年)企画「城山三郎作品を味わう」(6月～11月)経緯

(1) 第1回(6月27日):『雄気堂々』(1972 年)

参加者には予め、初年度は寮 OB の城山作品を採り上げること、第1回の課題図書は 2021 年度NHK大河ドラマ『青天を衝け』主人公・渋沢栄一の半生を描いた『雄気堂々』であると告知済みでした。明治 8 年(1875 年)の「商法講習所」創設以来、昭和 6 年(1931 年)に 91 歳で亡くなるまで様々な形で一橋大学を支え続け、全ての一橋人にとって共通の大恩人を描いた小説でもあることから、著者にも縁あるYMCA 一橋寮の読書会に相応しい第1回作品と考えました。

読書会の冒頭では私から作者の略歴を紹介。その際、一橋大学広告研究会発行のフリーマガジン「Kunico」(2017 年 6 月号)の「没後十年、一橋出身の昭和の大作家:城山三郎の生涯」と題された特集記事の内容が充実しており、とても参考になりました。

城山さんは半世紀近い作家生活を通じ、長編小説・短編集・エッセイや翻訳作品など 200 以上に及ぶ著作を遺していますが、本作は文壇デビューを果たした短編小説『輸出』(昭和 32 年)から 15 年後に発表された長編小説で、作家人生の中期初頭での作品という位置付けになります。その 3 年前にはスーパーダイエー創始者・中内功をモデルとした『価格破壊』を発表、『雄気堂々』の 2 年後には『落日燃ゆ』で毎日出版文化賞と吉川英治文学賞を受賞するという、伝記小説のスタイルを確立し得て「脂が乗り始めた」時期の著作であるとも云えます。

内容は「日本資本主義の父」と称される渋沢栄一の青年期から中年期にかけての半生を描いたもので、具体的には 19 歳の栄一が、ひとつ年上の千代と婚礼を挙げる冒頭シーンから始まり、その千代が 42 歳で病没するまでの約 20 年の歳月をドキュメンタリーのように丁寧を描いたものです。栄一自身が後に「あたかも脱皮と活動休止を繰り返すカイコのような人生」と振り返っていますが、事業家として自立した活動が始める時期までを対象に、幕末から明治維新後の疾風怒濤の世の中を必死に渡りきろうと「脱皮し続けた」日々を描いているとも云えます。

読書会では、こうした渋沢栄一の前半生を紐解きながら、『論語と算盤』に象徴される「道徳と経済の合一理論」について話し合いました。特にエピソードとして有名な三菱創始者・岩崎弥太郎との「向島夜話」を取り上げながら、対照的な二人の価値観や経営思想について掘り下げることに。財閥を形成できるだけの十分な実力を持ちながら、その道を選ばなかった渋沢栄一は「個の利益より公の利益を優先すること」を体現したわけですが、この「公益優先」の思想が「論語」に象徴される東洋哲学の世界観や倫理観に裏打ちされていることを確認しました。

その「論語」を産んだ中国が今や、国家体制としては共産党による一党独裁政権を堅持しながら、最も成功した資本主義国と云われるほどの経済大国となり、情報 IT 革命の成果である最先端技術を駆使しながら米国を筆頭とする民主主義陣営と対峙しています。「論語のふるさと」が独自の「公益観」で君臨する複雑怪奇な現代だからこそ、渋沢が大切にしたい「永世不変」の経営哲学を今一度、見つめ直す意義はあるのだと実感できました。

(2) 第2回(9月19日):『そうか、もう君はいないのか』(2007年)

読書会の開催頻度は当初より2カ月に一度としていました。これは私が参画していた墨田区立図書館での読書会が毎月開催で、課題図書の読み込みが結構大変だったことから間隔を広げたものです。そして第1回の終了時に、8月ではコロナに加え猛暑も予想されたことから、今回は9月下旬に開催と決めていました。

課題図書は遺作に相当する『そうか、もう君はいないのか』(新潮社)。このエッセイは、最愛の容子夫人を突然に亡くした悲しみから執筆意欲を喪失していた城山氏が、夫人との出会いからの記憶を呼び起こすことで自身を奮い立たせつつ、夫人への想いを鎮魂の言の葉として紡いだものです。実際には次女の井上紀子さんが新潮社と協働で未完の遺稿を纏めたもので、経済小説のパイオニアとしてクールな印象のある城山さんが「仕事と伴侶に恵まれることが人生の幸せ」と言い切り、そのベターハーフへの終生不変の愛情を包み隠さず吐露した内容となっています。

2回目の課題図書に遺作を選ぶのが妥当かと問われそうですが、選択した私の意図としては、城山さんの没後、本作を基にTVドラマ化された追悼番組を視聴することで城山さんの人物像理解に繋がりたいと考えたからです。私が所属する墨田区の読書会でも、小説等が映画化されている場合に、映画鑑賞と原作の読書会を前後して開催するケースがありますが、今回は原作に登場する主要場面をドラマ映像で確認しながら読み進める「メディアミックス読書会」になりました。

映像作品は2本。TBS系で放映された同名タイトルのドラマは城山役を田村正和、夫人役を富司純子の美男美女コンビで固め、今年七月には田村正和の追悼番組として再放送されていました。もう1本はNHK特集『ただ一人、おいと呼べる君へ ～城山三郎 亡き妻への遺稿～』。こちらの城山役は高橋長英、夫人役は岩井友見のキャスティング。TBS版に比べ少々地味ながら、個人的には配役のリアル感に勝る後者が好きで、読書会ではこちらを視聴しました。

TBS版は、どちらかと云えば夫婦間の純愛物語に重点が置かれ、「唯一の夫婦喧嘩」と云われる紫綬褒章受章

拒否エピソードがカットされているのに対し、そこを詳細に描いた NHK 版は城山氏の生きざま描写に力点が置かれています。氏の「(勲章に象徴される)国家というものが僕には信じられない。作家にとっての勲章は熱心な読者の存在で十分だ」の言葉が爽やかに響き、当初は受章拒否する夫を非難した容子夫人を納得させます。また最晩年の活動として印象的な「個人情報保護法案への反対運動」も後者では実写映像を伴い登場します。「国家に裏切られた軍国少年」城山三郎の「絶対に二度と戦争を起こす国にはならない」との強い信念が映像上でも浮き彫りにされていました。

なお、城山さん自身は学生時代に洗礼を受けたとされていますが、作家として独立以降、教会に所属した経緯は把握できませんでした。夫人の逝去時も、葬儀や墓は不要だと主張し親族を困らせたこと次女紀子さんが記しています。ドラマでも仏式で葬儀が営まれていたほか、七回忌を迎えるまで茅ヶ崎の仕事場のデスク脇に、夫人の小さな遺影と天使一對のロウソク立てを置いただけのささやかな祭壇を祀っていますが、宗教色は殆どありません。勝手な推測ですが、ご自身の中ではキリスト教の存在は小さくなっていたのかも知れません。

読書会では、終戦直後の名古屋市図書館での偶然の出会いから、静かに熱愛を育み周囲の反対を押し切って結婚するまでの経緯や、新居を構えた土地に因んで「城山三郎」のペンネームを使い始めるも、文壇デビュー後の地方での人間関係の煩わしさを回避するために茅ヶ崎へ転居、海に近い静謐な環境で幾多の名作を綴り続けた作家人生について語り合いました。城山氏にとって容子夫人は、最初の邂逅を「天から妖精が落ちてきた」と形容するほどに一目惚れした「守護天使」であり、その恩恵なくして作家としての成功は果たされなかったと思われます。

一方、容子夫人は夫が執筆活動に専念できるよう心を砕きつつ、持ち前の天真爛漫さで、とにかく根を詰めて陰気になりがちな城山氏を大いに笑わせ、健やかな家庭生活を支え続けました。最近のコロナ禍で在宅勤務が当たり前になる中、同じ空間で過ごす時間が長期化することから夫婦間のトラブルが多くなりがちとの報道もありましたが、在宅勤務が常態の作家生活において、少なくとも城山ご夫妻は互いのテリトリーを弁えつつ、適度な距離感を保って支え合っていたと思います。

(3) 第3回(11月14日):『落日燃ゆ』(1974年)

昭和49年に新潮社より刊行された本作は、前掲の通り、毎日出版文化賞・吉川英治文学賞を連続受賞したことで城山氏の声価を確固たるものにした記念碑的作品です。主人公の広田弘毅は太平洋戦争敗戦後の東京裁判にて唯一の文官出身者として絞首刑になる元総理大臣で、第1回の『雄気堂々』と同じく伝記小説ですが、第3回のテーマとしては、若き日の城山さん自身が体験し、その後の人生を決定づけた「戦争」について深く掘り下げることが狙いとしていました。

明治11年(1878年)に福岡市内の石屋の長男に生まれた広田は、修猷館中学・旧制一高を経て東大に進学。三国干渉を契機に外交官を目指します。一高時代に「弘毅」と改名したのは、論語の一節「士は弘毅ならざるべからず」から。外交官同期生の吉田茂とは良きライバルながら、その後半生は対照的な人生となりました。

広田は欧米局長やソ連大使を歴任後、斎藤実内閣の外相として初入閣(昭和8年)。次の岡田啓介内閣でも留任しますが、二・二六事件で岡田内閣が総辞職した後、第32代首相の座に就いたのは57歳の時。就任の際、平民出身の広田は昭和天皇から「名門をくずすことのないように」との含み多い言葉をかけられます。

中国への侵略が本格化する中、第一次近衛内閣で再び外相に就任。この内閣で「国策の基準としての国防方針」策定に関与したことが東京裁判で有罪判決を受ける主因となりました。しかしながら、外交官時代には戦争回避のために奔走していたことも記録上明らかで、国内外の関係者から有利な証言を得ることは可能であったにも関わらず、静かにA級戦犯としての訴追を受け入れ絞首刑となりました(享年69歳)。

「自ら計らわぬ」「外交官は自分の行ったことは後の人に判断してもらおう。それについて弁解めいたことはしないものだ」等々の発言通り、広田自身が残した著述物も少ないため、城山氏も遺族からの聴き取りに長い時間を要するなど広田の人物像を描き出すことに大変に苦勞したそうです。

読書会では、その人物像について意見交換した後、東京裁判で弁明しなかった理由や、当時の時代背景と広田の考え方について語り合いました。広田が極刑を受け入れた点については、昭和天皇の戦争責任の一端を率先して肩代わりすることで天皇本人に責めが及ぶことを防ぎたかったから・・・との意見も聞かれました。

個人的には、首相就任以降の広田は軍部の暴走を止める有効策が執れないまま不作為を積み重ねた結果、戦争拡大を招いた点で「有責」なのは仕方ないと思いますが、無謀な戦争を徒に推進し国民を欺き続けた東條英機ら軍部首脳陣と一緒に断罪されることは不本意だったろうと推測しつつ、それでも結果責任を潔く受け入れ絞首台に向かった広田は、文官でありながら武官以上に「サムライ」の気概を示した人物だと感じます。

因みに、城山三郎の戦争文学としては、初期の『大義の末』『一步の距離』に始まり『硫黄島に死す』など数多くの作品が残されていますが、最晩年の長編小説『指揮官たちの特攻』も私の好きな作品の一つです。

ご自身が戦争末期、工業専門学校生の特典である徴兵猶予を自ら捨て去り「特別幹部練習生」として志願入隊した先は、既に連合艦隊が消滅した海軍。残された手段として潜水服を着て本土上陸する米軍舟艇に肉弾攻撃する「伏龍」部隊に配属され、「消耗品」として海の藻屑と消える一歩手前で終戦となり命を長らえただけに、国家権力が多くの有能かつ有望な若者たちを無闇に「使い捨てた」特攻作戦への憤りは人一倍強いと感じます。

『指揮官たちの特攻』には、玉音放送が流れた後に最後の特攻隊として出撃していった大分航空基地隊が描かれています。基地司令官が敗戦の事実を特攻隊員たちに伏せたまま、自らの死に場所を求めて出撃する際に結果的に彼らを道連れにした史実は、戦争の理不尽さや非情さの極みであり、それを見事な筆致で人間ドラマ化したのは、城山文学の一つの到達点であると讃してやみません。

コロナ禍の長期化により、初年度読書会は半年間に亘り計3回で終了となり、採り上げた課題図書も三作で終わりましたが、参加者が読み込んできた関連作品の情報等も意見交換できて、少ない回数ながらも有意義な時間

を過ごすことが出来ました。

ただ一点、残念だったのは、毎回の企画を寮生に案内しながら、初年度の参加者が皆無だったこと。次年度の参加を期待しながら年を越すこととなりました。

なお、城山作品の内、寮生への推薦図書として『花失せては面白からず 山田教授の生き方・考え方』(角川文庫)を挙げておきます。最近でも蓼沼前学長が入学式で度々、同書に登場するエピソードを引用しつつ母校ゼミナール制度のことをアピールしていましたが、寮生時代の記述も多い城山版「学問のススメ」を是非一読してみてください。

4. 2021年度取り組み状況について

新型コロナウイルス感染症は、2020 年秋には一旦収束に向かう兆しが見えたのですが、年末年始には再び爆発的な感染拡大となり、年明けには 2 回目の緊急事態宣言が発出される事態となりました。これを受けて読書会も春頃からの再開を念頭に置きながら様子を窺うことになりましたが、課題図書は既に決めていました。

それはイスラエルの歴史家、ユヴァル・ノア・ハラリ氏の『サピエンス全史』(漫画版:河出書房新社)です。単行本は6年前に刊行され、世界中で2千万部を売り上げた大ベストセラーですが、翻訳版で上下2巻の歯応えある大部だったところ、2020 年秋にダイジェスト版としての漫画版が原作者監修の元に刊行されました。

アメコミ的な画風で分かりやすい描写に着目しましたが、それでも「現代版・創世記」と評されるほどの中味の濃さから2回に分けることとし、第1回(前編)を3月27日、第2回(後編)を7月17日に開催しました。主宰者にとって嬉しかったのは各回ともに寮生が参加してくれたことです。3月の回では卒業目の北田君が、7月の回では4年生の弓場君・小林君が参加してくれて有意義な議論を盛り上げてくれました。

「ホモサピエンスがヒト種の中で生き残った理由は、宗教に象徴される『虚構を信じる認知革命』が進んだこと」や「現代において最も成功した宗教は『資本主義』であり、生態系や地球環境に負荷をかける経済成長を最高の善と尊ぶ『教義』を見直さない限り、早晚、人類は行き詰まる」等のメッセージをじっくり味わうことが出来ました。

年度後半は LGBT 問題を考察することとし、秋には yahoo 本屋大賞(ノンフィクション)を受賞したブレイディみかこ氏の『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』(新潮文庫)を取り上げます。11月にはゲイであることを公表している中村吉基牧師(日本基督教団・代々木上原教会)による講演会を、寮生主催による一橋祭企画として実施する予定です。当初は読書会の番外編的な小規模講演会の予定でしたが、この問題は 2015 年に「一橋大アウティング事件」(*)を起こした当事者大学として真摯に向き合うべき課題であり、本件についてキリスト者として発言している中村牧師の言葉に耳を傾けて欲しいとの私の提案に賛同してくれた寮生皆さんに感謝致します。

(*)一橋大アウティング事件

2015 年4月に、一橋大学法科大学院において院生 A 君が友人 B 君に恋愛感情を告白したところ、困惑した B 君が6月下旬、友人間のグループメッセージで A 君が同性愛者であることを一方的に暴露(アウティング)したことがきっかけとなり、A 君が心身に変調をきたし、同年 8 月 24 日にマーキュリータワー6 階から転落死した事件。

翌年、A 君の両親が B 君と大学の責任(A 君から相談を受けた教官や保健センター等の対応)を問う損害賠償請求訴訟を起し、B 君との間では 2018 年 6 月に和解が成立した。一方、大学を被告とした訴訟では東京地裁(第一審)は「大学側は A 君の転落死を予見できず、安全管理義務違反は無かった」として遺族側の請求を棄却(2019 年 2 月)。控訴審(2020 年 11 月)でも一審同様に遺族側の請求は棄却されたが、判決の中でアウティングについて「人格権ないしプライバシー権などを著しく侵害するもの」と言及。その違法性を認めた日本初の判決となった。なお、この間に国立市は全国初の「アウティング禁止条例」を制定している(2018 年 4 月)。

5. 読書会の今後について

この二年間、私が寮生の参加を求め続けたのは、将来的には「YMCA 読書会」を寮生による主催行事にしたいとの希望があるからです。発足時の主旨としての「市民に開かれた行事」は、法人としての課題であると同時に、地域の社会資源とも云える YMCA 寮において、その住人である寮生が主体的に取り組むべき課題でもあります。4年間という短い期間だからこそ、寮生だけの内向きの活動に閉じこもることなく近隣住民との交流も視野に入れて欲しく、早期の運営移行に向けた検討を始めて貰いたいと思います。

最後に、産声を上げた YMCA 一橋読書会を天上から城山三郎氏に見守って頂きたく、氏が敬愛した経済学者パレートが好んだ箴言を記しておきます。

「静かに行く者は健やかに行く 健やかに行く者は遠くまで行く」

一橋 YMCA 寮の前に立つ学生服姿の杉浦英一(城山三郎)



2020 年度一橋祭講演会報告

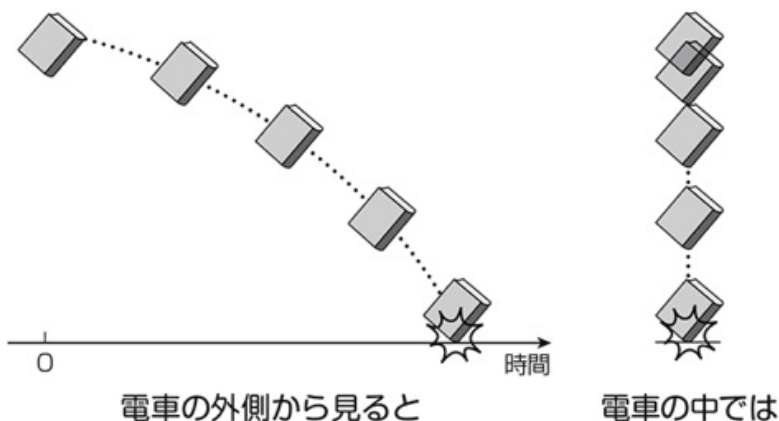
商学部 3 年(当時) 鳥居大朗

2020 年 11 月 23 日、大学の講義棟にて大貫隆氏の講演が行われた。新型コロナウイルスの影響により大学関係者以外のキャンパスへの入構が原則禁止となったことから、今回は初の試みであるオンライン講演という形をとる事となった。事前に録画した大貫氏の講演を YouTube LIVE と Zoom で配信し、その後視聴者からの質問に大貫氏が Zoom で答えるというものである。準備に手間取り開始が遅れる、PC の通知音が誤って入ってしまうなどトラブルもあったが、講演自体は問題なく進めることができたと思われる。

大貫氏は 1964 年に一橋大学社会学部に入学し、後期には M・ウェーバーの宗教社会学を専攻、中でも理解社会学という「物事の内側と外側の両方を統合する研究」を行う分野について学んだ。卒業後に就職したが、研究への情熱から 2 年で退職し、東京大学大学院の修士課程に転進。それ以降およそ 50 年に渡ってキリスト教分野での研究・教育の道を進んでいる。

今回の講演のテーマは「聖書の読み方」であったが、大貫氏が用いた一つに「電車」の例えがある。聖書を「電車」に例え、そこに「乗ってみる勇氣」と「降りてみる勇氣」の両方が必要だとした。乗ってみるとは聖書の「内側」から読むこと、降りてみるとは聖書の「外側」から読むという事である。自身の出版した『聖書の読み方』(2010 年、岩波新書)の中でも、電車の中で本を落とす様子を電車の外から見た図と中から見た図を用いて、内側からの見方も外側からの見方もどちらも正しいものである、という説明がなされている。(下図)

これは聖書とキリスト教だけに当てはまるものではなく、あらゆる価値観、立場についても同じことが言えるとし、この「相対性理論」を忘れない事の重要性を述べて講演を締めた。



大貫隆『聖書の読み方』(2010 年、岩波新書)より

以下、講演後に出た質問を抜粋

Q、電車の例で、信仰の内側からしか話さない人とどのように歩みよればよいのか？

A、基本的に難しい。そのような人々は「外側から見る」ことの意味が分かっていないので、まずその意味が了解されるのを待つしかない。

Q、聖書を聖典として読むことと、人文学的に読むことの差は何か？

A、人文学的に読むとは、そこに反映されている人間の経験を踏まえながら理解すること。

聖典として読むとは既に完成した教えとして受け止めること。

Q、初学者は電車に乗る事を目指せばよいのか？

A、焦って乗ろうとする必要はない。十分に自分で納得した上で乗ればよい。

付記

儀賀裕理(昭 46 年商卒)

講演会報告について鳥居君が簡潔に纏めてくれたので、この企画を提案した私からも若干、補足させていただきます。

【経緯】

先ず、今回の一橋祭講演会に至った経緯を説明させていただきます。当初、大貫先生には2020年初春のYMCA 寮ホール柿落し記念会での講演をお引き受け頂いていましたが、竣工遅延や新型ウィルス感染懸念が重なり開催中止を余儀なくされました。更には同年6月に開催を予定されていた当法人年次総会での講演を企画したのですが、感染拡大が本格化したため、結局、この企画も断念せざるを得ませんでした。

こうして大貫先生講演企画は暗礁に乗り上げたのですが、同年8月下旬になり、一橋祭がオンライン開催されることを知った私は早速、齋藤理事長と相談し、大貫先生にもご了承頂いた上で、寮長の今川君に一橋祭参加の可能性を打診してもらいました。しかしその頃は未だ一橋祭運営委員会も手探り状態だったようで、参加の可否やスケジュール枠を確認出来たのは既に一橋祭まで一ヶ月を切った10月下旬でした。講演会直前まで視聴方法や段取りが判明しないことで、事前に十分な告知が出来なかったことは今も心残りではありますがそれでも、今回を逃すともう来ないであろうチャンスをよくも活かせた感慨も一入です。

【寮生の活躍】

その後のメール交信や打ち合わせを経て、当日は先生のご体調に配慮し、講演自体は事前録画とし、講演後の質疑応答のみを一橋大学教室内からライブ配信することになりました。押し迫った状況の中で今川寮長が一橋祭運営委員会と協議を重ね、また寮生有志の気運が高まり、当日は多くの寮生が協力・参加してくれました。特に、質疑応答時間は視聴者からも質問が寄せられ、進行役の松原君の巧みな対応もあって、オンラインなりの臨場感があったのが印象的でした。先生の著書「聖書の読み方」を予め読んで参加した寮生達からは主題に迫る問題が提起されました。

【講演内容と意義】

講演中、大貫先生が「電車」の譬えで説明された要旨は、聖書を読むに際しては自らを敢えて相対化し、キリスト教という「電車」に乗っている人は一旦降りて（教義や釈義を離れて）「外側」に立つ勇氣が必要になる。一方、「電車」に乗っていない人は聖書の構成や背景を把握した上で、キリスト教の「内側」に立って検証することが大切だということだと思います。当日の講演の後半で先生は、コリント人への

第一の手紙8章1～12節のPDF画面で、コリント教会における（律法からの）自由の知識（gnosis）が、未だ自分自身との一致に至っていない求道者たちの「良心」を無視して、（律法への）良心を凌駕し始めている状況のただ中で、パウロ自身が如何に「内側」と「外側」を往来しているかを縷々解説されました。そして最後に、この「相対性理論」を聖書とキリスト教に限定することなく各自の人生を切り開くようにとの勧告をもって講演を終えられました。

ところでYMCA一橋寮では幸い今も寮生による聖書研究会が続けられています。聖書を手掛かりとして自由に疑問、意見、感想をぶつけ合うことでそれなりに充実感や関心が芽生え、この活動が継承されているのだろうと推察しますが、反面、寮生たちがどのように聖書を読んでいるのかも私の関心事です。是非、これを機に大貫先生の「聖書の読み方」を踏まえて聖書研究会を続けてもらいたいと思うと同時に、従来のやり方をただ踏襲するのではなく、毎年、寮生間で目標や自分たちなりのやり方を考えてもらうことも大切なのではないかと思います。

【あとがき】

最後に、先生の学者としての一端が窺えたエピソードを披露させていただきます。当日の質疑応答での最初の質問は「コロナ禍で先生のお薦めの聖書箇所はどこですか」というものでした。先生はしばし黙考され、結局、お答えは無かったのですが、帰路、熟慮されたようで、私からの礼状に対する返信メール末尾に、あの質問を「気にかかっているフレーズは何か」と置き換えてよければ、創世記1章31節（「神は、造ったすべてのものをご覧になった。それは極めて良かった。」）をどう受け取ればよいのかを問いたい旨の添え書きがありました。牧師さんや神父さんなら、もっと勇気づけられる箇所とか慰められる箇所等を選ばれるのですが、先生はあくまで聖書学者として、決して「良い」とは思えない（ウィルスのような）存在が創造されたという現実を共に考えていきたいとの気持ちを吐露されたのだと思いました。以上

【感謝の言葉】

儀賀さんもお書きのとおり、結果としていくつものハードルを超えての講演会となりました。それにもめげず計画を貫いてくださった一橋寮委員会の学生の皆さんの労苦と儀賀さんをはじめとする理事の方々の篤い志に、心から感謝申し上げます。卒業後半世紀余を経て母校の教室から語ることは、私にとって言葉にしがたい経験でした。講演の最後にいただいた質問のいくつかには、事実言葉を探すだけで終わってしまいました。しかし、それこそリアルな自分だったのではないかと考えております。皆様のご健勝を祈りつつ。

2021年8月11日 大 貫 隆

中国人民大学交流会実施報告

中国人民大学との交流会を ZOOM 方式で開催した。昨年はコロナ問題もあって、実施できなかったが、今回2年ぶりの開催である。2019 年には北京を訪問し、交流会を実施している。

実施要領は下記のとおりである。

記

1. 実施日 2021 年 10 月 23 日土曜日 午前 10 時～午後 1 時(日本時間)

北京時間午前 9 時～12 時

2. 交流方式 ZOOMTV 会議

3. 参加者一橋大学基督教青年会

今川明人、弓場耀平、橋田陽平、猪股梨玖、角 颯真、樋口祐熙 以上 6 名

中国人民大学(6 名)

罗天娇 女 经济学院 3 年级

李徽晗 女 经济学院 3 年级

杨丹妮 女 经济学院 3 年级

程一馨 女 经济学院 3 年级

许秀芬 女 经济学院 3 年级

刘越 男 经济学院 2 年级

指导教师:陈建 中国人民大学经济学院国际经济系国际贸易教研室 教授

4. 交流会プログラム時間割

10 時～10 時 10 分 開会挨拶 人民大学 陳建先生、齋藤理事長

10 時 10 分～30 分 人民大学参加学生自己紹介、一橋大学参加学生自己紹介

10 時 30 分～11 時 15 分 一橋大学 発表

テーマ Japan's Development Assistance

11 時 15 分～12 時 人民大学 発表

テーマ

①The Advantages and Disadvantages Analysis of Internet Giants Entering (the Community-based Group Buying Market)

②The New Double-cycle Development Pattern with the Domestic Great Cycle as the Main Bod

③Real Estate Bubble in China

12 時～午後 1 時 それぞれの発表のプレゼンに対する質疑応答及び意見交換会

5. 今回の交流会を振り返って

➤ テーマの選定について、今回一橋 Y は、外務省経済協力局審議官(当時、現在コロンビア大使高杉優弘氏)の指導により、日本の ODA について学び、それを発表した。内容としては経済学的分析を行いにくいテ

ーマで、現状がどうか、あるいは中国の ODA との比較とか、分析的な視点では今一つであったが、人民大学は6人の学生が3グループに分かれて、それぞれ①インターネットを利用した生鮮野菜の共同購入の分析、②中国経済の発展について、ネットとリアルの方両方で分析、③不動産バブルと多岐にわたり、かつPPのプレゼンテーション資料の作成についても一橋Yの学生が不慣れで、平板な資料になっているのに対し、グラフやツ図を駆使しての発表資料の差だけみても、その差は歴然としていた。また、英語力に関しても、一橋Yの学生は用意した自分の守備範囲の英語を棒読みしているのに対し、人民大学の学生はより使い慣れたもので、原稿棒読みではなかったのが、当意即妙なやり取りになったが、一橋Yは質問とかシナリオになり展開になるとどうにもならない、つまり使い慣れていないことが根本的な欠点として露呈する。英語での議論ややり取りに一言で言えば慣れていない、ということに尽きる。

- 成果としては、参加寮生の感想文でもあったが、こうしたことが大変良い刺激となったことは間違いない。コロナによりリアルな交流が控えられたが、他方、こうしたネット会議が気楽に行われることは、リアルでの機会が減った分、逆に増やすことも可能であり、かつコストがかからないメリットが大きい。時代は新しい交流のステージに突き進んでいると言える。
- 中国人民大学の陳教授のもとには、今年も一橋大学の他のゼミからのお声もかかり、当会との交流会を含めて、3回行われたとのことである。当会と人民大学の交流の原点は6年前に遡り、陳建先生との繋がりが基本であるが、一橋Yの学生諸君がこの伝統を守り、育てて行って欲しいものである。言い換えれば、こうした ZOOM での交流会は、年1回は実施し、維持発展させることを基本と致したい。
- なお、ここで一橋Yのこれまでの海外交流を振り返っておきたい。概要は以下のとおりである。
 - ① 2014 年 9 月 韓国訪問(韓国の教会及び韓国 YMCA 訪問(実際は先方との日程が合わず面談不可))
 - ② 2015 年 9 月 中国北京上海訪問(人民大学及び上海財経大学訪問)
 - ③ 2016 年 9 月 フィリピンマニラ ADB 及び香港訪問 同年 11 月 人民大学と上海財経大学の学生を招聘
 - ④ 2017 年 9 月 シンガポール、香港訪問
 - ⑤ 2018 年 9 月 インドネシアジャカルタ、香港訪問
 - ⑥ 2019 年 9 月 深圳、北京、杭州、上海中国巨大ネット企業訪問
 - ⑦ 2020 年中止
 - ⑧ 2021 年 10 月 ZOOMTV 交流会

(文責:齋藤金義)

中国人民大学交流会参加学生の感想文

社会学部 4 年 弓場燿平

今回は貴重な機会を頂き誠にありがとうございました。

私自身は国際政治学ゼミに所属しているので、一橋 YMCA 側の発表のテーマである「日本と中国の開発援助の比較」というのには意欲的に取り組みました。両国の援助の特徴はなんとなく知っていたものの、発表を準備していく中で具体的な数値や政策を学べてとても良かったです。

交流では兎にも角にも自分の英語力の無さを痛感しました。英語自体は好きなので、今後英語を特訓し、なんとか中国の学生に食いつけるように精進していきたいと思います。

商学部 3 年 今川明人

2年振りの人民大学との交流はコロナ禍ということでオンライン開催であった。対面で行ったことがある私はオンラインで行うことに少し懐疑的であった。本当にうまくいくのだろうかと不安であった。しかし、いざ始まってみると互いに意欲的であるという理由もあるが、何の心配もなく進めることが出来た。人民大学の学生は中国の最新のトレンドを抑えた内容で聴きごたえのある内容であった。今回を通して、オンラインでも対面と同じように議論をすることが出来るというのが分かったのが収穫である。ただ、かたい内容だけでなくプライベートな内容は対面の方が聞きやすかったと感じたので、来年度はぜひ対面で行ってほしい。

商学部 3 年 橋田陽平

今回の中国人民大学を通じて強烈に感じたことは、焦燥でした。2年前に感じたことを今回の交流会を通じてそれから何も変化していない自分を再確認し、強烈な焦りを感じました。コロナの大流行という言い訳を盾にして主体的な活動を怠っていたのは自分たちだけではなく、多くの大学生に当てはまると思います。しかし、中国の学生との交流を通じて言い訳などは通用しない絶対的な差を感じました。コロナは日本にただ遅れをもたらしただけのようにも感じました。また、寮の在り方にも改善の余地があるように感じました。上級生は今までであったことからやること、すべきことを判断しがちです。しかし、これからはそのような前例にとらわれない下級生がやりたいことを提案し、上級生がそれを手伝う、参加するという形があっても良いのではないかと思います。

法学部 2 年 猪股梨玖

今回の人民大学の学生との交流会では英語のプレゼンテーションやディスカッションをしたのですが、向こうの学生の英語力に驚いた一方で私は1年近く英語を話していなかったのもあって思うように話せなかったのも、改めて話す能力を上げなければいけないなと思いました。また、寮のPCを使うことになったのですが上手く動作しなかったため、予めチェックすべきだったことも反省点です。

商学部 2 年 角颯真

一年間の長期留学のため英語の勉強をしていた成果もあり、人民大学の学生と積極的に会話することができて良かったです。しかし、彼らのプレゼンは英語面、内容面ともに非常にレベルが高く、理解が追いつかないところがありました。また、中韓の若者は日本の若者と比べると英会話ができるということは聞いていたものの、彼ら全員の流暢な英語を聞いて、世界レベルで見るとやはり自分の英語力はまだまだだと実感しました。これからも毎日英語学習を積み重ねていくと共に、英語学習者の寮生を集め「英語を話す会」のようなものを企画できればと思います。

社会学部 1 年 樋口祐熙

初めは軽い気持ちで参加しましたが、テーマが馴染みの薄い分野でもあったことから、想像以上に学習と準備が滞りました。先輩方の助けのおかげで、なんとか当日を迎えることができました。当日は、自分のパートを話す以外はただ聞くだけになり、人民大学側の学生のハイレベルな内容や英語のスピードについていけず、力不足を痛感いたしました。また、私は少しだけ中国語を話せるので人民大学側と中国語で雑談もしてみたかったです。

が、時間上できず残念です。ただ全体として文献を読み、調べ、まとめ、パワポを作り、話すと言う作業は大変貴重で今後の役にも立つと信じています。来年以降機会がありましたら中国語でのプレにも挑戦してみたいです。ありがとうございました。

夏季修養会実施報告

修養会参加 寮生今川(4年)、松原(4年)、桑江(3年)、岩崎(2年)、角(2年)、松尾(1年)

以上6名の寮生が参加

1. 日程 9月4日～6日(2泊3日)
2. 開催場所 1日目、YMCA 一橋ホール、1日目午後から3日目までは長野県奥蓼科 橋本山荘
3. プログラム

9月4日午前10時～12時 YMCA 一橋ホールにて、ルーテル教会引退牧師 江藤直純先生による講義「ルターの心を生きる」

ZOOMでの配信により、OB参加者は宮岡、儀賀、加藤、長瀬、関、佐藤(周)、齋藤(金)

講演は1時間にわたり、そのあと、質疑応答があり、寮生から多くの質問疑問意見が出され、予定時間を大幅に超え、午前11時50分に終了。宮岡さんからは、会報には特に質疑応答の箇所を載せて欲しいとの意見が出された。

講演会終了後、立川のニホンレンタカーで軽乗用車を1台借り受け、4年生の今川君、松原君、2年生の岩崎君らが交代で運転し、齋藤の乗用車に3名(松尾、桑江、角)が乗車、奥蓼科の山荘を目指したが、途中、雨が降り、かつ奥蓼科の道路での重大事故が発生したことで迂回路を余儀なくされるなどにより、軽乗用車の学生運転の車が道に迷い、山荘に到着したのが8時半過ぎと、当初の予定を1時間半遅れ、温泉入浴を諦め、夕食となった。夕食は、出来合いのトンカツ、シュウマイ、餃子と最後はスパゲッティと寮生の旺盛な食欲で全部、平らげた。その後、炊事当番をきめ、寮生が後片付けし、そのまま就寝。

9月5日は、午前6時半起床、朝食は出来合いのピザを温め、スープとハムなど洋食。

9時から、理事長司会、奨励により開会礼拝を行い、賛美歌6番、旧約聖書コヘレトの手紙(11章9～12章2節)とヨハネ福音書12章23節～28節)を輪読し、祈祷のあと齋藤の奨励があった。

10時から、昨日の江藤兄の講演の続きとして、主に寮生の質疑応答を再度、確認しながら、理事長がモデレーターとなり、約12時まで、意見交換を行った。

お昼には、小淵沢の桜井直文氏が来られ、桜井氏を含め8人のランチ会。メニューは中村屋の辛口チキンカレーライス、寮生からは普段、具のないレトルトカレーであるが、これはチキンも野菜も具沢山で美味しいとのコメント。福神漬けとラッキョウも良く売れた。

午後は、桜井氏をモデレーターにして、予めレポートを決めておいたとおり、「ヨーロッパ思想入門」をテキストに、発表者 岩崎君、今川君「ギリシャの思想」 角君、松原君「ヘブライの信仰」 松尾君、桑江君「ヨーロッパ哲学のあゆみ」と順次発表しながら、桜井先生による解説と質疑応答が行われた。このテキストはあまりにも網羅的で、内容が少なく、受験の倫理社会みたいなことで、議論の焦点が定まらにくかったが、寮生にはヘブライの信仰は親しみやすかったと思われる。

4時過ぎには、お勉強は終了、明日の登山に備えてスーパーマーケットに買い物、サンドイッチやおにぎりを購入、帰りがけに横谷温泉旅館のお風呂を満喫、源泉かけ流しで清流が流れる良い風呂であったが、入浴料は一人 1,500 円と割高であった。

夕食後、山荘に戻り、その日は桜井氏を含め8名でのバーベキュー、寮で購入したコンロと齋藤持参のコンロ2つで早速焼肉、和牛 A5 の高級牛肉に寮生諸兄も大喜び、和牛だけでは予算が持たないので、ソーセージと豚肉ロースの増量剤を混ぜ合わせて、スーパーで購入した地元トウモロコシや温野菜、生野菜で皆さんご満足、食事は焼きそば6人前が全部平らげられた。これも予想外。

桜井氏差し入れの長野の銘酒、七賢人の一升瓶も、最近良いことづくめでご機嫌の今川君を中心に全部飲み干し、これも桜井氏差し入れのアップルパイも全部、食べつくされました。

4～5 日と雨が降る中、6 日は久しぶりの青空、登山は当初蓼科山に登る予定であったが、バイトのある寮生や午後早々予定のある桜井氏の日程を考慮、標高 22 百メートルある麦草峠まで車で行き、そこから 23 百強の茶臼岳登山にルート変更し、8 時に出発、9時から登り2時間弱で山頂に到着、記念写真、そして帰りは迂回ルートで3時間かけて下山、午後2時過ぎに麦草峠に到着、車に乗った瞬間、大粒の雹に見舞われ、下山後でしたのでラッキーでした。山荘に戻り、桜井氏がここでお別れ、残る7名2台の車に分乗し、登山で汗をかいたあと、小淵沢近くの鹿野湯温泉、ここは入浴料700円とリーズナブルで、ゆっくり温泉に浸かって帰路についた。温泉に行く途中、原村の農協で留守の寮生に地元のトウモロコシと枝豆をお土産に購入しました。

4. 会計報告 費用総額 196,349 円、参加費を差し引いたネット費用 161,349 円、寮生一人 28,179 円(参加費 5 千円を含む)。なお、修養会予算 15 万円で予算オーバーとなったが、江藤氏講演料 22,274 円を理事会負担とし、寮会計負担を 139,075 円と致したい。

(文責:齋藤金義)

夏季修養会参加学生感想文

商学部 4 年 今川明人

去年就活の影響で参加できなかった修養会に今年は参加することが出来て、非常に貴重な経験を得たと感じている。普段の日常生活ではすることがない寮生との真面目な会話をしたこと・キリスト教徒である理事長・江藤先生・桜井先生(ノンクリスチャンではあるが哲学者)方と非キリスト教者である寮生とでキリスト教に対しての考え方を議論することが出来たこと(基本的には考え方をご教授して頂く形ではあった。)が収穫である。今回の修養会で印象出来だったことは、ルターが自己中心性を受け入れた上で、受動的な神からの救いを望んだということである。私は昔から、ボランティアや席を譲るという行為が社会的価値を向上させるためにやっている偽善なのではないかと考えておりそのような人たちを懐疑的に見ていた。しかし、今回のルターの話聞き、自己中心的な気持ちを抱くことは人間として避けることが出来ず、これらの思いを飲み込んだうえで社会的に善とされる行為を受け入れていこうと考えた。最後になりましたが、齋藤理事長・桜井先生・江藤先生この度は我々学生のためにキリスト教に触れるという機会を設けて頂き感謝申し上げます。

社会学部 4 年 松原悠紀

桜井先生、江藤先生の両先生に直接疑問をぶつけることができた点が今回の修養会の醍醐味だったと思う。特に、江藤先生に対して2年の岩崎がした質問「キリスト者に善行を強制しているのではないか」に対する回答が印

象的だった。桜井先生とは食事や温泉、登山を共にし、キリスト教についてのみならず、先生がどのような学生だったのか、昔の一橋大学で思想を学ぶ学生の様子など興味深いお話を聞くことができた。また、夜に寮生と普段話さない真面目な話題について腹を割って意見交換することができたこともよかった。修養会が恒例行事になると幸いだ。

商学部 3 年 桑江竜威

あらゆる誘いを断って参加した修養会。そこで得た体験は、夏休みを締めくくるのにこれ以上ないものであった。江藤先生、桜井先生による講義、温泉、バーベキュー、登山、皆どれもこの夏の思い出を振り返る上で欠かせないものだ。非日常の中では、何気なく交わされる雑談まで性質を変えてしまうらしい。山の植物、外国の話、将来のこと…雑談の内容がとても三日分とは思えないほど記憶に残っているのが何よりの証拠だ。「大学三年の夏休みに長野の山荘に行ってきた…」数年後、数十年後こんな風に話したり思い出したりするのが今から楽しみだ。

商学部 2 年 角颯真

去年、まだ上京していなかったため残念ながら参加を見送った修養会についてに参加でき、充実した 3 日間を過ごせた。まず、齋藤理事長にいろいろなお話を聞けたことが幸いだった。牧師さん以外のクリスチャンの方とじっくり話すのが初めてだったが、理事長のお話を聞く中で、自分が持っていた疑問のいくつかが氷解したように思う。更に、現代では減っているものの、インターネットなしの環境でいろんなことを話しながら過ごす、というのもとても良い時間であると改めて認識した。

経済学部 2 年 岩崎友哉

昨年度に引き続き今年度も参加させていただいた。前回よりもキリスト教関連のお話が多く、そして参加寮生の人数も多かったことから、普段の寮では話さないような話題について腰を据えて寮生達と議論することができ、大変貴重で有意義な機会であった。しかし依然として完全には理解できていなかったり納得できていなかったりする部分もあるため、それらについては今後の聖書研究会や大学での学びの中で解消していきたい。今回の修養会では、山荘に Wi-Fi が通じていなかったり、山奥で道に迷ったり、雹に降られたり、下山中に水溜りに足を突っ込んだり、今川先輩が毎日のように嬉々として惚気話を語ったり、山荘が停電したり、と様々なことが起こり、あっという間の二泊三日であった。夏休みの最後にこうして寮生達と親睦を深める機会を得ることができ大変嬉しく思う。本修養会を企画してくださった理事長、『ルターの心を生きる』を題材に講演をしてくださった江藤様、『ヨーロッパ思想入門』についての講義及び意見交換会を行ってくださった桜井様には心から感謝する。

法学部 1 年 松尾圭祐

この修養会はとても楽しく有意義なものになった。特別講師を招いてのキリスト教についての学習や聖書研究や大学での授業での経験を自分より積んでいる先輩方の議論はかなり刺激的でまだ完全には理解できたとはいえないが多くのことを学べた。1 日目の江藤先生のルターについての講義でキリスト教における神や人間生活についてふわふわしたイメージしていたものがルターの言葉を通してしっかりとした形になってきたような気がする。2 日目のヨーロッパ思想についての講義では高校で学んだ倫理の授業をもう少し深い内容でキリスト教との関わりも学べて終わった後は頭を使いすぎて疲れたがかなり面白かった。3 日目は山登りで齋藤理事長は楽な山を登る

とおっしゃっていて気持ち楽に登り始めたが想像以上にきつい山登りだった。この修養会に携わってくださった方々ありがとうございました。

2021 年度一橋祭 『LGBT とキリスト教』(講演会) 実施報告

佐藤周一(昭 54 法卒)

日時: 令和3年(2021年)11月19日(金)14時半～16時半

会場: YMCA 一橋ホール(オンラインライブ配信)

参加者: 基調講演講師: 中村吉基(なかむら・よしき)1968 年金沢生れ、大阪芸術大卒業後、雑誌編集者等を経て神学校で学び直し、2004 年に新宿二丁目で教会を開設。現在は日本基督教団・代々木上原教会の主任牧師。近著『マイカルへの祈り』
意見交換会参加者: 唐澤健太牧師(国立のぞみ教会、中村牧師の神学校学友)、吉澤俊平君(法学部2年、LGBTQ+ Bridge Network 副代表)及び読書会会員1名(昭和46年卒 OB)並びに寮生7名+佐藤 (計12名/オンライン参加者除く)

基調講演『「ふつう」ってなに? LGBT とキリスト教』の講演要旨

*「LGBT」が社会的に認知された契機

2015年から施行された改正オリンピック憲章が契機。性的指向を含むマイノリティ保護が初めて文言化された。リオ五輪は直前だったため、象徴であるレインボーカラーが取り入れられたのは2021年の東京五輪が最初となった。(奇しくも「一橋大アウティング事件」が起きたのが 2015 年)

*日本国内での「LGBT」比率

自治体や広告代理店等の調査結果は2%～9%と幅がある。自認はしていても、種々の事情からカミングアウトが困難な人も多い。中間の4～5%が妥当な所だとすると、左利きの人や血液型 AB 型の人とほぼ同じ比率。40人学級に2～3名はいると考えるべき。

*「LGBT」に優しい宗教は?

仏教が比較的柔軟。全日本仏教会は独自のレインボーマークを作り各地で相談会を開いている他、同性愛カップルと一緒に入れる墓も出来ている。特に「創価学会」は熱心で、新宿二丁目の「ママさん」達に信徒も多いが、他宗教・宗派とのコラボはしたがない。

キリスト教は長い間、同性愛を認めない立場であり、ローマ法王が3年前に同性愛者を容認する発言で注目を集めたが、解釈変更は道半ば状態。日本国内の牧師でカミングアウトしているのは数人に過ぎない。イスラム教は原理主義の立場では超保守的。同性愛に賛同する書籍を保有するだけで死刑になる国もある。アフガニスタンの女性人権抑圧が懸念されるのが象徴的。

*今後の展望

前国会で性多様性法案が超党派で提出されたが、自民党が消極的で廃案となった。仮に法律が施行されても、人々の意識が簡単に変わるわけではない。一番怖いのはマジョリティの無関心や無視。「アライ」と呼ばれる「多様性を容認し、共に生きることが出来る社会を目指す」人々を増やしたい。例えば、SDG'S のバッジと同様にレインボーカラーのバッジを付ける人が増えたら「LGBT」の人はより安心して生活していける。街中の店で云うと、「ドン・キホーテ」が最も「LGBT」への理解

が進んでいる。レインボーカラーのトイレ(性別区分なし)の導入などインバウンド対応で進んでいた。ハラル料理店が増えるように、徐々にレインボーカラーをロゴに使う店が増えている。

寮生・OB 合同 クリスマス会実施報告

下記のとおり、今回初めて新築された YMCA 一橋ホールにおいてクリスマス会が行われた。昨年、企画しながらもコロナで中止となったので、感慨はひとしおのものがあつた。最近卒寮された若手 OB の参加もあって、全体として OB の参加は少なかったが、ZOOM での開催も同時に実施され、第1部はクリスマス礼拝、第2部は祝会と大変有意義なクリスマス会であった。

記

1. 日時 2021 年 12 月 11 日(土曜日) 午前 11 時～午後1時半(受付午前 10 時半)

2. 場所 東京都国立市東 1-20-12 YMCA 一橋ホール

第1部 午前 11 時～11 時 30 分(時間厳守でお願いいたします)

クリスマス礼拝 説教者 宮寄 薫牧師(日本基督教団 国立教会)

第2部 クリスマス祝会 午前 11 時 45 分～午後1時半

(司会) 寮長下野治

3. 会費 OB2 千円 同伴のご家族ご友人 千円

寮生及び同伴の寮生友人 千円

(ホールでのケイタリング方式でのランチをご準備しております。)

4. 参加寮生及び OB、寮母様

学年	寮生氏名	学部	出身高校		堀地史郎 ご夫妻	S30	商学部
1年次	樋口 祐熙	社	灘高校	OB	儀賀 裕理	S46	商学部
	吉田 翔	法	市川高校		齋藤 金義	S46	経済学部
	松尾 圭佑	法	東筑高校		加藤 順	S47	社会学部
	猪股梨玖	法	室蘭栄高校		佐藤 周一	S54	法学部
2年次	岩切龍聖	社	鹿児島高等学校		滝沢 英一	S60法	東京海上日動火災
	岩崎友哉	経	甲陵高校		佐々木 有人	平7法	一橋総合法律事務所
	角 颯真	商	大手前高校		建内 瑛貴	平31法	
	高岡竜成	法	基町高校		佐々木 信	ゲスト	南町産業(商社)
	桑江竜威	商	開邦高校		原田 則子		
3年次	下野治	経	大阪星光学院	寮母様	村越 三鶴		
	橋田陽平	商	石山高校				
4年次	今川明人	商	大阪星光学院				
	小林莉季	経	高崎高校				
	鳥居大朗	商	洛星高校				
	松原悠紀	社	明和高校				
	弓場耀平	社	池田高校				

(文責: 齋藤金義)

理事会だより

- 2021年度の評議員会及び理事会及びYMCA 活動行事は下記のとおり実施されました。

理事会・評議員会・主な行事の実施状況			
日時		会議及び面談の名称相手先	目的内容・場所
2021年	3月21日	理事会 収支予算書及び収益事業他	ZOOMTV会議
	3月28日	評議員会 収益事業について	YMCA一橋ホール及びTV会議併用
	5月30日	理事会 2020年度事業報告、同計算書類、監査、定時評議員会開催決議	ZOOMTV会議
	6月10日	理事会 新任監事及び新任理事候補の選任	ZOOMTV会議
	6月20日	定時評議員会	YMCA一橋ホール及びTV会議併用
	9月4～6日	夏季修養会	YMCA一橋ホール及び蓼科橋本山荘
	9月11日	外務省高杉経済協力局審議官と人民大学交流会参加学生との事前勉強会	ZOOMTV会議
	10月2日	理事会 同盟からの土地贈与に伴う登記時期について他	ZOOMTV会議
	10月23日	中国人民大学と寮生の交流会	ZOOMTV会議
	11月11日	東京都 公益法人担当と土地贈与、賃貸事業開始に伴う変更認定申請	東京都庁と理事長の協議
	11月19日	一橋祭参加 講演会(中村吉基氏、「LGBTとキリスト教」)	YMCA一橋ホール及びTV会議併用

- 上記の評議員会、理事会及び行事に関して、重要なポイントを以下ご報告申し上げます。
- 3月28日の臨時評議員会において、当会土地西側の土地を、金橋インタナショナル株式会社に使用貸借させ、毎年120万円の賃貸料収入を確保する事業計画について、評議員会において承認可決されました。
- これに伴い、長年懸案事項であった当会の土地1008㎡を公益財団法人日本YMCA 同盟から当会に無償贈与を受け、名実ともに土地を当会名義に変更する契約を、2021年10月に締結しましたが、その決議は2021年6月の定時評議員会において大枠が承認され、2021年10月2日の理事会で登記時期について、仮登記を2022年3月末、本登記を2023年3月末までに実施することが決議されました。仮登記、本登記と2段階で実施する理由は、土地名義変更に伴う登録免許税(国税)が不動産評価額の2%が課税されるため、当会の土地の評価額は245百万円ですから、約490万円の登録免許税を支払うことになります。そのため、同盟と協議し、これを2回に分けて実施し、負担をそれぞれ1%に軽減するためです。なお、東京都から課税される不動産取得税については、免除される見込みです。
- また、6月の定時評議員会において、女子寮の運営開始を行う基本決議がなされ、具体的には寮舎の東南にあります佐藤耕一様の邸宅(5LDK)の転賃を受け、これをシェアハウスとして5名程度の一橋女子学生を受け入れることで、担当理事が事業化に向けて検討しております。女子寮運営の時期や細目については、現在、佐藤様邸宅の明け渡し時期が早くて2023年末となり、場合によって更にこれが遅れることが見込まれますので、現在のところ、開始時期としては、2025年～26年になるものと思われます。

女子寮の運営開始は出来る限り急ぎたいとは考えておりますが、賃借人との交渉が難しい状況にあり、遅れることはやむを得ない状況です。一橋基督教青年会100年の歴史の中で考えれば、焦ることは無いのですが、やはりこれは急ぎたい課題です。この間、女子寮の在り方について、十分な研究を行って参りたいと考えております。

- なお、土地賃貸事業に関しても、東京都からこの収益事業の追加が、東京都から改めて認定審査を受ける必要があるとの指摘を受け、現在、この変更認定の手続きを実施中ですが、これも当初の予定から遅れております。来年、2～3月に賃貸が実施できるようにすべく、鋭意対応中です。
- なお、寮生のYMCA活動ですが、聖書研究は滞りなく実施されており、その他江藤直純氏や桜井直文氏のご協力を受けて夏季修養会をホールでの講演会と蓼科山荘での読書会を行い、また、中国人民大学とのTV会議方式による交流会を10月に、一橋祭は11月にLGBT問題とキリスト教というユニークなテーマでの講演会を実施しました。本会報にそれぞれ実施報告書が掲載されておりますので、詳細はそちらをご覧ください。
- なお、2020年度のご寄付金額は建設口が153万円、一般寄付金が206千円で、それぞれのご寄付者のお名前は下記のとおりです。ここに掲載し改めてご寄付に対して感謝の意を表したいと存じます。

建設口	一般口
瀧浦 雅子	高橋 眞司
加藤 順	加藤 順
川添 淳	齋藤 金義
崔 勇	伊東 新祐
堀内 晴来	白川 嶺
金子 衛	須部 道子
宮岡 五百里	三宅 勝三
諸遊 哲彦	山本 通
堀地 史郎	山藤 竜太郎
縄田 克之	大秋 英彦
齋藤 金義	
佐藤 弘毅	
山本 信義	
長瀬 潔	
岩谷 滋雄	
安藤 誠	
山本 通	
1,530,000	206,000

以上（文責：齋藤金義）

編集後記

昭 45 経卒 山本 通

本号の特徴は学生諸君の作品が充実していることです。以前は学生分の編集者が理事会に付度して、変なテーマを押し付けていたので、良い作品が出てこなかったのです。まったく自由に書いてもらうことにすれば、この通り読み応えのある作品の目白押し。嬉しい限りです。編集者の角颯真君、ご苦労様でした。

卒業生諸君の作品は、ちょっと違った雰囲気があって、みな味わい深いです。菅野さん・豊さん・淵辺さんの作品は、テューターとして奉仕して下さった土岐先生の面影を彷彿とさせます。小栗さんの作品には富田寮母様への感謝の念が溢れています。満井さんの作品は充実した社会人生活の概要をさりと描き、崔さんはその一コマを楽しく描いています。宮岡さんと堀地さんによる追悼文には、故人への熱い思いが込められています。一橋大学 YMCA の活動記録を見ると、理事を含む多くの卒業生が在学生の活動を支援している様子が手に取るようにわかります。これらの作品をお寄せ下さった卒業生の皆様に感謝します。また、執筆依頼などで骨を折って下さった編集委員の方々に感謝します。今年の編集委員の方々は、寺師並夫(昭 49 卒)、中山泰吉(昭 55 卒)、滝澤英一(昭 60 卒)、大溝日出夫(平 1 卒)、鈴木宗徳(平 3 卒)、小池善太(平 8 卒)、岡秀樹(平 15 卒)、杉山晶彦(平 18 卒)、岡本政之(平 28 卒)の皆さんでした。卒業生の皆さんにお願いしたいのは、これらの編集委員から執筆依頼があった場合には誠実に対応していただきたい、ということです。断るのは自由ですが、依頼を無視するようなことがあってはなりません。大事なものは、人と人との繋がりで。

最後になりますが、昨年の 72 号の「私の本棚」。弓削達先生の著書名は『ローマ帝国とキリスト教』であって『ローマ帝国のキリスト教』ではありません。考えられないような初歩的なミスなので、かえって見過ごしてしまいました。

訂正してお詫びします。

商学部 2 年 角颯真

会報 73 号の学生側担当を務めました、商学部 2 年の角と申します。今回、寮生の文章にはテーマの規定等は定めず、「3,000 字程度で書くこと」だけを条件に書いていただきました。そのため、様々なテーマの文章が集まり、また内容もとても面白いものになったと感じております。中には 5,000 字にも及ぶ大作もあります。彼らは連絡先を掲載していますので、そちらに感想やアドバイスをいただければ彼らもとても喜ぶと思います。今年も例年通りの YM 活動とは行きませんでした。それでも、夏季修養会や中国人民大学との交流会等、寮生が大変意義深い活動をできたことについては、斎藤理事長及びその他ご協力くださった方々に感謝する他ありません。本当にありがとうございました。近頃、新型コロナウイルス感染症は収まりつつありますが、時節柄寒くなつてまいりますのでお身体を大切になさってください。来る 2022 年が、寮生、OB の方々、その他寮に関わってくださった方々にとって良き一年となることを願っております。

会報第73号	一橋大学基督教青年会会報 第73号
発行日	2021年12月24日
発行者	公益財団法人 一橋大学基督教青年会
発行者住所	186-0002東京都国立市東1-20-12 YMCA一橋寮
電話(YMCA一橋寮)	042-849-8108
HP Address	http://www.hitotsubashiymca.or.jp/index.html
銀行口座(建設口)	三菱UFJ銀行本店 普通預金 0868291 公益財団法人 一橋大学基督教青年会
発行人	理事長 齋藤金義
編集人	山本通 角颯真
印刷・製本	株式会社 平河工業社